

萩原 雲 來 語 補

梵語入門

文法・文抄・字書

梵語入門正誤表

頁.	行.	誤. 或ハ脱. 或ハ不明.	正.
10	8	ē	e
”	”	ō	o
11	1	e, au,	e, ai,
12	24	ニ.	ロ.
14	6	𑖀	𑖀 或は 𑖀
”	20	ハ.	ト.
16	6	(a+i, ī) (a+u, ū) (a+r, ṛ) a+l)	削除.
”	7	(a+a, ā) (a+e) (a+o) (a+ar)	”
”	12	する	す
”	22	潤	潤へ
17	4	及び	等の
20	2	弓)	弓).
23	19	過受分.	過受分.
25	2	s.	s
26	11	する	す
”	15.16	ゆる	ゆる
”	17	する	す
”	25	分	分.
27	6	分	分.
”	7	分	分.
”	9	ぶ)	ぶ)の
28	1と2との間		格例法.
”	13	る.	る
”	14	る.	る
”	15	複	複.
”	16	ゐる.	ゐる

28	19	單	單
”	”	語	語幹
29	15	58.	削除
”	16	體	體
30	6	於	依
32	10	於	依
”	13	vārīnī	vārīnī
”	22	varīnoḥ	varīnoḥ
33	12	於	依
35	18	體	體
”	”	業	業
36	17	根	幹
37	9	むは語幹の階級的	むは格例法の語幹の
”	13	單	單
		男體呼	男體呼
38	2.3.4.5	業	業
		具	具
		中體業呼	中體業呼
40	4	pathān	panthān
”	14	呼	呼
”	24	男	男
41	11	mruduṣā	ruruduṣā
”	19	āḍudbhyām,	anaḍudbhyām,
42	4		直に
”	20		ṣoḍaśan.
46	16	此人	此
”	”	體	體
”	19	二	兩
47	18	幹	幹
48	7	kathamcana,	katham cana,

49	23	詩史	史詩
50	8		ātām
”	9	ethe	ethe,
”	16	する	す
”	17	sr(流るゝ)	sr(流る)
”	19	る	つ
51	20		rohāmi
”	”	rohavaḥ	rohāvaḥ
52	4	rohāvadai	rohāvahai
”	25		śrāmya
53	6	する	す
”	10	める	む
”	11	得る	得
”	13	daas	daśa
”	18		vyā
55	14	dviṣāthām	dviṣātām
”	23	liḍhve,	liḍhve,
57	22	śāstu	śāsatu
58	20	怖	怖
59	12	怖れ	怖
63	19	kurvmahe	kurmahe
64	2	karvāva	karavāva
65	12	する	す
”	17	名詞形容詞	名稱語
67	8	する	す
70	10	ゆる	ふ
”	11.12	へる	ふ
”	23	るゝ	る
”	25		śuśruvire

		(jagāma, jagama jagmiva jagmima	
72	5.6.7	誤 jagantha, jagamitha jagmathuh jagma	
		jagāma jagmatuh jagmulh	
		(jagāma, jagama jagmiva jagmima	
		正 jagantha, jagamitha jagmathuh jagma	
		jagāma jagmatuh jagmulh	
73	8	i	i と
"	10	dadiitha	daditha
"	23	babūvuh	babhūvuh
74	1	三	三
"	23	考)	考)
75	5	gra-hitr	grahitr
76	3	pyaite	pāyate
78	6	る	く
"	7.8	ゆる	ゆ
"	23	得る	得
79	2	得る	得
"	18	屈む)	(屈む)は
80	10	する	す
"	18	稱	稱
"	10	詞	詞
82	17	pach	prach
"	24	るゝ	る
83	18	又はにて	にて又は
84	1	る	る
"	4	taya	tavya
"	8	cint	cint
"	13	lābhya	labhya
86	4.5	prabodhya	prabodhya
89	22	終に	終る

90	15	sakhaduhkhe	sukhaduhkhe
(演習例)			
95	8	くる	く
"	"	する	す
"	9		anarthānām
"	10		eva
96	8	245	244
97	31	245	244
98	10	245	244
"	24		tajjanāti
"	25	245	244
"	27		(129 條の 18)
"	29	243	242
(文抄)			
99	2		Mahābhārata 3, 129. ¹⁾
"	34		¹⁾ Mārkaṇḍeya 仙が Yudhiṣṭhira
103	16	ca	śa
104	1	ca	śa
"	2		caṇḍaravo nāma śyālah
"	3		jihvālaulyāmagaramadhye
105	欄外	Lomaśa	Lomaśa
109	28		martyānām
"	29		lomaśa
"	36		bhārgavaḥ
110	30		jānāmi
"	31		somārḥavaśvināvetau
"	"		kṛtau
"	32		prakāśediti
"	33		sukanyāyāḥ pituścāsyā
"	34		mayaitadvihitam

110	35		prasādam
”	”		bhavatvevaṃ yathecchasi
”	36		bhārgavasya
112	21	VIII.	VII.
”	”		Pañcatantra 1, 5.
114	20		'vatarantamapaśyat
”	25		cakruḥ
”	27		sambodhyo
”	28		kauliko
”	29		bhagavan
”	30		yuktam
”	”		sarvāms
”	”		kaulika
”	30.31		kiyanmātrās
”	31		sudarśanacakreṇa
”	32		sarvāmsṭilāśah
”	33		rūpadharam
”	36		bhaviṣyati yaṭo yavasendhara
115	19		yuddhārtham
”	20		yuddhāya
”	21		vainateyaḥ
(字書)			
95	9	先だ	先だ
”	11	先だ	先だ
”	17	數.=數詞.(の次に下の句を加ふ)括弧内の數字は文 典中の條數を示す.	
96	8	より懸	—懸
”	14	雜	雜
97	9	anaparādin	anaparādhin
”	”	す;	す.

97	10	或	(或は)
”	15	涼	冷
”	24	際;	際;
”	25	atrāntale	atrāntare
”	26	別;	別;
”	28	(業.)	(...[業.])
99	14	arjuna.	arjuna.)
100	1	(爲.又は屬.)	(...に[爲.又ハ屬.])
”	7	(...に依.)	(...に[依.])
”	18	類	類の.
”	25	へる	へたる
”	27	[屬.]に	に[屬.]
”	”	に充	—充
”	28	足	—足
100	6	[業.]を	を[業.]
”	”	に	(...に[業.])
”	15	[業.]又は[依.]へ	へ[業.]又は[依.]
”	16	に來る.	(...に[業.]又は[依.]來る.
”	18	業.]に	に[業.]
”	18.19	に集まる.	—集まる.
”	19	に到る.	—到る.
”	23	逃る.	逃ぐ.
”	25	i	i'
102	2	dam	idam
”	3	indu	indu
”	7	ndhana	indhana
”	11	(pra+ 役.)	pra+ (役.)
”	20	iṣṭ	iṣṭ
”	29	iśvara	iśvara
”	”	訓諭.	訓諭.

103	14	役.	(役.)
"	19	aupārya	audārya
"	24	宮.	官.
"	"	同處.	同處.
"	25.16	の間	kaṅṭha (男) 頸.
104	7	kauīyas	kaniyas
"	11.12	[業.]を愛する,	を[業.]愛す,
"	12	欲	(....と[業.]欲
"	24	と[具.]共に	と共に[具.]
"	25	事す;	事する;
"	27		°lam nī
105	7	耳, 璫.	耳璫.
"	9	忿	—忿
"	13));
106	3	nanuṣa	nahuṣa
"	18	へる,	ふ,
"	"	士位.	士位.
"	19	へる,	ふ,
"	"	する;	す;
"	23	kṣama	kṣama
107	4と5の間		khalu (副.) 確に, 全 く, 實に; されば, 爾るに; 故に. na khalu 全く爾らず. khura (男) 蹄
"	29	つける.	つく.
108	9	Garuḍa	garuḍa
"	10	Viṣṇu	viṣṇu
"	"	°Karman	°karman
"	10と11の間		gras 1. 吞む, 吞食す.

108	18.19	捕へる,	捕ふ,
"	19	従へる,	従ふ,
109	1	人,	人
"	12	(役.) (屬.)	(役.)
"	16	なる.	なる.
"	17		する;
"	27	candrārḍ°	を別項とす.
"	28		dāmaṇi
110	1.2	る >,	る,
"	5	憂慮.	配慮.
"	10	る >;	る;
"	22	ala	jala
"	23	alaukas	jalaukas
111	8.9より	(....より[業.]
"	27	承知.	智.
"	28		
112	1	用ゐらる). (副.)	用ゐらる). (副.)
"	4.5	しき,	しく,
"	5	多き;	多く;
"	14	tiṣṭha	tiṣṭha
113	2	(....に[依.]	—
"	17	親;	視;
"	25	dśama	daśama
114	2	た.	た
"	9	誠す	誠す.
"	21	難さ.	難き.
"	23	dināddinam	を 22 行の毎日; の次下に進む.
115	12	捨き	捨て
"	27	を	(....を[業.]
"	29	sarmiṣṭhā	śarmiṣṭhā

115	30	edya	deya
116	15	°dhara	°dhara (形.)
”	27	看す.	看よ.
”	29	へる,	ふ,
118	6	漸く.	衝く.
”	16	yam	°yam
”	27	upa +	を少しく左へ寄す.
”	29	つる,	つ,
119	7	す).	す.
”	14	(93) (男.)	(男.) (93)
”	21	°panna	°panna
”	22	.m.	°m.
”	23	約す	約す.
”	24	praati	prati
”	”	す	す.
”	25	°panna	°panna.
”	26	sam +	を少しく右へ寄す.
”	27	す.(過) °pa na	す.(過) °panna
”	29	たる	たる.
”	30	pada	を少しく左へ寄す.
”	”	(中) 足.	(中) 足.
120	6	清む,	清むる,
”	10	palāya	palāya—
”	12	見.	見る.
”	24	飲み, 酒飲み;	飲用, 飲酒;
”	28	pu° da	pu° dā
121	11	Indra	indra
”	29	puṣita	poṣita 少しく左へ寄す.
122	16	kāṣṭha	kāṣṭha°
123	22	沿	沿

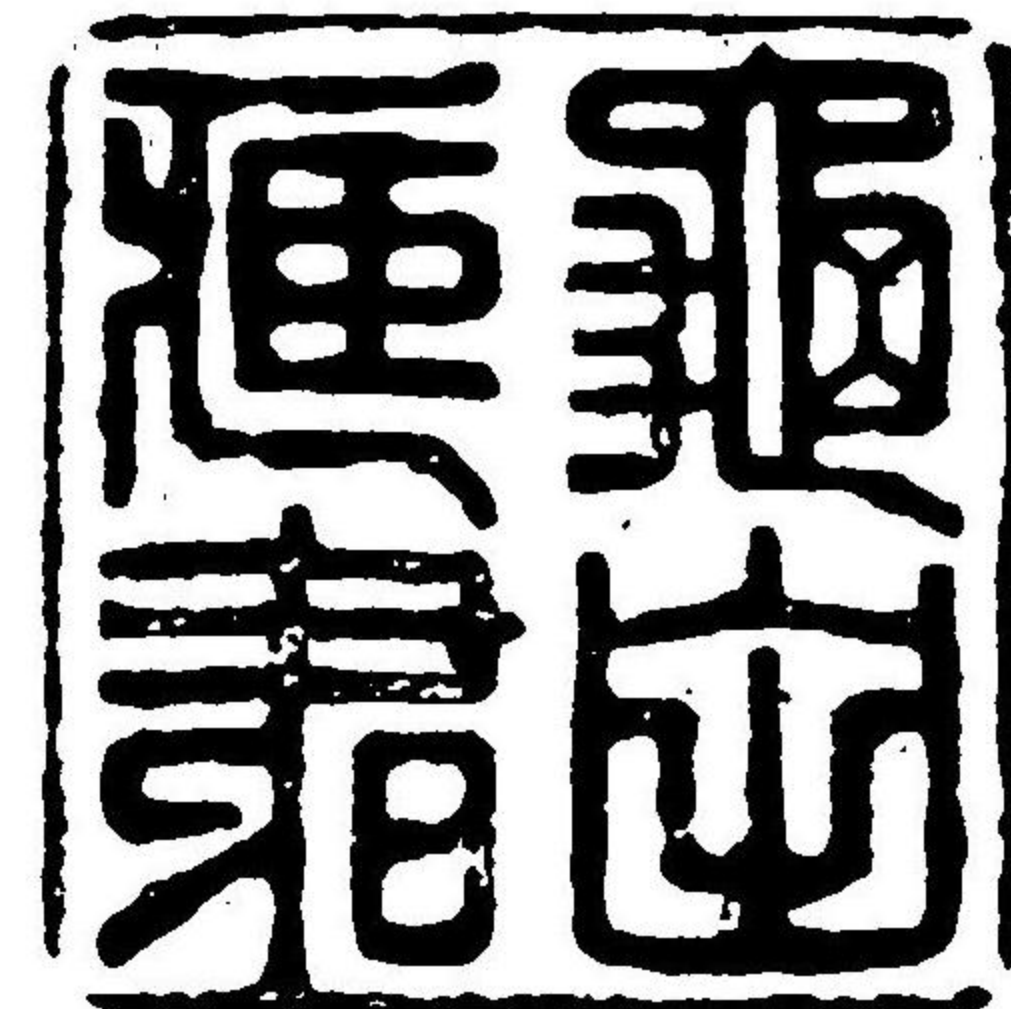
124	3	悟る,	悟り,
”	10	聞く.	—聞く.
”	24	童女,	童女;
125	10	pravi	を少しく右へ寄す.
”	25	怖る,	怖るゝ,
126	15	[從.]	[從.]
”	17	因陀羅の號.	(因陀羅の號).
”	23.24	地方, 土地, 國, を支配せる;	地方を支配せる, 土地—, 國—;
127	22	maroratha	manoratha
”	23	monorama	manorama
”	29	mā (副.) (125) 莫.	を少しく左へ寄す.
128	9	我が類,	我が類の,
129	1	[業.]	[業.]
”	3	り)て	りて)
”	14	具等	其等
130	11	過ぐ,	過ぐ.
”	12へに
”	15へに
131	2	[具]	[具]
”	13	樂しめる,	—樂しめる,
”	28	しむ.	しむる.
133	5		貪求
”	17	upa + 塗布す.	を右方に寄す.
134	2	す	す
”	5	Indra	indra
136	17	執られたる;	執られたる;
137	13		vṛt
”	23		vṛtti
138	12へに

138	13		śatru
"	17		śabdāya
"	"		śak
"	27		śara
"	30	Yayāti	yayāti
139	9		uśnas
"	21		śṛgāla
"	22		śoṣa
140	1	ṣunī	śunī
"	11	幸福,	幸福;
"	17		śrīdevī
"	29	詩史	史詩
141	3	れら	られ
142	3	śaptan	saptan
"	23	俱に.	俱なる.
143	8	(具.)と	(....と[具.])
"	17	(....の[依.])	—
"	19	遠	遠
"	21	したる人;	したる;
"	28	sakanyā	sakanyā
144	4	快	悦
"	26	(他處に[依.])	—
145	3	ni+	を少しく右へ寄す.
147	3	ha	hā
"	17	山,	(山),
148	22	有す,	有す,

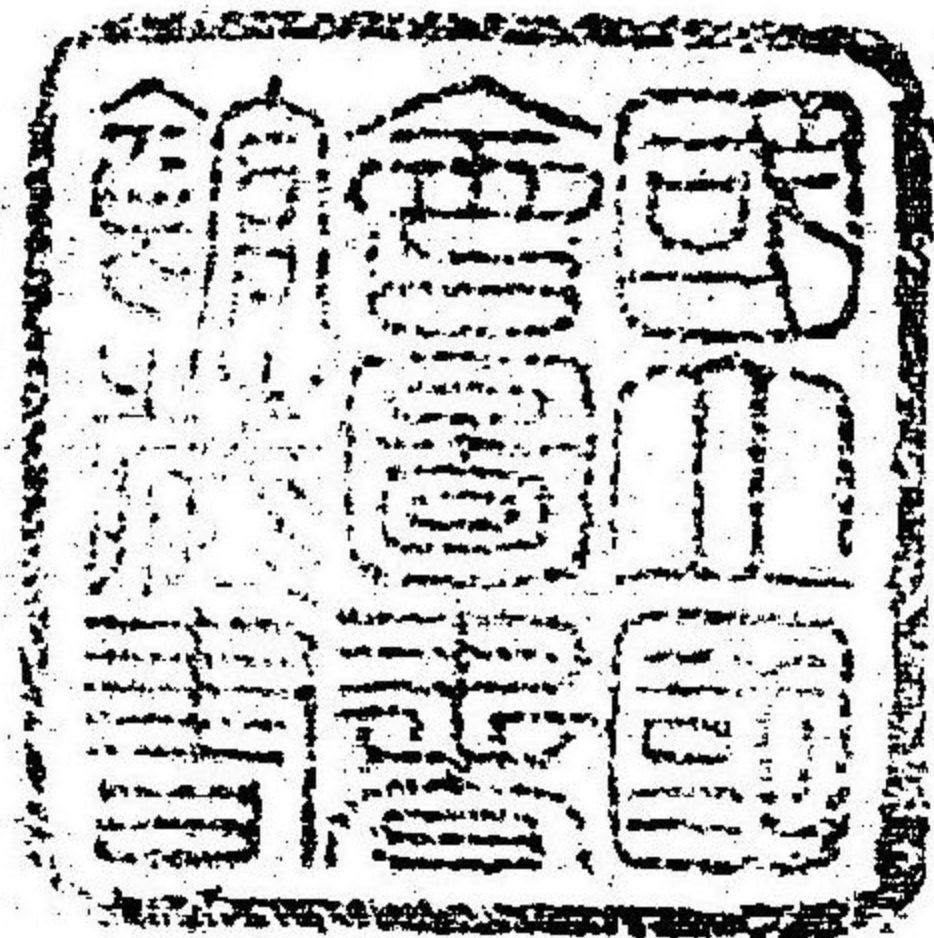
アー、エフ、ステンツラー 原著
エル、ピッシエル 増訂
萩原雲來 譯補

梵語入門

文法・文抄・字書



829.89 c5 826 C



梵語入門序

梵語の本邦に傳はること久し矣されど僅に佛教家特に真言宗一部學者の傳ふる所にして其學習の材料も亦甚はだ不完全なりき。淨嚴慈雲の如き篤學宏才ありしと雖ども奈何せん當時原本は僅に五六種に止まり加之完全なる文法書なく字書なく到底其堂奥に上るを得ざりき。是に反して近來は文運の勃興に連れ言語學の進歩に伴ひ梵語は單に印度古本の用語たるのみに非ずして希臘羅甸乃至英佛獨露なぞの言語の本幹なること發見せられ印度歐洲語として歐米には盛に研究せられ、現今にては梵語の本源地なる印度より却て歐米に於て完全なる梵語の文法書字典の製作を見る。本文の出版批評的著作實に牛に汗するも及ばざるの盛況を呈す。これ實に言語學として梵語研究の必要あるのみならず印度の宗教思想は最も豊富に變化最も多く宗教を語るものは必ず第一に指を印度に屈す、又哲學に於ても文學に於ても興味津々汲んで盡きざるものあり、斯かる文學藝術を研究するため延ては東洋古代百般の學藝を研究解釋するに須要なるものあるがゆへなり。



225476

我邦は夙に東洋文華の粹を蒐め今や西洋の文明を加味しつゝあり此間に處する吾人學徒たるもの我文華の淵源を研究せず、東亞同胞の制度文物を知らず、而して獨り泰西學者の研鑽に委して顧みず、豈に夫れ可ならんや。加之梵本の發見續々相接し、出版梵書の購求容易に、本文批評の聲日に高く、佛教を學ぶもの漢譯書にのみ依頼すべきの時に非ず。尙又南方佛教を知らんとする人の爲には幸にパーリ三藏出版の將に完結せんとする此の時に際し梵語を學習するは最も緊要なりとす。パーリ語は梵語より轉せり故に梵語を學べばパーリ語は勞せずして讀み得に至る。佛教家たるもの奮起一番原本研究に心なきか。

前年榊亮三郎君解説梵語學を著はし學界を裨益せしこと少なからずと雖も其文繁廣にして初學者に便ならず。著者此に見るあり國字梵語入門を公刊し以て前陳の堂奥に上る階梯たらしめむとす。本書は全く翻譯より成る但し間ま讀者の了解し安きがために原文意を換へたと五六の改正したる點とを除く。原本は西紀一千八百六十八年にアー・エフ・ステンツラーの著にして後ち一千八百九十二年エル・ビッシェル博士が大に改訂増補し其第六版として發行せしものなり。本書學習の順序は第一精細に書法を學び、次に聲法の中15より 18. 22. 23. 26. 27. 36 より 40. 51. 53. (備考を除く)。

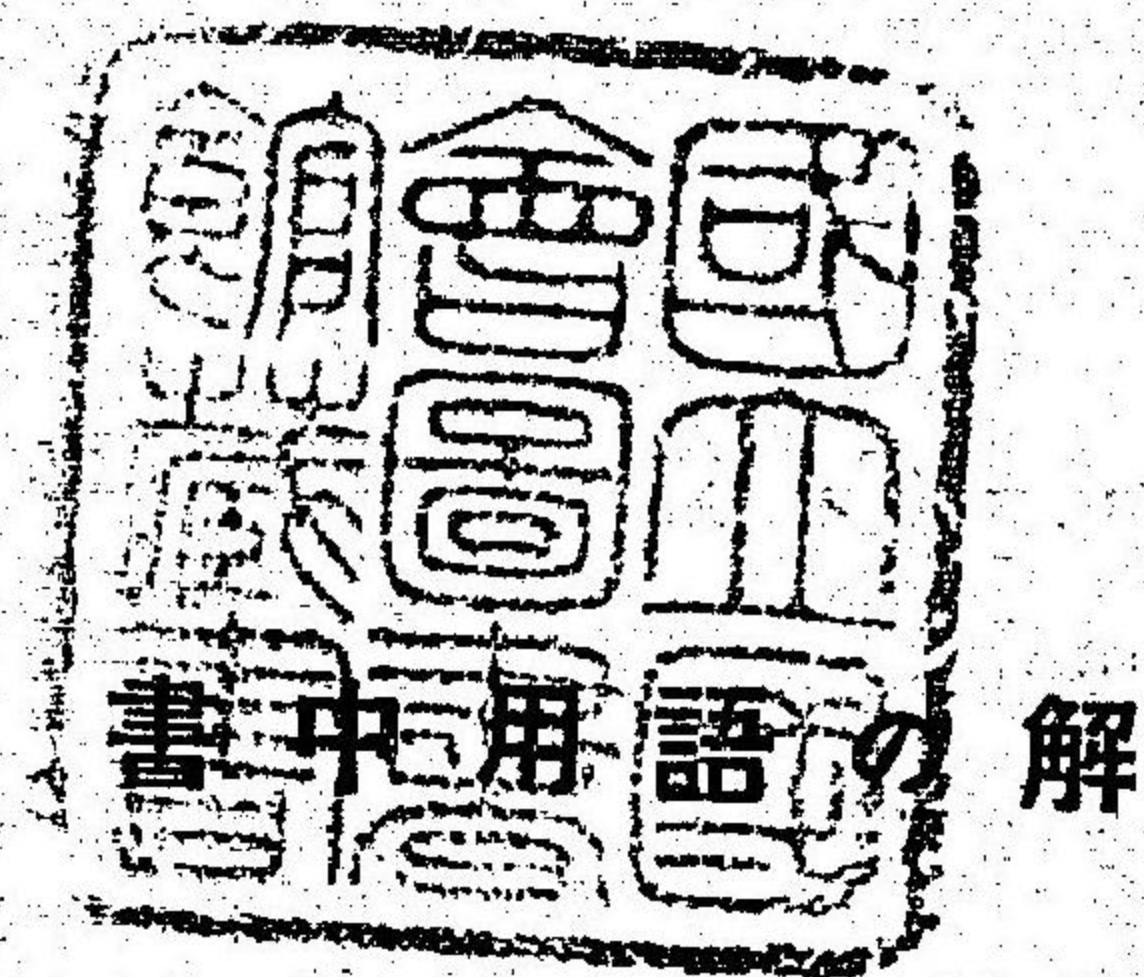
を學び、次に 55 より 60 までの各條を學び、次に直に演習例に移るを捷徑とす。159 條以下の演習例は本書の範圍限りあるを以て此を省略せり。但し其以後に加へたる文抄にて此演習を補充することを得。

文法の學語を寫すには譯者の新に造れる語或は汎く知られざる古來の成語又は從來西洋文典の譯語として知られ洋語學生の耳には爛熟せる術語も今は印度歐洲語の文法を學ばざる人にも學習せしめむがために其語のみにて意義の明了なるものは除き其餘の稍や疑を挿むべきものは本文に入る前に悉く摘出して其略解を附す。

明治四十一年九月

東台山麓春鶯里にて

萩原雲來



硬音 } not sounding. 氣息が肺より出で喉腔を通過する
硬聲 } とき聲帶顫動せざるときの音を稱す. 或は響なき
音とも云ふ.

軟音 } sounding. 氣息が肺より出で喉腔を通過するとき
軟聲 } 聲帶顫動するときの音を稱す. 或は響く音とも云
ふ.

發聲 consonant. 從來所謂子音なるものなり. 我國の五
十音は初一行即ちアイウエオを除て餘は何れも
ク+ア=カ, ク+イ=キ, 等の如く或聲と韻と合して
成れり. 今はカ, キ等の中のア, イ等の韻を除き去り
て(カーア, キーイ)等残りたる聲を發聲と稱す.

韻 vowel. 從來所謂母音なり. 我國のアイウエオの如き
是なり.

寔拏 guṇa. 13 條に出づ.

弗栗地 vṛddhi. 同上.

連聲法 sandhi. 音便の好き様に聲を發する規則.

合成語 compound. 名詞, 形容詞, 動詞等の應に随つて合
集せられ單一の語と看做さるゝもの. 例へば「ア
カゴ」(嬰兒)「ヒバチ」(火鉢)「ヒキハル」(緊張)の如し.

典文 classics. マハーブハータ (mahābhārata), ラーマヤナ (Rāmāyana) の如き印度中古文の文を稱す。ルグ吠陀 (Rg-Veda) の如き古文及び近世文を簡ぶ。

轉聲法 inflection. 格例法及び活用法(次下の二語を看よ)ともに語尾又は語中に變化あれば此二を總稱して轉聲法と云ふ。

格例法 declension. 名詞, 形容詞, 代名詞, 數詞の語尾を變化することを云ふ。古來所謂八轉聲なるものなり。

活用法 conjugation. 動詞の語尾の變化することを云ふ。

語根 root. 語の成分を分解して析つ可らざる最後の形となりたるもの即ち動詞の根本の形を稱す。(次の語幹を看よ)。

語幹 stem. 語根の轉増したるものにして, 名詞, 動詞の如き隨應の語尾を附加せられべき形を云ふ。

語勢 accent. 言語の中にて聲を抑ゆるを云ふ。例せばムシ(箸), ハシ(橋)の如し。

語尾 ending. 格例法又は活用法のとき語の尾に加ふる字。

兩數 dual. 名詞, 動詞等が二個の物, 二個の作用等を詮はすときの特殊の語形を稱す。

作者名詞 nomina agentis. 名詞が作用を有することを詮はす。例せばミテ(見者), キ、テ(聽者)の如し。

體格 nominative case. 直に體を指す。所謂主格なり。「ハ」或は「ガ」の辭を以て譯すべきもの。

作業格 accusative case. 所談のものに或ものゝ作業が及ぶを詮はす。所謂目的格なり。「ヲ」「ニ」等の辭を以て譯すべきもの。

作具格 instrumental case. 所談のものが或ものゝために作具となることを詮はす。「ニテ」「ニ由テ」「ヲ以テ」等の辭を以て譯すべきもの。

所爲格 dative case. 所談のものが或ものの爲にすることを詮はす。所謂與格なり。「ニ」「ヘ」「ノタメニ」等の辭にて譯すべきもの。

所從格 ablative case. 所談のものが或ものより離るゝを詮はす。「ヨリ」の辭を以て譯すべきもの。

所屬格 genitive case. 所談のものに或ものが屬することを詮はす。「ノ」の辭を以て譯すべきもの。

所依格 locative case. 所談のものが或ものゝ所依となることを詮はす。「ニ」「ヘ」「ニ於テ」等の辭を以て譯すべきもの。

呼召格 vocative case. 所談のものが呼かけらるゝを詮はす。「ヨ」の辭を以て譯すべきもの。

原級 positive degree. 他物と比較せざるとき形容詞。

比較級 comparative degree. 二個の物の同性質等を比較

して云ふ形容詞。例せば「石ハ木ヨリ堅シ」の「ヨリ堅シ」の如し。

最上級 superative degree. 三個以上の物を比較して云ふ形容詞。例せば「甲ハ甲乙丙ノ中最モ大ナリ」の「最モ大ナリ」の如し。

字 syllable. 最小に分解されたる音聲を云ふ即ち一の韻或は一の韻と一若しくは多の發聲より成るもの「アイ」は二字、「ツクエ」は三字なるが如し。

長字法 } reduplication. 語根の字、或は語根の始の部分、を
長字 } 語首に重ねるを云ふ。

前接字 prefix. } 原語の意義を變化するために其の
前置詞 preposition. } 首に加ふる字。

後接字 suffix. 名詞、形容詞、動詞等の語形を造るために語の尾に加ふる字。

附帶詞 enclitic form. 獨立の語に非ずして次前の語に附帶せるものと看做さるゝもの即ち自體に語勢を有せず。

爲他言 parasmaipada. 體格(主格)の作用が他物に及ぶと言ひ詮はすとき其動詞を爲他言と云ふ所謂他動詞(transitive verb)なり。

爲自言 atmanepada. 體格(主格)の作用が自體に止まりて他の物に及ばぬこと又は體格の状態と言ひ詮は

すとき其動詞を爲自言と云ふ所謂反應動詞 (reflexive verb) なり。

受動言 passive voice. 體格(主格)が作用を受くることを詮はす動詞の用法なり。

正過去 imperfect. 汎く過ぎ去りし時を示す。

不定過去 aorist. 單に過去を詮はすものにして實際は正過去並に已過去(下を看よ)と區別なく用ゐらる殊に此の用例は古文に多し。

單不定過去 simple aorist. 不定過去の語幹に直に不定過去の語尾を加ふ、索不定過去(次下を看よ)に簡ぶ。

索不定過去 sigmatic aorist. 不定過去の語幹と不定過去の語尾との間に索音を挿む。

已過去 perfect. 過去の中の或時に已に其作用終了せしを詮はす。されど正過去と已過去とは大概其區別なく用ゐらる。

複説已過去 periphrastic perfect. 已過去の語幹に直に已過去の語尾を加へずして迂回の語法を以て已過去を詮はす。

單未來 simple future. 未來の語幹に直に未來の語尾を加ふ、複説未來(下を看よ)に簡ぶ。

複説未來 periphrastic future. 未來の語幹に直に未來の語尾を加へずして迂回の語法を以て未來を詮はす。

施設過去 conditional. 實際過去にあらざりしことを假りにありしと詮はす.

願望法 optative. 願望を詮はす言ひ方.

接續法 subjunctive. 要求を詮はす言ひ方. (接續法は命令法よりも緩なり. 上の願望法は接續法よりも更に緩なり).

希求法 precative. 通常は願望法と同意に用ゐらる.

使役法 causative. 或ことを作さしむることを詮はす動詞の用法. 例せば「起コス」「落トス」は「起キル」「落ツル」の使役法なるが如し.

求欲法 desiderative. 語根の詮はす作用又は状態を欲することを示す動詞の言ひ方.

増上法 intensive. 語根の詮はす作用を反復し又は増強することを示す動詞の言ひ方.

不定法 infinitive. 人稱, 時, 數, 等の語尾變化なき動詞の形. 例せば「往クベク」「來ルベク」又は「往クコト」「來ルコト」等の如し.

定動詞 finite verb. 「我ハ行ク」「彼ハ來レリ」などと人稱, 時, 數, 等の定まれる動詞. 即ち語尾變化せる動詞.

絶對法 absolutive. 動詞にして形容詞の性質を有すれども語尾變化を缺く. 「往テ見ル」「來リテ話ス」の「往テ」「來リテ」は即ち絶對法なり.

分詞 participle. 動詞にして形容詞の性質を帶ぶ. (次の五語を看よ).

現在分詞 present participle. 動詞の現在の形にして形容詞の性質を帶ぶるもの. 例せば「觀ル人」の「觀ル」の如し.

過去受動分詞 past passive participle. 動詞の受動的過去の形にして形容詞の性質を帶ぶ. 例せば「觀ラル花」の「觀ラルタル」の如し. されど若し自動詞 (intransitive verb) より造られたるときは受動の義なく但だ不定過去の義あり. 例せば「落タル花」の「落タル」の如し.

已過去能動分詞 perfect active participle. 動詞の已過去の形にして能動的形容詞の性質を帶ぶ. 例せば「觀タル人」の「觀タル」の如し.

未來分詞 future participle. 動詞の未來の形にして形容詞の性質を帶るもの.

須要分詞 participia necessitatis. 文章中の主體 (subject) が語根の詮はす所の作用を被ることを示す分詞. 例せば「水ハ飲マルベシ」の「飲マルベシ」「其書ハ應ニ讀マルベシ」の「應ニ讀マルベシ」の如し.

名稱語 nomen. 名詞と形容詞を併稱す.

名稱的動詞 denominative. 名詞, 形容詞の名稱語を動詞として使用するなり. 例せば「風説ヲ耳ニス」の「耳

「ニス」は「耳」の字を「聞」の意とし「聞ク」と云意に用ゐたれば即ち名稱的動詞なり。

動詞的名稱 verbal adjective and noun. 動詞にして形容詞又は名詞の性質を有する語。即ち分詞、不定法、及び絶對法を指す。

略語解

- | | |
|----------------|-----------|
| 體.=體格. | 業.=作業格. |
| 單.=單數. | 呼.=呼召格. |
| 三.=第三人稱. | 兩.=兩數. |
| 現.=現在. | 具.=作具格. |
| 爲他.=爲他言. | 從.=所從格. |
| 過受分.=過去受動分詞. | 中.=中姓. |
| 受.=受動. | 男.=男姓. |
| 己過能分.=己過去能動分詞. | 女.=女姓. |
| 未.=未來. | 直.=直說法. |
| 爲自.=爲自言. | 施過.=施設過去. |
| 屬.=所屬格. | 願.=願望法. |
| 正過.=正過去. | 己過.=己過去. |
| 複.=複數. | 命.=命令法. |
| 依.=所依格. | 不.=不定法. |
| 爲.=所爲格. | 役.=使役法. |
| 不過.=不定過去. | 現分.=現在分詞. |
| 一.=第一人稱. | 未分.=未來分詞. |

書 法

1. 梵語とは所謂サンスクリット(正しくは Samskrta)にして此語を書するには通常提婆那伽利 (Devanāgarī) 字を用ゐる。其字體下の如し。

甲. 韻.

- イ. 單. अ a, आ ā, इ i, ई ī, उ u, ऊ ū,
- ऋ ṛ, ॠ ṛī, लृ ḷ.
- ロ. 重. ए ē, ऐ ai, ओ ō, औ au.

乙. 音及び半韻.

- | | | | | | |
|--------|-------|--------|-------|--------|-------|
| | 無氣 | 含氣 | 無氣 | 含氣 | 鼻 |
| イ. 喉. | क ka, | ख kha, | ग ga, | घ gha, | ङ ṅa. |
| ロ. 齶. | च ca, | छ cha, | ज ja, | झ jha, | ञ ña. |
| ハ. 斷. | ट ṭa, | ठ ṭha, | ड ḍa, | ढ ḍha, | ण ṇa. |
| ニ. 齒. | त ta, | थ tha, | द da, | ध dha, | न na, |
| ホ. 唇. | प pa, | फ pha, | ब ba, | भ bha, | म ma. |
| ヘ. 半韻. | य ya, | र ra, | ल la, | व va. | |

ト. 索サ音(硬吹氣音). श śa (齶), ष ṣa (斷), स sa (齒).

チ. 軟吹氣音. ह ha.

リ. 隨韻. म m, 隨鼻韻. ँ ṁ, 止聲. ः ḥ.

(此の外に ऌ ḷa (斷) 字あり唯だ吠陀謄本にのみ用ゐらる).

2. 羅馬字の上に一横線を施せるは其韻を長く引べきを示す。r と ! とは和漢洋ともになき一種の韻に

して次の如く r と l との音に類す。e, au, o, au, は別に符號を施さるも常に俱にエー,オー,アーイ,アーウ,と長く引べし。

3. 喉齶斷齒唇の第一行第二行と索音とは硬音にして、其の餘は皆軟音なり。

4. kha は「クハ」を促めたるものにして ka の含氣音なり。餘の含氣音も此に例して知べし。ṅa は「吾ガモノ」の「ガ」の如し。ca は「チャ」, ṅa は「ニャ」なり。斷音は舌端と上齶内面齒根の部とによりて氣息を迸出せしめて發す。śa は「シャ」にして舌の本と上齶とより出で, ṣa は「シャ」の如くして舌の中と上齶とより出で, sa は「サ」にして舌の末と上齒とより出づ。

5. 隨韻と隨鼻韻とは俱に韻の鼻音化したるものにして撥ぬるが如き韻、猶ほ我國の「ン」の如し。此中隨韻は發聲の次前に鼻音の來るときは差別なく其鼻音に代用することあり。此外此二韻の使用法は 33, 35, 36 條に出づ。

6. 止聲は r 又は s 聲の轉じたるものにして此兩聲が章句の終に來るときに用ひらる。此餘の使用法は 37 條に出づ。

7. 1 甲の下に列ねたる字は韻が聲の初に來るときに用ゐらる、ものなり。總て韻が發聲の後に續くときは a 韻は別に書せざるものとす、其餘の韻は下の如くに書す。

का kā, कि ki, की ki, कु ku, कू kū, कृ kr, कृ kṛ, क्ल kḷ, के ke, कै kai, को ko, कौ kau. 隨韻字は常に發聲字の上に加へらる。此を讀むには發聲字を先にすべきものとす。कं kam, तं tam の如し。

韻字を加ふるがため多少發聲字の形を變ずることあり即ち दु du, दू dū, दृ dr, रु ru, रू rū, सु sū, सू sū, शृ śr, हु hu, हू hū, हृ hr.

8. 語の終の發聲は、(virāma) を以て示さる。例せば जगत् jagat (世). नभस् nabhas (天). दिग् diś (方) の如し。

9. 語首の अ a を省略するときは ऽ (avagraha) を以て之を示す。例せば निधने अपि nidhane api の代に निधने ऽपि nidhane 'pi (死を致すも). शूरो असि sūro asi の代に शूरोऽसि sūro 'si (汝は勇士なり). ° の符號は字を略せることを示す。I と II とは次の如く小大の段落を示す。

10. 二或は二以上の韻なき發聲の連接するときは其字體を連書す。其方は或は第二の字を第一の字の下に加へて横線を去る, प pa + त ta = प्र pta の如し。或は第二の字を第一の字の後に加へて豎線を去る, ग ga + दha = गध gdha の如し。

第一類の連書體.

乙イ. क kna, क्ल kla, कृ kva, कृ kta. — ग gna. — घ ghna. — ङ ṅka, ङ ṅkha, ङ ṅga, ङ ṅgha.

ニ.ト. च cca. — च ṅca, ज ṅja. — ञ śca, ञ śna, ञ śla, ञ śva.

ハ. ट tta, ट् tva. — ड dga, ड् dda.

ニ.ト. त tta, ल tna. — ङ dga, ह dda, ड ddha, न dna, ङ dbha, द dva. — ध dhna. — न nna. — स sna.

ホ. प pta, प्र pna, प्ल pla. — भ bhna. — म mna, म mla.

ヘ. ल la.

チ. ह् hna, ह् hna, ह् hla, ह् hva.

第二類の連書體.

乙イ. कथ ktha. — कथ khya. — गट gda, गध gdha, गभ gbha, गम gma, गय gya, गल gla, गव gva. — घम ghma, घय ghya.

乙ロ.ト. छ ccha, चय cya. — ज् jja, ज् jja, ज् jma, ज्य jya, ज्व jva. — ञ् ṅsa. — शय śya, शम śma.

ハ.ト. णट ṅta, णट ṅtha, णड ṅda, णट ṅdha, णथ ṅya, णव ṅva. — षक ṣka, ष षta, ष षtha, षा ṣna, ष्य ṣpa, ष्य ṣma, ष्य ṣya, षव ṣva.

ニ.ト. त्क tka, त्थ ttha, त्प tpa, त्फ tpha, त्म tma, त्थ tya, त्त् tva, त्त् tsa. — त्थ thya. — धम dhma, ध्य dhya, धव dhva. — न्ता nta, न्थ ntha, न्द nda, न्ध ndha, न्म nma, न्थ nya, न्व nva, न्त् nsa. — स्क ska, स्व skha, स्त sta, स्थ stha, स्प spa, स्फ spha, स्म sma, स्य sya, स्व sva.

ホ. प pma, प pya, प ps. — ब् bja, ब् bda, ब् bdha, ब् bya. — भ्य bhya, भव bhva. — म् mpa, म् mba, म् mbha, म् mya.

ヘ. य yya, य्व yva. — ल्क lka, ल्प lpa, ल्म lma, ल्थ lya, ल्त् lva, ल्ह lha. — व्य vya.

前より稍や大なる變化ある連書體は **म** ma と **य** ya なり。

乙イ. **क** kma, **क्य** kya, **क्व** kva.—**च** chya.—**छ** tya, **च्य** thya, **च्च** dya, **च्च** dhya.—**ज** dma, **ज्य** dya.—**झ** hma, **झ्य** hya.

特別の連書體は次の三種とす。 **क्ष** kṣa, **जू** jūa, **ण** ṇa.

रが**ञ**若くは發聲の前に來るときは次後の字の上部に **०** の形となりて加へらる。例ば **रञ्** rñ, **रक** rka, **भिर्** rbhi, **र्वी** rvi, **र्दे** rde, **र्गो** rgo, **र्मौ** rmau, **र्थ** rtham.

若し **र**が發聲の後に來るときは前の字の下部に **'** の形となりて加へらる。例せば **क्र** kra, **ग्र** gra, **घ्र** ghra, **ज्र** jra, **श्र** śra. **त्र** tra, **द्र** dra, **ध्र** dhra, **न्र** nra, **प्र** pra, **ब्र** bra, **भ्र** bhra, **म्र** mra, **व्र** vra, **ह्र** hra.

多字の連書體も前の法則に准じて造る。

乙イ. **क्त्य** ktya, **क्त्र** ktra, **क्त** ktva, **क्रय** krya, **क्षण** kṣṇa, **क्षम** kṣma, **क्ष्य** kṣya, **क्ष्व** kṣva, **क्ष्म्य** kṣmya.—**ग्ध** gdhva, **ग्न्य** gnya, **ग्भ्य** gbhya, **ग्र्य** grya.—**क्क्ष** kṣkṣa, **क्क्ष्व** kṣkṣva, **क्क्ष** kṣkṣa, **क्क्ष** kṣkṣva.

乙ニ. **च्छ** cchra, **च्छ्व** cchva.—**ज्जू** jṣūa, **ज्ज्व** jṣva.—**श्य** śeya, **श्य** śrya.

ハ. **ष्क्र** ṣkra, **ष्त्र** ṣtra, **ष्त्व** ṣtva, **ष्थ्य** ṣthya, **ष्प्र** ṣpra.

ニ. **त्त** ttra, **त्त्व** ttva, **त्त्य** ttva, **त्त्य** ttva, **त्त्र** tsna, **त्स्य** tsya, **त्स्व** tsva.—**द्द्र** ddra, **द्द्य** ddya, **द्द्र** ddra, **द्द्र** ddva, **द्द्य** ddhya, **द्ध्य** ddhya, **द्द्र** ddra, **द्द्र** ddya, **द्द्र** ddya.—**न्य** ntya, **न्त्र** ntra, **न्स**

न्त्सा, **न्द्** nddha, **न्द्र** ndra, **न्ध्य** ndhya, **न्ध्र** ndhra, **न्त्र** nnyā.—**स्त्य** stya, **स्त्र** stra, **स्त्व** stva.

ホ. **प्त्य** ptya.—**ब्ध** bdhva.

連書體を讀には初に上を讀み次に下に移る。若し下に左右の連書體あるときは左を先に讀むべし。是の如くして順次に後に移るものとす。

11. 數字.

१	२	३	४	५	६	७	८	९	०
1	2	3	4	5	6	7	8	9	0

१०=10; १२५=125; १८९२=1892.

語勢符 (accent) は古文には之を付したるものあれど典文には之を付せず。故に今焉を略す。但し今の書中詞形を説明するに要用なるものは其條下に至て之を説く。

12. 梵語にては一句或は一章を一語と看做して論せらる。但だ語が單韻, 重韻, 隨韻或は止聲にて終り次の語が發聲或は半韻にて始まるときにのみ語を分書す (19—21 條を除く)。其餘の時には連聲法 (15—40 條) に順じて語を連書す。

किम् इदम् असंगतम् अस्मिन् आदौ अन्यत् तथा अन्यत् अनो च kim idam asaṅgatam asmin ādau anyad tathā anyad ante ca। **किमिदमसंगतमस्मिन्नादावन्तथावदने च** (34, 20, 27, 15 條) (云何ぞ是れ此中に於て不相應なるや。初に異あり終に亦異あり) となる。

注意—以下本文中には便宜の爲め羅馬字の音譯字のみを用ゐたるも學者上の書法を通曉するときには書中の音譯字を悉く Devanāgarī 字に改書すること容易なり。

聲 法

13. 韻は二重に強めらるゝことを得、初に強められたる韻を窶拏 (gūṇa) と云ひ更に強められたる韻を弗栗地 (vr̥ddhi) と云ふ。

平 韻	a	ā	i	ī	u	ū	r	r̄	l
窶 拏			e (a+i, ī)		o (a+u, ū)		ar (a+r, r̄)		al (a+l)
弗 栗 地	ā (a+a, ā)		ai (a+e)		au (a+o)		ār (a+ar)		

r の窶拏は ra となり、其弗栗地は rā となることあり (102, 166, 168, 191 條)。a と ā との窶拏は其形平韻に異ならざれば此處に掲げず。

vid (知る)	veda (知)	vaidya (知を有する)
lul (動轉する)	lola (食ぼる)	laulya (食)
bhṛ (擔ふ)	bhara (擔ふ)	bhāra (擔)
klp (適ふ)	kalpa (適ふ)	(l の弗栗地闕く)
pat (落つ)		pātaya (落す)

合成語、及び文章、の中にある聲の轉變。

14. 一合成語或は一文章の中の語の始聲と終聲は連聲法の規定に従ふ。

終と始との韻。

15. 等しき單韻は其の長韻となる。即ち a, ā+a, ā は ā となり; i, ī+i, ī は ī となり; u, ū+u, ū は ū となる。

例. na asti iha (此處に在らぬ)=nāstiha. dayā (悲) + ārdra (潤

る)=dayārdra (悲にて潤へる). devī iva (天女の如し)=devīva ripu (敵)+uras (胸)=ripūras (敵の胸)。

16. a と ā は等しからざる單韻と俱に窶拏となり。e, o 及び重韻と俱に弗栗地となる。即ち a, ā+i, ī は e となり; +u, ū は o となり; +r は ar となり; +e は ai となり; +o は au となり; +ai は ai, +au は au となる。kā iyam=keyam (此人は誰ぞ). loka (世)+īśvara (主)=lokeśvara (世の主). sahasā+utthāya=sahasotthāya (突然に起き上りて). yathā (如く)+rtu (季節)=yathartu (季節に順つて). tathā eva=tathaiva (正に是の如く). mahā (大なる)+ośadhi (藥草)=mahauśadhi (効驗ある藥草). dhana (錢)+aiśvarya (司管)=dhanaiśvarya (司錢). tasya autsukyam=tasyautsukyam (彼の切望)。

備考. oṣṭha (唇)の次前の a は合成語のときには省き去るも可なり。adhara (下の)+oṣṭha=adharaoṣṭha 或は adharoṣṭha (下唇)。

17. i, ī, u, ū, r, r̄ は等しからざる韻の次前に在ときは各自相當の半韻 y, v, r となる bahūni ahāni=bahūnyahāni (數日). astu etat=astvetat (夫れ然らん). pitṛ (父)+anuvartanāt (從順なるより)=pitrānuvartanāt (父に從順なるより)。

18. e 又は o の次後の a は省き去らる (9 條)。

19. a の餘の韻の次前に來る e は轉じて a となる。o も亦通常は是の如し。これ半韻 y 又は v (17 條) が發音するゝも輕微なるがため書せられざるに因る。vane āste=vana āste (vanayāste とせず) (彼は林中に坐す). paṭo iha=paṭa iha (paṭaviha とせず) (汝此處なる黠慧者)。

20. ai は韻の次前に來るときは āy に非して ā となる. au は通常は āv となる. tasmai ṛṣabham dadāti=tasmā ṛṣabham dadāti (彼は彼に牡牛を與ふ), tau ubhau api=tāvubhāvapi (其兩個とも).

21. 格例法及び活用法の兩數を表はす語尾の韻 i, ū, e 及び複數の amī (其. 115 條) の i は次後に韻の來るときも變化することなし (pragṛhya). 又斯る e の次後に來る a も省略せられず. pādātale ubhe (兩足蹠), cakṣuṣi ime (此の兩眼), bahū udyamya (兩臂を擧て), kuṇḍale avamucya (兩耳璫を取去りて).

終と始との發聲.

22. 二又は二以上の聲が語の終に來るときは其第一の聲のみを存す. prāṅks=prāṅ (東方の), ahaṅt=ahan (彼が打ちき).

23. 乙の イ.ハ.=.ホ 四列の音の中にて鼻音と硬無氣音のみ聲の終に在ことを得. 其餘の音は此音に轉せしむるを要す jalād=jalāt (水より), vīrudh (草) の體單, vīrudhis vīrut=(22 條).

24. 齶音は聲の終に在ときは k となる, j と ś とは或は ṭ となる. ṣ と h とは多は ṭ となり時としては k となる. vāc (聲) の體單, vācs=vāk (22 條). 是と等しく sraj (鬘) の體單, srak, divasprś (天に觸る)=divasprk, devarāj (天の王)=devarāt, viś (民)=viṭ, tṛṣ (渴)=tṛṭ, madhulih (蜂)=madhuliṭ, kāmāduh (欲牛)=kāmadhuk (25 條).

備考. 此條に擧たる聲の變化の一定せざるは齶音及び軟吹氣音 (54 條) の來源一樣ならざると又 ṣ, ś 兩音の轉換あるとに歸す.

25. 語根が軟含氣音又は h にて終り軟發聲にて始まり, 其最後の發聲を 23, 24 條に准じて變化したるときは其含氣音は再び始聲の中に現はる. goduh (牛乳を搾る人)=godhuk, arthabudh (義に通曉せる)=arthabhut, parṇaguh (葉にて覆ひて)=parṇaghuṭ.

26. 聲の末に在る r 又は s は止聲となる. punar=punah (再び), tamas=tamaḥ (闇).

27. 硬發聲は軟音の次前には軟となり, 軟發聲は硬音の次前には硬となり, 此兩聲ともに鼻音の次前には鼻聲となる. apatat bhuvi=apatadbhuvi (彼は地に落たり), āpad (不幸)+kāle (時に)=āpatakāle (不幸の時に), vāc (言)+mātreṇa (單に)=vācīmātreṇa (24 條) (言のみにて), ṣaṭ māśān=ṣaṭmāśān (六月を), yāvāt na=yāvāna (爾らざる間), etad mithunam=etanmithunam (此の配偶).

28. 聲の始の h は次前の軟含氣音となる. samyak huta=samyagghuta (正しく供へられたる), tad+hetu=taddhetu (其の因).

29. 聲の始の ch は短韻又は前置詞 (前接字) ā (此の方至るまで) 又は否定詞 mā (勿) の次後に來るときは ccha となる. taru+chāyā=tarucchāyā (樹の蔭), (ā+chādita=ācchādita (覆はれたる), mā chaitṣit=mā cchaitṣit (彼は離るゝ勿れ).

30. 齒音は次下の齶音, 斷音又は l と同化す. malat cāpam = mahaccāpam (大弓). abhavat jaḍaḥ = abhavajjaḍaḥ (彼は失神せり). tad jalam = tajjalam (其の水). ḍamat + ḍamara = ḍamaḍḍamara (響く鼓). vidyut + latā = vidyullatā (電蘿). tad lāṅgūlam = tallāṅgūlam (其の尾).

31. 聲の始の ś は齒音(30條)の次後にありては ch となる. aharat śiraḥ = aharacciraḥ (彼は首を切斷せり). tad śrutvā = tacchrutvā (其を聞きて).

32. n は軟齶音, 斷音及び ś の前に在るときは此と同類の鼻音となる又 ś は變じて ch となることを得. yān jantūn = yañjantūn (其の人を). tān śasāpa = tāñśasāpa 或は tāñchāsāpa (彼は彼等を誚へり). (n の次下に斷音の來ることは殆んど其實例なし).

33. l の次前の n は $\overset{\text{ñ}}{\text{l}}$ 或は $\overset{\text{m}}{\text{l}}$ となる. 即ち l と同化し其鼻音となる. amuṣmin loke = amuṣmi $\overset{\text{ñ}}$ l loke 或は amuṣmi $\overset{\text{m}}$ l loke (彼の世にて).

34. m の餘の鼻音が語の終にありて短韻にて先だたれ次下に韻の來るときは其鼻音は重複せらる. pratyai āsinaḥ = pratyañmāsinaḥ (西面して坐せる). tasmin adrau = tasminnadrāu (其山の上に).

35. 語尾の n と次下の硬の齶音, 斷音及び齒音との間には此等の音に相當せる索音を挿入し且つ其 n は隨韻となる. mṛgān vidhyaṇ varāhān ca tarakṣūn mahiṣūn tathā = mṛgānvidhyaṇvarāhāñśca tarakṣūnmahiṣūñśtathā (鹿を

射て又猪を, タラクシュ(肉食獸の名)と又水牛とを). agaman tataḥ = agamañśtataḥ (其後彼等は去れり).

36. 語の終の m は半韻又は發聲の次前に在ときは隨韻となる. kim karomi = kiñ karomi (我は何を爲べきや). svargam jagāma = svargañ jagāma (彼は天に往けり). bhadrām te = bhadrāñ te (汝に幸あれ). śrūyatām vacanam mama = śrūyatāñ vacanañ mama (我が言は聽かるべし). sam (俱に) + patanti (彼等は飛び去る) = samptanti (彼等は俱に飛び去る).

37. 語の終の r 又は s は硬の齶音と斷音の次前に在るときは轉じて其音に相當する索音となり. 硬の喉音唇音或は索音の次前に在ときは轉じて止聲となる. (6條参照). 硬齒音の前に在ときは r は s となり. s は變化せず. ajahrur chatram = ajahrūśchatram (彼等は繖蓋を持ち來れり). kuṭhārais taṅkaiś ca = kuṭhāraiśtaṅkaiśca = (斧と楔とを以て). bhartur parityāgas = bhartuḥ parityāgaḥ (26條) (夫を捨つ). haṃsās plavās kurarās ca = haṃsāñ plavāñ kurarāśca (鵝鶩及び海鷺). arthas sidhyati = arthañ sidhyati (目的達せらる). pitur te = pituste (汝の父の). tapas tivram は其形を變せず. tapastivram (劇しき苦行).

38. 軟聲の次前に在りて a と ā との餘の韻の次後に來る語の終の s は r に變ず若し次後に r 來るときは其 r 消滅して次前の韻を延長す. mṛgais bahubhis ākirṇa = mṛgairbahubhirākirṇa (多の鹿充滿せり). cerur ranyam vanam = (36條) cerū ranyañ vanam (彼等は樂しき林を逍遙し

たり). saha gopībhis rarāma=saha godibhī rarāma (彼は牧牛女と俱に戯れたり).

例外. 感歎詞 bhos (よ.呼召の時の語)は韻又は軟音の次前に在ときは其 s を去る. bho āruṇe (Āruṇiよ). bho mitra (友よ). bho bhoh sabhāsadaḥ (おゝ判事方よ).

39. 語の終の字 as は軟發聲又は a の次前に在ときは o となる. 其餘の韻の次前に來ときは其 s 消滅す. madiyas namaskāras vācyas bhagavatas=madiyo namaskāro vācyo bhagavataḥ (我が歸敬は聖者に對して申べし). gatas arāṇye=gato 'raṇye (18條) (林中に去れり). candras iva=candra iva (月の如く). atas ūrdhvam=ata ūrdhvam (爾來).

備考. 代名詞の語幹 tad (彼.其)及び etad (此)の體聲なる sas 及び eṣas (113條)は唯だ a の前にのみ so 及び eṣo (39條)として現はれ文章の結尾には saḥ 及び eṣaḥ (26條)となり a の餘の一切の聲の次前には sa 及び eṣa として現はる. so 'bravit (彼曰へり). eṣa kālaḥ (此の時). sa bālāḥ (其小兒). eṣa dharmāḥ (此の法).

40. 語の終の字 ās の s は一切軟聲の次前に在ときは消滅す. devās ūcuv=devā ūcuḥ (26條) (天曰へり). javanās dūtās gacchantu=javanā dūtā gacchantu (急使は發せらるべし).

一語中の聲の轉變.

41. 造語法.格例法.及び活用法に於て後接字を加ふるがため音聲に轉變を起すことあり.此規則としては

主として.15—40條を適用すべきも此中尙若干の添削すべきものあり.已下の諸條に之を明す.

42. 一字の名詞.又は時としては動詞の語根及び語幹.の i, ī, u, ū は韻にて始まる語尾の次前には iy, uv と變ず此等が發聲の次後に在るときは殊に然りとす.

bhī+i=bhiyi (怖れの時). bhū+i=bhūvi (地の上に). sū+e=suve (我生む). śaknu+anti=śaknuvanti (彼等は能くす). tuṣṭu+uḥ=tuṣṭuvuḥ (彼等は讚せり). bodha+i+am=bodheyam (我覺り得ん).

43. 語根に屬せる r 又は v の次前に在る ī 又は ū は其語根の次後に y 又は發聲來るときは大概延長せらる. div+yati=divyati (彼は賭博す). gir+bhīḥ=gīrbhīḥ (語を以て). dhur+s=dhūrḥ (22條) (輓は). 38條に依り語根に屬せる s が r となりしときも是に准ず. āśis+bhīḥ=āśīrbhīḥ (希求に由て).されと又 divya (神聖なる). dhurya (牽く獸).の如き例外もあり.

44. 語根の尾に在 ī は後接字の次前には概ね ir となり.唇音の次後には ur となる. kī (散亂す)=kirati (三.單.現.爲他.). stī (散す)=stīra (43條) (過.受.分.). pī (充たす)=pīryate (三.單.現.受.).

45. e, ai, o, au は韻又は y にて始まる後接字の次前に在ときは ay, āy, av, āv となる. ne+ana=nayana (眼). je+ya=jayya (征服されべき). gai+aka=gāyaka (唱吟者). go+ā=gavā (牝牛にて). go+ya=gavya (牝牛の). nau+i=nāvi (船の中).

46. 語根又は語幹の末尾に在る發聲は韻、半韻、又は鼻音にて始まる後接字の次前に在ときは大概變化せず。其餘の後接字の次前に在ときは22以下の諸條に准じて論せらる。vac(談す)=vacmi(我談す). vacya(談されべき). marut+e=marute(風に).されど marut+bhyaḥ=marudbhyaḥ(27條)(諸の風に).

47. jは或語根のちの次前に在ときはkとなる。又或語根のtの次前に在ときはsとなる(24條の備考27). yuj+ta=yukta(輓されたる). sṛj+ta=sṛṣṭa(49條)(造られたる).

48. t又はthは後接字の聲の始にして軟含氣音の次後に在ときは軟音となりて且其含氣音を已に移す。labh+ta=labdha(得られたる). rundh+thah=ruṇddhah(汝等兩人は拒む).

49. 齒音は斷音の次後に來ときは斷音となる。iṣ+ta=iṣṭa(欲したる). dviṣ+dhi=dviṣṭhi(憎め. 24. 27條). iḍ+te=iḍṭe(彼は讃む).

50. nはc又はjの次後にはñとなる。yāc+nā=yācñā(乞求). yaj+na=yajñā(犠牲). 語の終に在るn又はmは或音にて始まる後接字が語勢を有すれば此等の字の前に消滅す。han(撃つ)の過受分.hata. gam(行く)の過受分.gata 若し語根に語勢を有するときは語根のnは依然として存しmは發聲又はvの次前にはnとなる。hanの不定法.hantum. gamの不定法.gantum, 已過能分. jaganvāms. 索音の次前には兩ら隨韻となる。man(惟ふ)の三單未爲自. māmsyate. kṣam(忍ぶ)の三單未爲自. kṣāmsyate.

備考. 前條の根本的規定は必しも嚴守せられず.

51. nは韻又はn, m, y, vにて従はれr, ṛ, r, ṣにて先だたれたるときに韻、喉音、唇音、y, v, h,の餘の聲が中間に雜はるに非れば斷音に變ず。kar+ana=karana(因). brahman+ya=brahmaṇya(信仰ある). pūṣan=屬. 單. pūṣnah. grah+nāti=grānāti(彼は取る).

備考. 前接字ni並に前接字nis, parā, pari又はpraにて先だたれたる大概の語根のnも亦斷音となる。pra+ni+patati=praṇipatati(彼は落つ). nis+nita=nimīta(辨別されたる). pra+namati=praṇamati(彼は屈む).

52. ṣはtの次前に在ときはśとなる。dṛś+ta=dṛṣṭa(見られたる). 此餘の發聲の次前に在るśとṣは24條に准じて論せらる。kṣはśの如く論せらる。cakṣ(視る)=三. 單. 現. 爲自. caṣṭe. 正過. acāṣṭa.

53. sはk, r, l, 又はn, āを除て餘の韻にて直に先だれ又は唯だ隨韻或は止聲のみ其中間に在ときはśが語尾に在に非んば又はrが直に従ふに非んば變じてśとなる。dhanus(弓)=屬. 單. dhanuṣah. 體. 複. dhanūṃṣi. 依. 複. dhanuṣu. vac(語る)+syatiはvak(24條)+syatiを経てvaksyati(彼は語るならん)となる。gir(語)+su=gīṛṣu(43條)(語中に). 然れとjyotis(光)の體. 單. はjyotiḥ(26條). 爲. 複. はjyotirbhyaḥ(38條).

備考一. 聲の始のsはi又はuにて終る前接字の次後に在ときは亦大抵斷音に變ず。abhi+seka=abhiṣeka(灌頂) anu+sthita=anuṣṭhita(49條. 完成されたる). ni+sīdati=

niṣidati (彼は座す). されと anusmarati (彼は憶念す), vismita (驚きたる) なぞの例外あり.

備考二. 語根 sthā (住まる) 及び stabh (stambh) (支ふ) の聲の始の s は前接字 ud (238 條) の次後に在ときは省き去らる. ud+sthātum=utthātum (立つために). ud+stambhita=uttambhita (舉られたる). 166 條参照).

備考三. 語根に屬せる ā の次後に在りて語の終をなせる s は s にて始まる後接字の次前には變化せざれども軟發聲にて始まる後接字の次前には (z に變じたる後) 除き去らる. ās (座る)=āsse (汝は座る). ādhve (汝等は座る). śās (命ずる)=śādhi (命せよ). 又稀には s の次前に在るとき t に變ずることあり. vas (住ふ) の未爲自. は vat-syāmi. 三單. 不過爲自. は avātsit. 三單. の後接字 t の次前には省き去らるゝことあり. śās の三單. 正過. asāt.

54. h は恒に古の軟含氣音に還源せらる. dah (燃ゆ) の古語は dagh なり. nidāgha (熱) を参考せよ. grah (攝する) の古語は grabh. gh より來りし h は硬發聲又は dh にて始まる後接字の次前に在ときは gh の如く論せらる. 若し軟含氣の齶索聲 (zh) より來れる h は t, th, dh にて始まる後接字の次前に在ときは斷音 (zh. 52 條) となりて次前の韻を延長し而して消滅す. 此餘の後接字の次前に在ときは此 h は gh より來りしものゝ如く論せらる. duh (乳を搾る) は古の dugh より來る. sudugha (善く乳を生ずる) 又は dugh+ta より來れる過受分. dugdha (48 條) を参考せよ. lih (舐る) は古の lizh より來る. 故に其過受分

は lizh+ta より成れる lidha なり. されと一單. 現爲他. は dohmi. lehmi. 二單. dhokṣi (25 條). lekṣi なり.

備考一. 斯かる區分は必しも常に劃然たらず往々にして混濫せらるゝことあり. mih (尿す) の古の形に nimeghamāna (尿を放下する) と云あり. 又 megha (雲) あり. 然るに其過受分は migdha に非して mīdha なり. 又 muh (迷ふ) の過受分に mugdha (可憐なる. 癡呆なる) と mūdha (愚鈍なる) の兩形あり.

備考二. nah (結ぶ) 古の形は nadh なり故に其不定法は nadh+tum=naddhum. 過受分. は naddha なり. vah (乗る) の不定法は voḥhum. sah (堪ゆ) の不定法は soḥhum. ruh (長ず) の不定法は roḥhum. 其過受分. は rūdha なり.

轉 聲 法

55. サンスクリット語に三の姓あり謂く男姓・女姓・中姓・三の數あり謂く單數・兩數・複數・八の格あり謂く體格・作業格・作具格・所爲格・所從格・所屬格・所依格・呼召格。

56. 名詞及び形容詞は聲の終に二類あるに准じて韻の格例法と發聲の格例法との二種あり。韻にて終る若干の名詞形容詞と發聲にて終る多の名詞形容詞は轉聲をなす語幹に階級を分つ。即ち此類の名詞形容詞は或二の語幹を有す謂く強語幹・弱語幹。或は三の語幹を有す謂く強語幹・中語幹・弱語幹。二語幹の名詞形容詞の男姓若しくは女姓なるときは體業・呼の單・兩・及び體・呼の複には強語幹を用ゐる。(強格) 前の餘の格には總べて弱語幹を用ゐる。(弱格) 三語幹の時は體業の單・及び兩・及び體・複には強語幹を用ゐる。呼と發聲にて始まる後接字の次前には中語幹を用ゐる。(中格) 韻にて始まる後接字の次前には弱語幹を用ゐる。若干の名詞形容詞類及び少數の特別なる名詞形容詞には體の單にのみ強語を用ゐるものあり(75.86.95條) 中姓には體業・呼の單に強語幹を用ゐる。三語幹の時は中語幹を用ゐる。兩には恒に弱語幹を用ゐる。複には強語幹を用ゐる。此の餘は男姓及び女姓に同じ。

備考 斯く語幹に階級あるは語勢の位置より起る、猶ほ動詞のときのごとし。強と弱との格のときの語勢

は語幹にあり、弱格のときの語勢は語尾にあり。されど斯る根本の關係は古文に於て已に濫用せられ中古の典文に於て益す多を加へたり。呼召格は常に第一音に語勢を有すれども他の談話に連續するときは此を有せず。

57. 格の語尾

	單.	兩.	複.
體	s	au 中. i	as 中. i
業	m(am)		
具	ā		bhis
爲	e	bhyām	bhyas
從	s(as)		
屬	s(as)	os	ām
依	i		
			su

58. 呼の單は大抵語幹を用ゐると或は體を用ゐることあり。呼の兩と複とは必ず體に同じ。中の體業の單に於てはaにて終る語幹にmを加ふる外更に語尾を有せず。

58. 韻にて終る語幹は種々違例の語尾を有す。aにて終る語幹は殊に然りとす。即ち或格のときはaにて終らずしてe又はaiにて終る。男又は中の從單はdを、屬はsyaを、具複はsを、以て語尾の終の聲とす。āにて終る女とi又はūにて終る多字の女は常に其單の爲にai、從屬にās、依にām、の語尾を有す。i又はū及びi又はuにて終る一字の女の語尾も亦是の如し。業複に於

ける一切の韻にて終る語幹は男の語尾に n, 女の語尾に s, を有す. 此餘の違例は表中に明なり.

備考. 後接字 tas は一切の語幹より從・單を造る. caura (賊)の從. caurataḥ. vidyā (明)の從. vidyātaḥ. vāri (水)の從. vāritaḥ. rājan (王)の從. rājataḥ. 後接字 tra は代名詞に加へられて於・を造る. tatra sthāne (彼處に).

韻にて終る語の格例.

59. a にて終る語幹の男姓. aśva (馬).

	單.	複.
體.	aśvaḥ	aśvāḥ
業.	aśvam	aśvān
具.	aśvena	aśvaiḥ
爲.	aśvāya	aśvebhyaḥ
從.	aśvāt	aśvebhyaḥ
屬.	aśvasya	aśvānām
依.	aśve	aśveṣu
呼.	aśva	aśvāḥ

兩.

體・業・呼.	aśvan
具・爲・從.	aśvābhyām
屬・依.	aśvayoh

中姓例せば dāna (施)も亦是の如し但だ體・業・の單は dānam, 體・業・呼・の兩は dāne. 體・業・呼・の複は dānāni なるを異とす.

60. ā にて終る語幹の女姓. kanyā (處女).

	單.	複.
體.	kanyā	kanyāḥ
業.	kanyām	kanyāḥ
具.	kanyayā	kanyābhiḥ
爲.	kanyāyai	kanyābhyaḥ
從.	kanyāyāḥ	kanyābhyaḥ
屬.	kanyāyāḥ	kanyānām
依.	kanyāyām	kanyāsu
呼.	kanye	kanyāḥ

兩.

體・業・呼.	kanye
具・爲・從.	kanyābhyām
屬・依.	kanyayoh

61. ambā (母)の呼・單には amba を用ゐる.

62. a にて終る形容詞は代名詞の變化法に従ふもの多し.(118條).

63. i 又は u にて終る語幹の男姓. ahi (蛇). paśu (畜).

	單.	複.	單.	複.
體.	ahiḥ	ahayaḥ	paśuḥ	paśavaḥ
業.	ahim	ahīn	paśum	paśūn
具.	ahinā	ahibhiḥ	paśumā	paśubhiḥ
爲.	ahaye	ahibhyaḥ	paśave	paśubhyaḥ
從.	ahēḥ	ahibhyaḥ	paśoh	paśubhyaḥ
屬.	ahēḥ	ahīnam	paśoh	paśūnām

依.	ahau	ahiṣu	paśau	paśuṣu
呼.	ahe	ahayaḥ	paśo	paśavaḥ

兩.

體業呼.	ahī	paśū
具爲從.	ahibhyām	paśubhyām
屬依.	ahyoḥ	paśvoḥ

64. 女姓例せば stuti (讚) 又は dhenu (牝牛) とともに 63 條に准ず。但だ具單は stutyā, dhenvā 業單は stutiḥ, dhenuḥ。又單にては爲を stutyai, dhenvai, 從屬を stutyāḥ, dhenvāḥ, 於を stutyām, dhenvām, に作ることを得 (58 條)。

65. i 又は u にて終る語幹の中姓. vāri (水). madhu (蜜)。

	單.	複.	單.	複.
體業呼.	vāri	vāriṇī	madhu	madhūni
具.	vāriṇā	vāribhiḥ	madhuna	madhubhiḥ
爲.	vāriṇe	vāribhyaḥ	madhune	madhubhyaḥ
從.	vāriṇaḥ	vāribhyaḥ	madhunaḥ	madhubhyaḥ
屬.	vāriṇaḥ	vāriṇām	madhunaḥ	madhūnām
依.	vāriṇi	vāriṣu	madhuni	madhuṣu

兩.

體業呼.	vāriṇī	madhumī
具爲從.	vāribhyām	madhubhyām
屬依.	vāriṇoḥ	madhunoḥ

66. *i 又は u にて終る形容詞は爲從屬依の單及び屬依の兩に於ては此中性の語尾の外此に相當せる男姓の格の語尾を用ゐることを得。

67. sakhi (友) の強語幹は sakhai にして其變化下の如し。單の體は sakhā, 業は sakhāyam, 具は sakhyā, 爲は sakhye, 從屬は sakhyuḥ, 依は sakhyau, 呼は sakhe. 兩の體業呼は sakhāyau. 複の體は sakhāyaḥ.

68. pati は「主」の義に用ゐらるゝ時と合成語の終に在時とは 63 條の ahi の如に變化せらる。「夫」の義に用ゐらるゝ時には其單の具は patyā, 爲は patye, 從屬は patyuḥ, 依は patyau なり。

69. 中姓語 akṣi (眼). asthi (骨). dadhi (酸乳). sakthi (腿) は體業呼の兩の外は韻にて始まる語尾を有する弱格を an にて終る語根より形づくる。單の具. akṣnā, 爲. akṣne. 兩の屬於. akṣnoḥ. 複の屬. akṣnām (87 條). されど體業呼の兩は akṣiṇī なり。

70. i 又は ū にて終る一字の女姓. dhī (思慮). bhū (地)。

	單.	複.	單.	複.
體呼.	dhīḥ	dhiyaḥ	bhūḥ	bhuvaḥ
業.	dhiyam	dhiyaḥ	bhuvam	bhuvaḥ
具.	dhiyā	dhibhiḥ	bhuvā	bhūbhiḥ
爲.	dhiye, dhiyai	dhibhyaḥ	bhuve, bhuvai	bhūbhyaḥ
從.	dhiyaḥ, dhiyāḥ	dhibhyaḥ	bhuvaḥ, bhuvāḥ	bhūbhyaḥ
屬.	dhiyaḥ, dhiyāḥ	dhiyām, dhīnām	bhuvaḥ, bhuvāḥ	bhuvām, bhūnām
依.	dhiyi, dhiyām	dhiṣu	bhuvi, bhuvām	bhūṣu

兩.

體・業・呼.	dhiyau	bhuvau
具・爲・從.	dhibhyām	bhūbhyām
屬・依.	dhiyoḥ	bhuvoh

71. stri(女)の變化は單の體. strī, 業. striyam 或は strīm, 具. striyā, 爲. striyai, 從.屬. striyā, 依. striyām, 呼. stri. 複の業. striyaḥ 或は strīḥ, 屬. strīnām なり.

72. ī 又は ū にて終る多字の女姓. nadi(河). vadhū(婦).

	單.	複.	單.	複.
體.	nadi	nadyaḥ	vadhūḥ	vadhvaḥ
業.	nadīm	nadīḥ	vadhūm	vadhūḥ
具.	nadyā	nadībhiḥ	vadhvā	vadhūbhiḥ
爲.	nadyai	nadībhyaḥ	vadhvai	vadhūbhyaḥ
從.	nadyāḥ	nadībhyaḥ	vadhvāḥ	vadhūbhyaḥ
屬.	nadyāḥ	nadinām	vadhvāḥ	vadhūnām
依.	nadyām	nadiṣu	vadhvām	vadhūṣu
呼.	nadi	nadyaḥ	vadhu	vadhvaḥ

兩.

體・業・呼.	nadyau	vadhvau
具・爲・從.	nadibhyām	vadhūbhyām
屬・依.	nadyoḥ	vadhvoh

73. lakṣmī(福)の體單. は lakṣmīḥ なり.

ṛ にて終る語幹.

74. ṭr にて終る作者名詞 (nomina agentis) には三の語

幹あり. 謂く強語幹は tar. 中語幹は tar. 弱語幹は ṭr なり. dātṛ(施者).

	單.		複.	
	男.	中.	男.	中.
體.	dātā	dātṛ	dātāraḥ	dātṛṇi
業.	dātāram	dātṛ	dātṛn	dātṛṇi
具.	dātṛā	dātṛnā	dātṛbhiḥ	
爲.	dātṛe	dātṛne	dātṛbhyaḥ	
從.	dātṛuḥ	dātṛnaḥ	dātṛbhyaḥ	
屬.	dātṛuḥ	dātṛnaḥ	dātṛnām	
依.	dātari	dātṛni	dātṛṣu	
呼.	dātāḥ	dātṛ (dātāḥ)	dātāraḥ	dātṛṇi

兩.

	男.	中.
體・業・呼.	dātārau	dātṛṇi
具・爲・從.	dātṛbhyām	dātṛbhyām
屬・依.	dātṛoḥ	dātṛṇoḥ

75. 親縁を表はす語の強幹は體の單. 中幹は業の單. と體・業・呼の兩. と業の複とのみなり. 此餘は總て弱幹を用ゐる. pitṛ(父)の體. pitā, pitarau, pitaraḥ. 業. pitaram, pitarau, pitṛn. 具. pitrā, pitṛbhyām, pitṛbhiḥ. 女姓は業の複に於て s の語尾を有す. matr(母)の業の複. matrīḥ.

76. naptṛ(孫)及び svasṛ(姉妹)は74條に依て變化せらる. 業の單. は naptāram, svasāram. 體・業・呼の兩. は naptārau, svasārau. 體の複. は naptāraḥ, svasāraḥ. 業の複. は naptṛn, svasṛḥ.

77. nṛ (人) は 75 條に依る。但だ屬の複は nṛnām 或は nṛnām に作ることを得。

ai, o, 及び au にて終る語幹。

78. rai 男.(産). go 男.女.(牛). nau 女.(船).

單.			複.		
體呼.	rāḥ	gauḥ nauḥ	體呼.	rāyaḥ	gāvaḥ nāvāḥ
業.	rāyam	gām nāvam	業.	rāyaḥ	gāḥ nāvāḥ
具.	rāyā	gavā nāvā	具.	rābhiḥ	gobhiḥ naubhiḥ
爲.	rāye	gave nāve	爲從.	rābhyaḥ	gobhyaḥ naubhyaḥ
從屬.	rāyaḥ	goh nāvāḥ	屬.	rāyam	gavam nāvām
依.	rāyi	gavi nāvi	依.	rāsu	goṣu nauṣu

兩.

體業呼.	rāyau	gāvau	nāvau
具爲從.	rābhyām	gobhyām	naubhyām
屬依.	rāyoḥ	gavoḥ	navoḥ

發聲に終る語の格例

一語根の名詞, 形容詞.

79. marut 男.(風). diś 女.(方).

單.		複.			
體呼.	marut	dik	體業呼.	marutaḥ	diśaḥ
業.	marutam	diśam	具.	marudbhiḥ	digbhiḥ
具.	marutā	diśā	爲從.	marudbhyaḥ	digbhyaḥ
爲.	marute	diśe	屬.	marutam	diśam
從屬.	marutaḥ	diśaḥ	依.	marutsu	dikṣu
依.	maruti	diśi			

兩.

體業呼.	marutau	diśau
具爲從.	marudbhyām	digbhyām
屬依.	marutoḥ	diśoḥ

80. 中姓は體業呼の複は最後の音の次前に其音に相當する鼻聲を挿む. 索音若くは h の次前には隨韻を挿む. hṛd (心) は hṛndi. asṛj (血) は asṛñji. saras (池) は sarāṃsi. jagat (世) の體業呼の單は jagat, 兩は jagati, 複は jaganti なり.

備考. 上の如く鼻聲を挿むは語幹の階級的變化のうち強語幹を造るに鼻聲を挿むより (82. 83. 85. 86. 97. 98 各條) 類例せられたるなり.

81. r にて終る語幹の gir 女.(聲) と pur 女.(市) の體の單は giḥ, pūḥ (43 條). 具の兩は gīrbhyaḥ, pūrbhyaḥ. 依の複は gīṛṣu, pūṛṣu (53 條) なり.

多語幹の名詞と形容詞.

82. ac にて終る形容詞は二語幹を有するあり. 其例を舉れば強語幹は prañc. 弱語幹は prañc (東方の). 體男. prañ, prañcau, prañcaḥ. prañcam, prañcau, prañcaḥ 具. prañcā, prañgbhyaḥ, prañgbhiḥ. 體中. prañk, prañcī, prañci. 又三語幹を有するあり. 其例を舉れば強語幹は pratyañc. 中語幹は pratyac. 弱語幹は pratic (西の方). viṣvañc, viṣvac, viṣuc (普き). udañc, udac, udic (北方の). 體單男. pratyañ, viṣvañ, udañ. 具複. pratyagbhiḥ. viṣvagbhiḥ, udagbhiḥ. 具單. praticā. viṣucī. udicā.

83. 爲他言 (120 條) の現在分詞の強語幹の例 tudant. 弱語幹の例 tudat (擊つ).

	單.	兩.	複.
男體呼	tudan	tudantau	tudantaḥ
業	tudantam	tudantau	tudataḥ
具	tudatā	tudadbhyām	tudadbhiḥ
中體業呼	tudat	tudati	tudanti

備考. 體業呼の兩の中には強語幹を用ゐることあり. 女姓に於ても亦是の如し(235條).

84. 長字*語根は弱語幹より總の格を造る. dadat(施す)の體男は dadat, dadatau, dadataḥ. 複中は dadati 或は dadanti.

85. mahat(大なる)の強語幹は mahānt. 體の男は mahān, mahāntau, mahāntaḥ. 業. mahāntam, mahāntau, mahataḥ. 呼の單は mahan.

86. mat 又は vat にて終る形容詞及び二人稱の代名詞 bhavat の體單は mān 又は vān なり. 此餘は 83 條の如し.

87. n にて終る語の男の例. rājan (王). 強語幹 rājan. 中語幹 rājan 發聲の次前には rāja. 弱語幹 rājī.

	單.	兩.	複.
體	rājā	體業呼. rājānau	體. rājānaḥ
業	rājānam	具爲從. rājābhyām	業. rājāḥ
具	rājā	屬依. rājāḥ	具. rājābhiḥ
爲	rājā		爲從. rājābhyah

* 144 條参照

從屬. rājāḥ	屬. rājānām
依. rājī (rājani)	依. rājasu
呼. rājan	呼. rājānaḥ

中姓語亦是の如し. 例せば nāman (名)の如し. 但だ異なる所は體業呼の單. nāma, 兩. nāmnī, 或は nāmanī, 複. nāmānī なり. 呼の單は亦 nāman にも作ることあり.

88. man 又は van にて終る語にして次前に發聲あるものは弱語幹を有せず. 故に ātman (己) の具單は ātmanā なり.

89. maghavan (因陀羅). yuvan (幼なき). śvan (狗)の弱語幹は maghon. yūn. śun なり. 故に具の單は maghonā. yūnā. śunā なり.

90. ahan 中(日)は中格を造るに ahas と云語幹を用ゐる. 體業呼の單を造るには ahar を用ゐる. 合成語に aharahaḥ (日々)の形あり. 體業呼の兩は ahni 或は ahni, 複は ahni. 具の複は ahobhiḥ.

91. han (殺す)と云語幹の古き形は ghan なり而して合成語の尾にあるときは其強語幹は單だ體の單男と體業呼の複中となり. 而して弱語幹は glm なり. brahman (殺婆羅門者)の單の體は brahmahā, 業は brahmahanam, 具は brahmagnā. 具の複は brahmahabhiḥ.

92. in にて終る語の強語幹 in は單だ體單男と體業呼複中なり. 韻の次前の弱語幹は in にて發聲の次

前の弱語幹は i なり. balin (強き) の體. 單. の男. は bali. 中. は bali. 體. 複. 男. は balinaḥ. 中. は balini. 具. 複. は balibhiḥ.

93. path (路) 及び math (攪動するために用ゐる棒) の體. 單. は panthāḥ. manthāḥ なり. 此餘の強語幹は pathān. manthān. 中語幹は pathi. mathi. 弱語幹は path. math なり. 體. の兩. は panthānau, 複. は panthāḥ. 業. の單. は panthānam, 複. は pathaḥ. 具. の單. は pathā, 複. は pathibhiḥ.

94. ap 女. (水) は單だ複數の形のみあり. 體. apaḥ. 業. apaḥ. 具. adbhiḥ. 爲. 從. adbhyaḥ. 屬. apām. 依. apsu.

95. div 女. (天) の單. は dyauḥ, divam, divā, dive, divaḥ, divi. 兩. は divau, dyubhyām, divoḥ. 複. は divaḥ, dyubhiḥ, dyubhyaḥ, divām, dyusu.

96. as, is, us にて終る中姓語. 此中第一の例は manas (意). 體. 業. 呼. manaḥ, manasī, manāṃsi (80 條). 具. は manasā, manobhyām, manobhiḥ (39 條). 第二の例は jyotis (光). 體. 業. 呼. jyotiḥ, jyotiḥ, jyotiṃsi (53, 80 條). 具. jyotiḥ, jyotirbhyām, jyotirbhiḥ (38 條). 第三の例は cakṣus (眼). 體. 業. 呼. cakṣuḥ, cakṣuḥ, cakṣuṃsi. 具. cakṣuḥ, cakṣurbhyām, cakṣurbhiḥ. as にて終る男姓及び女姓語は體. 業. を除ては咸な中姓語に同じ. vedhas 男. (造物者) の體. vedhāḥ, vedhasau, vedhasaḥ. 業. vedhasam, vedhasau, vedhasaḥ. apsaras 女. (天女) の體. apsaraḥ, apsarasau, apsarasah. 業. apsarasam, apsarasau, apsarasah. 形容合成語も亦是の如し. 例せば sumanas (善き意の) の體. 男. 及び女. sumanaḥ. 業. 男. 及び女. sumanasam. is 又は us にて終る語が合成語の尾に在ときは體. に於て韻を長ふ

せず. brhajjyotis (盛に耀ける) の體. brhajjyotiḥ, 業. brhajjyotiḥ. sam. dirghāyus (長生せる) の體. 業. dirghāyusaḥ.

備考. āsis 女. (請) の s は語根に屬するを以て其體は āsiḥ, 業. āsiḥ. 具. 複. は āsirbhiḥ (43 條).

97. iyas にて終る比較級の強語幹 iyāms. 弱語幹 iyas. gariyas (尙重き) の體. gariyān, gariyānsau, gariyānsaḥ. 呼. の單. gariyan. 具. gariyasā, gariyobhyām, gariyobhiḥ. 中. の體. 業. 呼. gariyaḥ, gariyasi, gariyāṃsi.

98. 已過能分の強語幹は vāms, 中幹は van, 弱幹は us. rurudvāms, rurudvat, ruruduḥ (泣きたる). 男. の體. は rurudvān. rurudvānsau, rurudvānsaḥ. 具. は ruruduḥ, rurudbhyām, rurudvadbhiḥ. 中. の體. は rurudvat, ruruduḥ, rurudvāṃsi.

99. pums (人) の強幹 pumāms, 中幹 pum, 弱幹 pums. 單. は pumān, pumānsam, pumsā. 呼. は puman. 複. は pumānsaḥ, pumsaḥ, pumbhiḥ, pumsu.

100. anaḍuḥ (牯牛) の強幹 anaḍvāḥ, 中幹 anaḍut, 弱幹 anaḍuḥ なり. されど體. の單. は anaḍvān. 呼. の單. は anaḍvan なり. 業. は anaḍvāham, anaḍvāhan, anaḍuḥ. 具. は anaḍuhā, aḍudbhyām, anaḍudbhiḥ.

比較法

101. 比較級の後接字 tara 及び最上級の後接字 tama は語幹に直に附加へらる. 若二語幹あるものには其弱語幹に, 若三語幹あるものには其中語幹に, 附加へらる. puṇya (淨き) puṇyatara, puṇyatama. prāñe (東方の) prāktara,

prāktama (82 條). vidvāms (知識ある) vidvattara, vidvattama (98 條).

102. 比較級の後接字 *iyas* 及び最上級の後接字 *iṣṭha* は語根に直に附加へらる。而して語根の韻は大抵箋拏となる。此の原級の語は多くは *u* 又は *ra* にて終る。laghu (輕き) laghīyas, laghiṣṭha. mṛdu (軟かき) mṛdiyas, mṛdiṣṭha. prthū (廣き) prthīyas, prthiṣṭha. kṣipra (速なる) kṣepīyas, kṣepiṣṭha. dūra (遠き) dāvīyas, daviṣṭha. priya (愛すべき) preyas, preṣṭha. guru (重き) gariyas, gariṣṭha. bhūri (多き) bhūyas, bhūyiṣṭha. śreyas, śreṣṭha (尙好き。最も好き。śrī「好」に屬せる語) の原級は praśasya (勝れたる) に, kanīyas, kaniṣṭha (尙稚き。最も稚き) の原級は alpa (小なる) に、ありとす。

103. tara と tama なる後接字は *iyas* なる比較級又は *iṣṭha* なる最上級に附加へらるゝことあり。gariyastara. śreṣṭhatara, śreṣṭhatama.

數 詞*

104. 算數. 1 eka. 2 dvi. 3 tri. 4 catur. 5 pañcan. 6 ṣaṣ. 7 saptan. 8 aṣṭan. 9 navan. 10 daśan. 11 ekādaśan. 12 dvādaśan. 13 trayodaśan. 14 caturdaśan. 15 pañcadaśan. 16 ṣoḍaśan. 17 saptadaśan. 18 aṣṭadaśan. 19 navadaśan 或は ūnavimśati. 20 vimśati. 30 triṃśat. 40 catvāriṃśat. 50 pañcaśat. 60 ṣaṣṭi. 70 saptati. 80 aṣṭi. 90 navati. 100 śata. 200 dve

* 數詞ハ算數, 號數ともに名詞として (substantively) 又は形容詞として (adjectively) 用ゐらる。

śate 或は dviśata. 300 triṇi śatāni 或は triśata. 1000 sahasra. 10,000 ayuta. 100,000 lakṣa.

105. 2, 3, 及び 8 の數は 10, 20, 及び 30 に連續するときは *dva*, *trayas*, *aṣṭā* となり 80, 100, 及び 1,000 に連續するときは *dvi*, *tri*, *aṣṭa* となる。40 より 70 までと 90 とに連續するときは前兩様の中何れを用ゐるも可なり。22 dvāvimśati. 33 trayastriṃśat. 28 aṣṭāvimśati. 82 dvyaśiti. 103 triśata. 1008 aṣṭasahasra. 19, 29, 39 等は ūna (少) 或は ekona (少一) の字を次前に附加へて言ひ詮はすことあり。19 ūnavimśati 或は ekonavimśati.

106. eka 1 は 117 條に准じて變化せらる。dvi 2 は dva の二數 (59, 60 條) として變化せらる即ち體業・呼の男は dvau. 女・中は dve. tri 3 と catur 4 とは次の如し。

	男.	中.	女.	男.	中.	女.
體・呼.	trayaḥ	triṇi	tisraḥ	catvāraḥ	catvāri	catasraḥ
業.	trīn	triṇi	tisraḥ	catvāraḥ	catvāri	catasraḥ
具.	tribhiḥ	triṇi	tisṛbhiḥ	catvurbhiḥ	catvāri	catasṛbhiḥ
爲・從.	tribhyaḥ	triṇi	tisṛbhyaḥ	catvurbhyaḥ	catvāri	catasṛbhyaḥ
屬.	trayāṇām	triṇām	tisṛṇām	catvurnām	catvāriṇām	catasṛṇām
依.	triṣu	triṇu	tisṛṣu	catvurṣu	catvāriṣu	catasṛṣu

107. pañcan 5 の轉聲は體業・呼. pañca, 具. pañcabhiḥ, 爲・從. pañcabhyaḥ, 屬. pañcānām, 依. pañcasu. saptan 7. aṣṭan, 8. navan 9. daśan 10. 及び此等の語にて終る數詞は皆上の例に准ず。aṣṭan は又體業・呼. aṣṭau, 具. aṣṭābhiḥ, 爲・從. aṣṭā-

bhyaḥ, 依. aṣṭāsu と變することあり. ṣaṣ 6 の轉聲は體業呼. ṣaṭ, 具. ṣaḍbhiḥ, 爲從. ṣaḍbhyaḥ, 屬. ṣaṣṭām, 依. ṣaṣṭsu.

108. 20 より 99 に至る數は單數女姓. 100, 1,000, 10,000 及び 100,000 は單數中姓なり. 算へられたる事物は或は複數にして數詞と同格に造り或は所屬格複數にして數詞に並べ唱へ或は數詞と俱に一の合成語に造ることあり. ṣaṣṭyām varṣeṣu (六十年間). catvāri sahasrāṇi varṣāṇām (四千年). varṣāsatam (百年).

109. 號數. 1. prathama. 2. dvitīya. 3. tṛtīya. 4. caturtha 或は turīya. 5. pañcana. 6. ṣaṣṭha. 7. sapṭama. 8. aṣṭama. 9. navama. 10. daśama. 11. ekādaśa. 12. dvādaśa. 20. viṃśatitama 或は viṃśa. 30. triṃśattana 或は triṃśa. 40. catvāriṃśattama 或は catvāriṃśa. 50. pañcāśattama 或は pañcāśa. 60. ṣaṣṭitama. 61. ekaṣaṣṭitama 或は ekaṣaṣṭa. 70. sapṭatitama. 72. dvisapṭatitama 或は dvisapṭata. 80. aśītītama. 83. tryaśītītama 或は tryaśīta. 90. navatītama. 94. caturnavatītama 或は caturnavata. 100. śatatama. 1,000. sahasratama.

110. 數の副詞. sakṛt 一回. dvīḥ 二回. triḥ 三回. catuḥ 四回. pañcakṛtvah 五回. ṣaṭkṛvah 六回等. ekadhā 一倍. dvidhā 或は dvedhā 二倍. tridhā 或は tredhā 三倍. caturdhā 四倍. pañcadhā 五倍. ṣoḍhā 六倍等. ekaśah 每一. dviśah 每二. triśah 每三. sarvaśah 遍く.

代名詞.

111. 第一人稱代名詞の語幹の單. mad, 複. asmad. 第二人稱代名詞の語幹の單. tvad, 複. yuṣmad.

	單.	複.
體呼.	aham tvam	vayam yūyam
業.	mām tvām	asmān yuṣmān
具.	mayā tvayā	asmābhiḥ yuṣmābhiḥ
爲.	mahyam tubhyam	asmabhyam yuṣmabhyam
從.	mat tvat	asmat yuṣmat
屬.	mama tava	asmākam yuṣmākam
依.	mayi tvayi	asmāsu yuṣmāsu
		兩.
體業呼.	āvām	yuvām
具爲從.	āvābhyām	yuvābhyām
屬依.	āvayoh	yuvayoh

附帶詞の單の業は mā. tvā. 爲屬は me. te. 兩の業爲屬は nau. vām. 複の(業)爲屬は naḥ. vaḥ.

備考. 此の條及び後の條中に擧たる語幹は合成語の前分に見ゆる形を用ゐたり即ち人稱代名詞の時は其所從格の形を用ゐたり. 此餘の代名詞の時は體單中の形を用ゐたり mat-pitā (我が父). yuṣmad-bhrātā (汝等の兄弟). tad-bhāryā (彼の婦). ado-mūla (其に基きて). kiṃ-sakhi (悪友).

112. 上の餘の代名詞は代名詞の格例に固有なる若干の語尾を通有す。單・男・中・の爲. smai, 從. smāt, 依. smin. 女・の爲. syai, 從・屬. syāḥ, 依. syām. 中・の體・業. d, 複・の體・男. e, 屬・男・女・中. sām.

113. 第三人稱代名詞及び指示詞. 語幹. tad.

單.		兩.		複.	
男.	女.	男.	女.	男.	女.
體・呼. saḥ	sā	體・業・呼. tau	te	體・呼. te	tāḥ
業. tam	tām	具・爲・從. tābhyām		業. tān	tāḥ
具. tena	tayā	屬・依. tayoh		具. taiḥ	tābhiḥ
爲. tasmai	tasyai			爲・從. tebhyaḥ	tābhyaḥ
從. tasmāt	tasyāḥ			屬. teṣām	tāsām
屬. tasya	tasyāḥ			依. teṣu	tāsu
依. tasmīn	tasyām				

中姓の體業の單. tat, 兩. te, 複. tāni. 餘は男姓に同じ。語幹 etad(此人)亦是の如し。單の體. eṣaḥ, eṣā, etat. 體の saḥ 及び eṣaḥ に関しては39條の備考を見よ。

114. 語幹 idam(此).

單.		二.		複.	
男.	女.	男.	女.	男.	女.
體・呼. ayam	iyam	體・業. imau	ime	體. ime	imāḥ
業. imam	imām	具・爲・從. ābhyām		業. imān	imāḥ
具. anena	anayā	屬・依. anayoh		具. ebhiḥ	ābhiḥ
爲. asmai	asyai			爲・從. ebhyaḥ	ābhyaḥ

從. asnāt	asyāḥ	屬. eṣām	āsām
屬. asya	asyāḥ	依. eṣu	āsu
依. asmin	asyām		

中姓の體業の單. idam, 兩. ime, 複. imāni. 餘は男姓に同じ。

115. 語幹 adas(其).

單.		兩.		複.	
男.	女.	男・女・中.	男.	女.	
體・呼. asau	asau	體・業. amū	體. amī	amūḥ	
業. amum	amūm	具・爲・從. amūbhyām	業. amūn	amūḥ	
具. amunā	amuyā	屬・依. amuyoh	具. amībhiḥ	amūbhiḥ	
爲. amuṣmai	amuṣyai		爲・從. amībhyaḥ	amūbhyaḥ	
從. amuṣmāt	amuṣyāḥ		屬. amīṣām	amuṣām	
屬. amuṣya	amuṣyāḥ		依. amīṣu	amuṣu	
依. amuṣmin	amuṣyām				

中姓の體業の單. adah, 複. amūni.

116. 此餘の一切の代名詞及び代名詞的形容詞は113條に准じて轉聲せらる。關係詞の語幹 yad の體單. yaḥ, yā, yad. 疑問詞の語幹 kim の體單. kaḥ, kā, kim. anya, (他の)の體單. anyāḥ, anyā, anyad 等。語幹 enad(彼)は唯だ業の單兩複と具の單と屬依の兩にのみ用ゐらる。

117. eka(一). ekatara(二の隨一). itara(餘). ubhaya(兩). viśva, sarva(一切各)は113條に准ず。但し體單の中はdに非してmにて終る。

118. 一般には117條の如しと雖も又例外としては

從依の單・男・中・及び體の複・男に於ては名詞の格例に順ふことあり例せば adhara (下の). antara (中の). apara (他の). avara (後の, 西方の). utara (上の, 北の). dakṣiṇa (右の, 南の). para (晩き). pūrva (前の, 東の). sva (自の) の如し.

119. cana. cid. 又は api が疑問詞に附加へられたるときは其意義をして不定ならしむ. kaḥ (誰ぞ) は kaśca-na, kaścit, ko'pi (所有る人). katham (云何ぞ) は kathamcana, katham cit, kathamapi (云何なる方法にても). kva (何處に) は kva cana, kva cit, kvāpi (所有る處) となる.

活用法.

120. 動詞の言類(voice)には爲他言・爲自言及び受動言の別あり. 受動言は爲自言の語尾を用ゐる(194條).

121 動詞の時(tense)は現在・正過去・單不定過去・索不定過去・已過去・複説已過去・單未來・複説未來・及び施設過去是なり.

122. 言の方法(mode)は三類あり. 謂く直説法・願望法・(可能法)及び命令法是なり. 古代の言語に最も多く發達したる接續法は唯だ命令法として一人稱の單・兩・複にのみ用ゐらる.

現在には願望法と命令法とあり. 不定過去に又願望法あり又希求法と稱せらる. 餘の言の時は悉とく直説法なり.

123. 此の外使役法・求欲法・増上法(203—212條). 不定法(222條). 絶對法(223—227條)及び諸の分詞(214—221條)皆な動詞に攝在す.

備考. 獨立文中の定動詞は句の初に在るときにのみ語勢あり. 附屬文にありては此限に非ず.

124. 語尾は二類に分る. 謂く本(直・現・單・未)及び末(正過・不過・施過・願)是なり. 命令法は大部分に於て特別の語尾を有し. 已過は全く特別の語尾を有す(173條).

本.		末.		命令法.	
爲他.	爲自.	爲他.	爲自.	爲他.	爲自.
單.	1. mi e	m	i	āni	ai
	2. si se	s	thās	dhi (hi)	sva
	3. ti te	t	ta	tu	tām
兩.	1. vas vahe	va	vahi	āva	āvalai
	2. thas āthe	tam	āthām	tam	āthām
	3. tas āte	tām	ātām	tām	ātām
複.	1. mas mahe	ma	mahi	ām	āmahai
	2. tha dhve	ta	dhvam	ta	dhvam
	3. nti nte	n	nta	ntu	ntām

願望法は一・單・爲自のときは語尾 a, 三・複・爲他のときは ur, 爲自のときは ran, を有す. 餘の違例は127條を参照すべし.

125. 正過・不過・施過は言首に a を附加す. 此 a は聲の始にある語根の韻に合して弗栗地となり語勢を有す. i(行く)の三・單・正過・爲他. ait. ukṣ(水を散く), auksat. 又此 a は遮止辭 mā(勿)の後には詩史其他の文書に於て大概省略せらる. 已過去, 求欲法, 増上法と及び不定過去の一分は長字(144條)を有す.

126. 現在と正過去とに於て語根を論ずるに二種の變化法あり。此を分つて十類とす。一四六及び十類は第一種に屬し。餘は第二種に屬す。

第一種變化

127. 第一種變化に屬する各類に普通なることは(一)語幹は a にて終る。此 a は ma 又は va にて始まる語尾の前には延長せらる。(二)二單命爲他には單に語幹を用ゐる。(三)爲自言の語尾 āthe, āte, āthām, ātām は願望法を除て餘は ethe ete, ethām, etām となる。而して此語尾、又餘の語尾 e の前には語幹の a は省き去らる。(四)願望法の標幟は恒に i なり。此 i は語幹の a と合して e となる(42條参照)。

第一類は語根に a を附加へて語幹を造る。語勢は語根に在り。其韻は窶擊(13條)にて強めらる。但し韻が聲中にありて本來長きと又位置に由て長きとを除く。ruh(長ずる)の語幹 roha. nī(導く)の語幹 naya. bhū(有る)の語幹 bhava. sṛ(流るゝ)の語幹 sara. vṛdh(増す)の語幹 vardha. されど kṛīd(戯る)の語幹 kṛīda. nind(嘲る)の語幹 ninda. pat(落る)の語幹 pata. gai(諷ふ)の語幹 gāya(45條)。

(本來長き韻とは ā, ī, ū の如きを稱し。位置に由て長き韻とは次下に二或は二以上の發聲續くときを稱す)。

第六類は語根に a を附加へて語幹を造る。其 a は語勢を有す。語根の韻は變化せず。tud(打つ)の語幹 tuda. diś(示す)の語幹 diśa.

第四類は ya を附加へて語幹を造る。語勢は語根にあり。nah(縛る)の語幹 nahya. div(博す)の語幹 divya(43條)。

第十類は aya を附加へて語幹を造る。語勢は前の a にあり。聲の終に在る i, u, r 又は單發聲の中間に在る a は弗栗地にて強められ。聲の中にある i, u, r は單發聲の前には窶擊にて強められ。彼等の多發聲の前にあると又長韻とは變化せず。cur(盜む)の語幹 coraya. cint(考ふ)の語幹 cintaya.

備考。此の第十類は其の實一方には ya にて終る名稱的動詞(213條)を攝し又一方には使役法(203條)より分つべからず。第十類の餘類と異なる所は現在語幹が餘の時(不定過去の163條及び受動言の195條を除く)又動詞的名稱(過受分の219條を除く)にも依然として變せざるにあり。

第一類

129. ruh(長ず)の語幹 roha.

爲他		現在		爲自	
單	兩	複	單	兩	複

直說法

ronami	rohavaḥ	rohāmaḥ	rohe	rohāvahe	rohāmahe
rohasi	rohathaḥ	rohatha	rohase	rohethe	rohadhve
rohāti	rohataḥ	rohanti	rohate	rohete	rohante

願望法

roheyam	roheva	rohema	roheya	rohevali	rohemahi
---------	--------	--------	--------	----------	----------

roheli rohetam rohemā rohethāḥ roheyāthām rohedhvam
 rohet rohetām roheyuḥ roheta roheyātām roherau

命 令 法.

rohāni rohāva rohāma rohai rohāvadai rohāmahai
 roha rohatam rohata rohasva rohethām rohadhvam
 rohatu rohatām rohantu rohatām rohetām rohantām

正 過 去.

aroham arohāva arohām arohe arohāvahi arohāmahai
 arohaḥ arohatam arohata arohathāḥ arohethām arohadhvam
 arohat arohatām arohan arohata arohetām arohanta

第四第六第十類の語幹の轉聲亦是に例して知べし.

129. 第一第四第六類の中若干の語根は語幹を造る方法の同異に由て此を又各別類として分つことを得.(11—19類).

- 11. iṣ 6. (欲す)の語幹iccha
 ṛ 1. (達す) ---ṛecha
 gam 1. (行く) ---gaccha
 yam 1. (拘束す) ---yaccha
- 12. kram 1. (歩む) --- ...krāma 爲自. krama.
 cam 1. ā と俱に(吸ふ) ---cāma
 guh 1. (覆ふ) ---gūha.
- 13. tam 4. (氣絶す) ---tāmya
 bhram 4. (又は1)(彷徨す) ---bhrāmya
 śam 4. (静まる) ---śāmya
 śram 4. (疲る) ---śāmya
 mad 4. (驕る) ---mādyā

- 14. jan 4. 爲自.(生れる)の語幹jāya
- 15. prach 6. (問ふ) ---precha
 vyadh 4. (貫く) ---vidhya
 sad 1. (坐はる) ---sīda
 śo 4. (砥ぐ) ---śya
 so 4. 前接字と俱に(決する) --- ...sya
- 16. kṛt 6. (斷つ) ---kṛnta
 muc 6. (解く) ---muñca
 lip 6. (塗る) ---limpa
 lup 6. (掠める) ---lumpa
 vid 6. (得る) ---vinda
 sic 6. (灌ぐ) ---siñca
- 17. daṁś 1. (咬む) ---daś
 bhraṁś 4. (落つ) ---bhraśya
 rañj 4. (赤くなる) ---raja
 sañj 1. (懸る) ---saja
- 18. dr̥ 6. ā と俱に爲自.(劬勞す) --- ...drūya
 pr̥ 6. vyā と俱に爲自.(營む) --- ...priya
 mṛ 6. 爲自.(死ぬ) ---mriya
 kṛ 6. (搖り出す) ---kira
- 19. ghrā 1. (嗅ぐ) ---jighra
 pā 1. (飲む) ---piba
 sthā 1. (住まる) ---tiṣṭha

備考. dr̥ś(見る)は現在及び正過の爲他と爲自とに用ゐられず. paś(見る)語幹 paśya を此に代用す. 此詞は

唯だ現在及び正過の爲他と爲自とのみ用ゐらる。so
及び so (第15類)の代りに通常は sū 及び sū を用ゐる。

第二種變化

130. 第二種變化に屬する各類に普通なることは
(一)語根に強き(寔擊に化したる)と弱きとあること即ち
強(寔擊に化したる)語幹と弱語幹とあると。(二)二單
命令爲他は韻にて終る語根,又は語幹,のときは語尾 hi
を有し發聲にて終る語根,又は語幹,のときは第九類を
除ては dhi を有す。hu (供養す,第三類)の juhudhi は例外と
す。(三)爲自言の語尾 ante, antām, anta の代に ate, atām,
ata を用ゐる。(四)願望法は爲他言法の標として yā, 爲
自言法の標として ī を有す。此 ī は韻の次前にありて
は iy となる。

131. 強語形を用ゐるは次の三類とす。(一)單直現
及び正過爲他。(二)一單兩複命爲他爲自。(三)三單命爲
他餘は總て弱語形を用ゐる。

第二類

132. 語尾は直に語根に附加へらる。語勢は強語形
にありては語根にあり。弱語形にありては語尾にあり。
語尾若し二字なれば語勢は恒に初の字にあり。56條の
備考及び 125 條を参照せよ。

dviṣ (憎む)の強語幹 dves, 弱語幹 dviṣ.

爲他.		現在.		爲自.	
單.	兩.	複.	單.	兩.	複.
直 說 法.					
dveṣmi	dviṣvali	dviṣmaḥi	dviṣe	dviṣvahe	dviṣmahe
dvekṣi	dviṣṭhāḥ	dviṣṭha	dvikṣe	dviṣāṭhe	dviḍḍhve
dveṣṭi	dviṣṭaḥ	dviṣanti	dviṣṭe	dviṣāte	dviṣate
願 望 法.					
dviṣyām	dviṣyāva	dviṣyāma	dviṣīya	dviṣīvali	dviṣīmaḥi
dviṣyāḥ	dviṣyātām	dviṣyāta	dviṣīthāḥ	dviṣīyāthām	dviṣīdhvam
dviṣyāt	dviṣyātām	dviṣyuh	dviṣīta	dviṣīyātām	dviṣīran
命 令 法.					
dveṣāni	dveṣāva	dveṣām	dveṣai	dveṣāvalai	dveṣāmaḥai
dviḍḍhi	dviṣṭām	dviṣṭa	dviṣva	dviṣāthām	dviḍḍhvam
dveṣṭu	dviṣṭām	dviṣantu	dviṣṭām	dviṣāthām	dviṣātām
正 過 法.					
adveṣam	adviṣva	adviṣma	adviṣi	adviṣvali	adviṣmaḥi
adveṣ	adviṣṭām	adviṣṭa	adviṣṭhāḥ	adviṣāthām	adviḍḍhvam
adveṣ	adviṣṭām	adviṣan	adviṣṭa	adviṣātām	adviṣata

24, 46 條に注意すべし。duh (乳を搾る)の爲他。dohmi,
dhokṣi (25, 54 條), dogdhi (48 條)。duhmaḥi, dugdha, duhanti, 爲自。
duhe, dhukṣe, dugdhe. duhmahe, dhugdḥve, duhate。lih (舐る)の
爲他。lehmi, lekṣi, leḥhi (54 條)。lihmaḥi, liḥha, lihanti。爲自。
lihe, likṣe, liḥhe. lihmahe, liḥhve, lihate。

133. as (有る) の爲他・現・及び正過の轉聲は次の如し。

直 説 法			願 望 法		
asmi	svaḥ	smaḥ	syām	syāva	syāma
asi	sthaḥ	stha	syāḥ	syātam	syāta
asti	staḥ	santi	syāt	syātām	syuḥ
命 令 法			正 過 去		
asāni	asāva	asāma	āsam	āsva	āsma
edhi	stam	sta	āsīḥ	āstam	āsta
astu	stām	santu	āsīt	āstām	āsan

134. i (行く) の爲他の一・單は emi, 一・複は imah, 三・複は yanti. 命は ayāni, ihi, etu. 三・複は yantu. 正過は āyam, aih, ait. 複は aima, aita, āyan. adhi と俱に用ゐられたるときは、爲自・adhīye, 三・單・adhīte, 三・複・adhīyate.

135. 語根 an (呼吸す), jakṣ (食ふ), rud (泣く), śvas (呼吸す), svap (眠る), に加へらるべき語尾が發聲又は y を除て餘の半韻にて初まるときは語幹の尾を i とし、二・及び三・の單・正過・爲他・のときは語幹の尾を a 又は ī とす。rodimi, rodiṣi, roditi. rudimah, rudittha, rudanti. 願は rudyam. 命は rodāni, rudihi, roditu. 正過は arodama, arodaḥ 或は arodih, arodat 或は arodit.

136. brū (言ふ) は強語形にして發聲にて始まる語尾の前には語幹を bravi とす。直・現・爲他・は bravimi, bravīṣi, bravīti. brūmah, brūtha, bruvanti. 命は bravāni, brūhi,

bravītu. 正過は abravam 或は abruvam, abravīḥ, abravīt. 爲自・は bruve, brūṣe, brūte. 三・複・は bruvate.

137. u にて終る語根は強語形にして發聲にて始まる語尾の前には弗栗地となる。stu (讚むる) の直・現・爲他・は stauṃi, stauṣi, stauti. 命は stavāni, stuihi, stautu. 正過は astavam, astauḥ, astaut. 三・複・は astuvan. stu は強語幹を stavi に作る事あり。然すれば三・單・直・現・爲他・は stavīti.

138. śi 爲自 (横たはる) は現・と正過・とに於ては悉とく窶撃韻となり。三・複・の直・と命・の現・及び正過・は rate, ratām, rata の語尾を有す。直・現・は śaye, śeṣe, śete. śemahe, śedhve, śerate. 命は śayai, śeṣva, śetām. 三・複・ śeratām. 正過・は aśayi, aśethāḥ, aśete. 三・複・ aśerata.

139. sū 爲自 (生む) は現・及び正過・に於て悉とく弱語根 sū に作る。直・現・は suve (42 條), sūte. 正過・は asuvi, asūta.

140. vaś 爲他 (要む) の弱語形は總て uś なり。直・現・は vaśmi, vākṣi, vaṣṭi. 三・複・ uśanti.

141. śās 爲他 (令す) は二・單・命・を除て餘の發聲にて始まる語尾或は y の前に在る弱語形にては śiṣ となる。而して三・複・の直・命・の現・及び正過・は 143 條に准じて造らる。直・現・は śāsmi, śāssi (53 條備考 2), śāsti. śiṣmah, śiṣtha, śāsati. 願は śiṣyam. 命は śāsāni, śādhi (53 條備考 3), śāstu. śāsāma, śiṣta, śāstu. 正過・は aśāsam, aśāḥ, aśāt (53 條備考 3). aśiṣma, aśiṣta, aśiṣuḥ.

142. han (殺す) 古の形 ghan (91 條) の弱語形は t 或は

thにて始まる語尾の前には ha (50 條), 韻にて始まる語尾の前には ghm, となる. 二. 單. 命. 爲他. は jahi なり. 直. 現. は hanmi, hamsi, (50 條), hanti. hanvali, hathali, hatahi. hanmali, hatha, ghmanti. 命. は hanāni, jahi, hantu. hanāma, hata, ghmantu. 正過. は ahanam, ahan, ahan. ahanma, ahata, aghman.

第三類

143. 第三類の語根は長字法に由て現在語幹を造る. 三. 複. の現. 及び命. 爲他. に於ては第三類, 并に jakṣ (食ふ. ghas より, 來る) cakās (輝く) 等の如き第二類の動詞は共に ati と atu の語尾を有す. 三. 複. 正過. 爲他. は語尾 an に代るに ur を以てし且つ語幹末の韻を寔撃に變ず. vid (第二類. 知る) も亦語尾を ur に造る. 又 ā にて終る第二類の語根及び dviṣ (第二類. 憎む) も語尾 ur を用ゐることあり.

144. 汎く長字法の規定を明さば

I. 含氣音は其に相當する無氣音にて字を長せらる. cha は ca にて, tha は ta にて, pha は pa にて, dha は da にて, bha は ba にて, 長せらる. chid (絶つ) の已過. ci-cheda. phal (擧ぐ) の已過. paphāla. dhā (置く) の現. dadhāmi. bhī (怖る) の現. bibhemi.

II. 喉音は上來の規則に順ひ其に相當する齶音にて字を長せらる. ka, kha は ca にて. ga, gha 及び ha (54 條) は ja にて, 長せらる. khan (掘る) の已過. cakhāna. gam (行く) の已過. jagāma. hā (捨つる) の現. jahāmi.

III. IV 條に擧たるものを除て餘の連續せる發聲は第一の, 或は其に代るべき, 發聲の音にて字を長せらる. kruś (喚ぶ) の已過. cukrośa. dru (走る) の已過. dudrāva.

IV. 連續せる發聲の初が索聲にして後が硬音なるときは後の音或は其に代るべき音にて字を長せらる. sprś (觸る) の已過. pasparsa. sthā (住まる) の現. tiṣṭhāmi. skand (跳ぶ) の已過. caskanda.

145. 第三類動詞の字を長するに其韻は現及び正過にありては語根の韻を短して此を用ゐる. r に代るに i を以てす. hu (供ふ) juhū. bhī (怖る) bibhī. dhā (置く) dadhā. bhṛ (擔ふ) bibhṛ. 語勢は強語形にありては大概の語根の長字にあり. されど hu (供へる), bhī (怖れる) の如き少數の語には語根にあり. 弱語形にありては語尾が韻にて始まるときに長字にあり. 此餘は語尾にあり.

146. hu (供ふ) の強語幹 juhū. 弱語幹 juhū.

爲他.		現在.		爲自.	
單.	兩.	複.	單.	兩.	複.
		直	說	法.	
juhomi	juhuvah	juhumah	juhve	juhuvave	juhumahe
juhosi	juhuthah	juhutha	juhuse	juhuvathe	juhudhve
juhuti	juhutah	juhuvati	juhute	juhuvate	juhuvate
		願	望	法.	
juhuyam	juhuyava	juhuyama	juhviya	juhvivahi	juhvimahi

命 令 法

juhavāni juhavāva juhavāma juhavai juhavāvabai juhavāmahai
 juhudhi juhutam juhuta juhusva juhvāthām juhudhvam
 juhotu juhutām juhvatu juhutām juhvātām juhvatām

正 過 去

ajuhavam ajuhuva ajuhuma ajuhvi ajuhuvahi ajuhumahi
 ajuhohi ajhutām ajhuta ajhuthāhi ajhvāthām ajhudhvam
 ajuhot ajhutām ajhuvahi ajhuta ajhvātām ajhvata

147. dā (施す) 及び dhā (置く) の弱語幹は dad 及び dadh なり。dadh は 25 條 (48 條に非ず) に准じて論せらる。二單命爲他は dehi, dhehi. dhā の直現爲他は dadhāmi, dadhāsi, dadhāti. dadhmaḥ, dhattha, dadhati. 爲自は dadhe, dhatse, dhatte. dadhmahe, dhaddhve, dadhate.

148. mā 爲自 (量る) は字を長ずるに i 韻を用ゐる。弱語幹は發聲の語尾の前には mimī となり、韻の語尾の前には mim となる。直現 mimé, mimīse, mimīte. 三複 mimate. 正過は amimi. 三 amimīta. 三複 amimata.

149. hā 爲他 (去る) の弱語幹は發聲の語尾の前には jahi 若しくは jahi なり。韻の語尾若しくは願望法のときは jah となる。直現 jahāmi, jahāsi, jahāti. jahimahi 或は jahimahi, jahitha 或は jahitha, jahati. 願 jahyām. 命 jahāni, jahihi 或は jahihi 或は jahāhi, jahātu. jahāma, jahāta, jahātu. 正過は ajahām. 三複 ajahuh.

第 五 類

150. 第五類の語根は no を附加へて強語幹を造り、nu を附加へて弱語幹を造る。su (搾る) の強語幹 suno, 弱語幹 sunu. 韻にて終る語根は v, 又は m, にて始まる語尾の前には其 u を省くことを得。而して二單命爲他は語尾を有せず。sunuvali 或は sunvali. sunumahe 或は sunmahe. 命 sunu. されど發聲にて終る語根は其 u を省くことを得ず又三複のときは語尾 anti の前に其 u を uv に變せざる可らず (88 條と同理なり)。斯かる語根の二單命の語尾は hi なり。故に āp (得) は唯だ āpnuvali, āpnumahi. 三複直現は āpnuvanti (42 條)。命は āpnuhi. 語勢は強語形にありては語幹にあり。弱語形にありては語尾にあり。

151. śru (聞く) の強語幹 śruo. 弱語幹 śru.

爲他		現在		爲自	
單	兩	複	單	兩	複
		直	說	法	
śronomi	śruvali	śrunmaḥ	śruve	śruvahe	śrunmahe
śruṣi	śruthali	śrutha	śruṣe	śruvāthe	śrudhve
śroti	śrutali	śruvanti	śrute	śruvāte	śruvate
		願	望	法	
śruyām	śruyāva	śruyāma	śruvīya	śruvīvahi	śruvīmahī
		命	令	法	
śruvāni	śruvāva	śruvāma	śruvai	śruvāvahai	śruvāmahai

śṛṇu śṛṇutam śṛṇuta śṛṇusva śṛṇvāthām śṛṇudhvam
 śṛṇotu śṛṇutām śṛṇvantu śṛṇutām śṛṇvātām śṛṇvatām

正 過 去

aśṛṇavam aśṛṇuva aśṛṇuma aśṛṇvi aśṛṇuvali aśṛṇumahi
 aśṛṇoh aśṛṇutam aśṛṇuta aśṛṇthāḥ aśṛṇvāthām aśṛṇudhvam
 aśṛṇot aśṛṇutām aśṛṇvan aśṛṇuta aśṛṇvātām aśṛṇvata

第 七 類

152. 第七類の語根は語根に na を挿んで強語幹を造り、語根に n を挿んで弱語幹を造る。bhid (破る) の強語幹 bhinad, 弱語幹 bhind. 語勢は 150 條に同じ。

爲他.		現在.		爲自.	
單.	兩.	複.	單.	兩.	複.
		直	說	法.	
bhinadmi	bhindvaḥ	bhindmaḥ	bhinde	bhindvabe	bhindmahe
bhinatsi	bhintthaḥ	bhinttha	bhintse	bhindāthe	bhinddhve
bhinatti	bhinttaḥ	bhindanti	bhintte	bhindāte	bhindate
		願	望	法.	
bhindyām	bhindyāva	bhindyāma	bhindiya	bhindīvali	bhindīmahi
		命	令	法.	
bhinadāmi	bhinadāva	bhinadāma	bhinadai	bhinadāvahi	bhinadāmahi
bhinddhi	bhinttam	bhintta	bhintsva	bhindāthām	bhinddhvam
bhinattu	bhinttām	bhindantu	bhinttām	bhindātām	bhindatām

正 過 去

abhinadam abhindva abhindma abhindi abhindvahi abhindmahi
 abhinat abhinttam abhintta abhintthāḥ abhindāthām abhindhvam
 abhinat abhinttām abhindau abhintta abhindātām abhindata

是の如く yuj (合はす) は yunajmi, yunakṣi, yunakti. yuñj-maḥ, yuñktha, yuñjanti. piṣ (碎く) は pinaṣmi, pinakṣi, pinaṣti. piṣmaḥ, piṣktha, piṣanti.

第 八 類

第八類の語根は o を附加へて強語幹を造り、u を附加へて弱語幹を造る。其 u は v 若くは m にて始まる語尾の前には省くことを得。

tan (擴げる) の強語幹 tano, 弱語幹 tanu. 二單の命爲他は弱語幹を用ゐる。語勢は 150 條に同じ。

154. kr (作る) の強語幹 karo, 弱語幹 kuru. 弱語形中 m, y, v にて始まる語尾の前には kur となる。

爲他.		現在.		爲自.	
單.	兩.	複.	單.	兩.	複.
		直	說	法.	
karomi	kurvaḥ	kurmaḥ	kurve	kurvahe	kurvmahe
karosi	kurthaḥ	kurtha	kuruse	kurvāthe	kurudhve
karoti	kurtaḥ	kurvanti	kurute	kurvāte	kurvate.
		願	望	法.	
kuryām	kuryāva	kuryāma	kurviya	kurvīvali	kurvīmahi

命 令 法.

karavāṇi	karvāya	karavāma	karāvai	karavāvahai	karavāmahai
kuru	kurutam	kuruta	kuruṣva	kurvāthām	kurudhvam
karotu	kurutām	kurvantu	kurutām	kurvātām	kurvatām

正 過 去.

akaravam	akurva	akurma	akurvi	akurvahi	akurmahi
akaroḥ	akurutam	akuruta	akuruthāḥ	akurvāthām	akurudhvam
akarot	akurutām	akurvan	akuruta	akurvātām	akurvata

第 九 類.

155. 第九類の語根は *nā* を附加へて強語幹を造り、發聲にて始まる語尾の前には *nī*, 韻にて始まる語尾の前には *n*, を附加へて弱語幹を造る。發聲にて終る語根は二單の命爲他の語尾を *āna* とす。 *aś* (食ふ) の強語幹 *aśnā*, 弱語幹 *aśni*, 韻の前には *aśn*. 二單命爲他は *aśāna* なり。されど *kvī* (買ふ) の命は *krīṇihī*. 語勢は 150 條に同じ。

156. *aś* (食ふ).

爲他.		現在.		爲自.	
單.	兩.	複.	單.	兩.	複.
		直	說	法.	
<i>aśnāmi</i>	<i>aśnīvaḥ</i>	<i>aśnīmaḥ</i>	<i>aśne</i>	<i>aśnīvahe</i>	<i>aśnīmahe</i>
<i>aśnāsi</i>	<i>aśnīthaḥ</i>	<i>aśnītha</i>	<i>aśniṣe</i>	<i>aśnāthe</i>	<i>aśnīdhve</i>
<i>aśnāti</i>	<i>aśnītaḥ</i>	<i>aśnānti</i>	<i>aśnite</i>	<i>aśnāte</i>	<i>aśnāte</i>

願 望 法.

<i>aśniyām</i>	<i>aśniyāva</i>	<i>aśniyāma</i>	<i>aśniya</i>	<i>aśniyahi</i>	<i>aśnimahi</i>
----------------	-----------------	-----------------	---------------	-----------------	-----------------

命 令 法.

<i>aśnāni</i>	<i>aśnāva</i>	<i>aśnāma</i>	<i>aśnai</i>	<i>aśnāvahai</i>	<i>aśnāmahai</i>
<i>aśāna</i>	<i>aśnītam</i>	<i>aśnīta</i>	<i>aśniṣva</i>	<i>aśnāthām</i>	<i>aśnīdhvam</i>
<i>aśnātu</i>	<i>aśnītām</i>	<i>aśnāntu</i>	<i>aśnītām</i>	<i>aśnātām</i>	<i>aśnatām</i>

正 過 去.

<i>aśnām</i>	<i>aśnīva</i>	<i>aśnīma</i>	<i>aśni</i>	<i>aśnīvahi</i>	<i>aśnīmahi</i>
<i>aśnāḥ</i>	<i>aśnītam</i>	<i>aśnīta</i>	<i>aśnīthāḥ</i>	<i>aśnāthām</i>	<i>aśnīdhvam</i>
<i>aśnāt</i>	<i>aśnītām</i>	<i>aśnan</i>	<i>aśnīta</i>	<i>aśnātām</i>	<i>aśnata</i>

157. 語根の中間に鼻聲あるときは其鼻聲を去て語尾を附加ふ。 *bandh* (縛る) は *badhmāmi* に, *manth* (攪動する) は *mathmāmi* に, 作る。 *jñā* (知る) も亦是の如く *jñāmi* に作る。 *grah* (攫む) は *grhṇāmi* に作る。

現在時の組織の餘の時.

158. 現在時の組織の餘の時に於て又は動詞的名稱及び餘の名詞形容詞、に於ては發聲、或は *y* を除て餘の半韻にて始まる語尾を直に語根に附加ふ。されど語幹を *i* (稀には *ī*) にて終はらしめ此に語尾を附加ふること更に多し。 *bhū* (破る) の三單未爲他は *bhetsyati*. 不は *bhettum*. されど *pat* (落る) は *i* を加へて語幹を *pāti* とす。未は *patisyati*. 不は *patitum*. *grah* (把る) の未は *grahisyati*. 不は *grahitum*.

不定過去

159. 不定過去を分つて二類とす。(一)單不定過去。(二)索不定過去。124, 125 條参照。

單不定過去

160. 單不定過去に又三類を分つ。謂く(一)語根不定過去。(二)阿不定過去。(三)長字不定過去。

161. 語根不定過去は語根に直に語尾を附加ふ。此不定過去は爲他言の ā にて終る語根又は bhū の語根にのみ用ゐらる。餘の言法に用ゐらるゝこと極めて稀なり。

dā (施す) 及び bhū (有る)。

adām	adāva	adāma	abhūvam	abhūva	abhūma
adāh	adātam	adāta	abhūh	abhūtam	abhūta
adāt	adātām	adāh	abhūt	abhūtām	abhūvan

爲自言にして散見せるものは謂く dhā (置く) の二單 adhithāh. sthā (住まる) の asthithāh. kṛ (作る) の akrthāh. mṛ (死ぬ) の amṛthāh. 三單 adhita, asthita, akrta, amṛta.

162. 阿不定過去は語根に a を加へ此に語尾を附加ふ。lip (塗る) の爲他は alipam. 爲自は alipe. されど正過は alimpam 爲自 alimpe (129 條の 16). bhraṣ (落る) の不過は abhraśam, abhraśe. されど正過は abhraśyam, abhraśye (129 條の 17). śās (命令する) の不過は aśīsam. されど正過は aśāsam (141 條). 轉聲法は正過に同じ。

163. 長字不定過去は最も多く第十類の動詞, 使役法及び名稱的動詞の aya の字を去て用ゐらる (127 條の備考). 長字と語根との韻は其量必しも一樣ならず. 若し語根が中間に a を有し而して ā, ī, ū にて終るときは多くは i 又は ī を以て長字の韻とす. 語幹及び語尾は猶ほ 162 條の如し. cur (盗む) acūcuram. gaṇaya— (算ふ) aji-gaṇam. pī 役 (救ふ) apīparam. nī 役 (導き去らしむ) anīnayam. yuj 役 (輓する) ayūyujam. sthā. 役 (置く) atīṣṭhipam.

164. naś (失ふ) は aneśam (181 條参照) に作る. pat (落る) は apaptam. vac (言ふ) は avocam.

索不定過去

165. 索不定過去は一分は強語幹 (弗栗地韻を有せる) 一分は中語幹 (寔擊韻を有せる) 又一分は弱語幹を有す. 此過去に四類あり. (一) 語根に直に s を加ふ (悉不定過去 s-aorist). (二) i を或は稀には ī を附加へたる語根に s を加ふ (伊瑟不定過去 iṣ-aorist) (三) 語根に siṣ を加ふ (師瑟不定過去 siṣ-aorist). (四) 語根に sa を加ふ (索不定過去 sa-aorist).

166. 悉不定過去は爲他には弗栗地となる. 爲自には i, ī, u, ū にて終る語根は寔擊となり r 又は發聲にて終る語根は平韻となる. śru (聞く) は aśrauśam, aśrośi. kṛ (作す) は akāraśam, akāraśi. dṛś (見る) の三單爲他は adraśit (13 條). bhaj (分つ) の一單は abhākaśam, abhākaśi. t 又は th にて始まる語尾の次前にある s は鼻聲を除て餘の發聲の次後にあるときは省き去らる. tud (撃つ) の二複爲他は

atautsta に非ずして atautta なり。是の如く ksip(投る)は aksipta となる。されど man(惟ふ)の三・單・爲自は amansta (50 條)。kr(作す)の二・複・爲他は akārṣṭa。dhvam の前にある s は軟音の z(27 條)となりて消滅せり。ā の餘の韻の次後には斷聲 z に變じ(53 條)此がために其次後に來る dh は ḍh に變じて(49 條)其 z 消滅す。kr(作す)は akṛḍhvam。nī(導く)は aneḍhvam となる。

167. nī(導く)の轉聲法を擧れば
 anaīṣam anaīṣva anaīṣma aneṣi aneṣvahi aneṣmahi
 anaīṣiḥ anaīṣtam anaīṣta aneṣṭhāḥ aneṣāthām aneḍhvam
 anaīṣit anaīṣtam anaīṣuḥ aneṣta aneṣātām aneṣata

備考 二三・單・及び三・複・の爲他・の形に注意せよ。

168. 伊瑟不定過去は韻にて終る語根のときは爲他に弗栗地となり。爲自に窶拏となる。lū(切斷す)は alāviṣam, alāviṣi。a を有せる單發聲にて終る語根は爲他には意の所欲に隨て弗栗地となすことを得。vad(言ふ)は恒に弗栗地に造らる。grah(把る)の語幹は grahī なり。a を除て餘の韻を有せる語根は爲他・爲自・ともに窶拏となる。paṭh(學ぶ)の三・單・爲他は apāṭhit 或は apathit。vad は唯だ avādīt。grah は唯だ agrahīt, 爲自は agrahīṣta。budh(覺る)は abodhit, abodhiṣta。轉聲法は 167 に同じ。

備考 二・複・の爲自には時として dhvam の dh を斷音に變せざることあり(166 條)。

169. 師瑟不定過去は唯だ爲他のみ用ゐらる。多くは a 若くは ai にて終る語根にして ā にて終る語根の

如くに論せらる。yā(行く)は ayāsiṣam, ayāsiḥ, ayāsit。ayāsiṣma, ayāsiṣta, ayāsiṣuḥ。glai(倦む)は aglāsiṣam。

170. 索不定過去は唯だ a, ā を除て餘の韻を有せる ṣ, ṣ 又は h にて終る語根にのみ用ゐらる。韻は恒に弱し。轉聲法は第一種變化の正過去の法を用ゐる。但し一・單・の爲自は i を有し、二・三・兩・の爲自は āthām, ātam を用ゐる。diś(示す)は adikṣam, adikṣat。adikṣāma, adikṣau。爲自は adikṣi, adikṣata。adikṣāvahi, adikṣāthām, adikṣātām。adikṣanta。guh(隠れる)は aghukṣam, aghukṣi (25 條)。

希 求 法

171. 不定過去に屬せる願望法あり希求法と名けらる。使用さらるゝ語類は次の如し。bhū(有る), bhūyāḥ(汝をして有らしめむ), bhūyāt(彼をして有らしめむ), dā(施す), deyāt(彼をして施さしめむ), pā(守る), pāyāt(彼をして守らしめむ), sthā(住まる), stheyāḥ(汝をして住らしめむ), kri(作る), kriyāt(彼をして作らしめむ), diś(示す), diśyāt(彼をして示さしめむ)。又次の如き特殊の形あり。bhūyāstām(汝兩人をして有らしめむ), brū(言ふ), brūyāsta(汝等をして言はしめむ), pāyāsuḥ(彼等をして守らしめむ), bhūyāsuḥ(彼等をして有らしめむ), vidhāsiṣta(彼をして爲さしめむ。vi と云前接字と俱に用ゐられたる dhā の三・單・爲自)。

已 過 去

172. 語根の初の發聲は 144 條に准じ語根の韻の短かきものを以て字を長ず。語中にある窶拏又は弗栗

地の代には其短音を用ゐ(13條), 語末にある窶拏, 弗栗地又は r, r̄, l の代には a を用ゐる. sev (事ふ), siṣeva. gai (諷ふ), jagau. kṛ (作す), cakāra. tṛ (踰ゆる), tatāra. vṛdh (増す). vavardha.

173. 韻にて始まる語根は此韻にて一字を長す. i 又は u は強語形 (176 條) のときは iy 又は uv (15. 42. 條) にて字を長す. ad (食ふ), āda. āp (得), āpa. iṣ (望む), iyeṣa, iṣima. uṣ (燃す), uvoṣa, ūṣima. 語の初に a ありて二の發聲が次後に續くとき, 又は語の初にある r, は āu を用ゐて字を長す. arc (尊ぶ), ānarca. r̄dh (榮ゆる), ānardha. r (行く) は āra. ya 又は va は i 又は u にて字を長す. yaj (供へる), iyāja, ijima. vac (語る), uvāca, ūcima.

174. 人稱の語尾は次の如し.

	爲	他.		爲	自.
a	va	ma	e	vahe	mahe
tha	athur	a	se	āthe	dhve
a	atur	ur	e	āte	re

175. 發聲にて始まる語尾は大抵語幹との間に i を挿入す. 語幹と re との間には必らず i を挿入す, tha との間には i を挿入せざること多し. bhid (破る) の語幹は bhidi. 一兩爲他は bibhidiva. nī (導く) の二單爲他は ninetha 或は ninayitha. 語根 dru (走る), śru (聞く), stu (讀む), su (流るゝ), kṛ (作る), bhṛ (擔ふ), vṛ (選ぶ), sr (行く) は ro の次前に來る外は語幹を i にて終らしめず. śuśrotha, śuśruma. śuśruvire. cakarthā. cakṛma. cakṛire.

176. 已過去は三の語幹を有す. 強(弗栗地), 中(窶拏)及び弱是なり. 一單爲他は強或は中語幹より, 二は中語幹より, 三は強語幹(以上何れも強語形)より, 此餘は弱語幹(弱語形)より, 造らる. 語勢は強語形の場合は語根にあり, 弱語形の場合は語尾にあり (132 條).

177. 初と終とに發聲を有する語根にして中間の韻が本來長きか又は位置に由て長き*ときは如何なる語形にても其語根の形を變せず. mil (瞬く) は mimila, mimilima. bandh (縛る) は babandha, babandhima. nind (嗤る) は nininda, ninindima. 又 prach (問ふ) は papraccha, papracchima (prach は語根の韻は短かけれど語幹のときは其韻恒に位置に由て長し).

178. 中間に i, u, r を有せる語根の強語形は窶拏なり. bhid (破る) は bibheda, bibhidima. puṣ (養ふ) は pupoṣa, pupuṣima. dṛś (見る) は dadarśa, dadṛśima.

179. tud (撃つ) の轉聲法.

tutoda	tutudiva	tutudima	tutude	tutudivahe	tutudimahe
tutoditha	tutudathuḥ	tutuda	tutudiṣe	tutudāthe	tutudidhve
tutoda	tutudatuḥ	tutuduḥ	tutude	tutudāte	tutudire

180. 語根の中間に a を有し次の發聲は單一なるときは一單の爲他は弗栗地に造ることを得. 三單の爲他は弗栗地に造を要す. 二單の爲他は 181 條に擧たるものの外は變化せず. 弱語形の場合は語根の形を最も

* 127 條を看よ.

短ふす。語根の初に y 又は v あるときは i 又は u を以て字を長す。(173 條). gam(行く)の語幹は jagām, jagam, jagm. grah(攫む)の語幹は jagrah, jagrah, jagr̥h. vac(言ふ)の語幹は uvāc, uvac, ūc(u+ucより成る).

jagāma, jagama jagmiva jagmima jagme jagmivahe jagmimahe
jagantha, jagamitha jagmatluh jagma jagmiṣe jagmāthe jagmidhve
jagāma jagmatuh jagmulh jagme jagmāte jagmire

khan(掘る)の cakhāna, cakhnuh. jan(生る)の jajāna, jajūh.
han(撃つ)の jaghāna, jaghnuh(91 條). grah(攫む)の jagrahitha,
jagraha, jagr̥huh. yaj(供ふ)の iyaja, ijuh. vac(言ふ)の uvāca,
ūcuh も皆前表に准ず。vad(言ふ), vap(播く), vaś(要す), vas
(住む), vah(運ぶ), も亦上に准ず。ghas(食ふ)は jaghāsa, jak-
suh. vyadh(貫く)は vivyādha, vividhuh. svap(眠る)は susvāpa,
susupuh.

181. 初と終とは単一の發聲にして中間に a を有し而して初の發聲は字を長するに代字を要せ(144 條 1. 2.)ざる語根は弱語形るときは a を e に變じ字を長せず。pat(落る)は petima. nad(喚く) neduh. yam(拘束す) yemire. 二單爲他. の語尾が i にて終る語幹に附加へらるゝとき亦然り。pac(撲る) pecitha. されど語幹が i にて終らざるときは然らず即ち papaktha.

papāca, papaca peciva pecima pece pecivahe pecimahe
papaktha, pecitha pecatluh peca peciṣe pecāthe pecidhve
papāca pecatuh pecuh pece pecāte pecire

182. bhaj(分つ)は恒に 181 條の如く bhejima, bheje. tras.(怖る), bhram(彷徨す), raj(輝く)等は又 181 條の如く作ることを得。jan(生まるゝ. 180 條)は決して 181 條の如くせず。

183. ā 又は重韻*にて終る語根は一. 及び三の單爲他. には au と云語尾を用ゐる。弱語形にありては此等の語根の韻は韻にて始まる語尾の前には消滅し發聲にて始まる語尾の前には其韻を弱めて i なる。二單の爲他は ā 或は i 韻を有す。dā(施こす)は dadau, dadātha 或は dadiitha, dadau. dadima, dada, daduh. gai(諷ふ)は jagau, jagātha 或は jagitha, jagau. jagima, jaga, jaguh.

184. i, ī, u, ū, r, r̄ にて終る語根は一. 單. の爲他. には窠拏或は弗栗地に作ることを得。二には窠拏, 三. には弗栗地, に作るを要す。ni(導く)の一. は ninaya 或は nināya. 二. は ninetha 或は ninayitha 三. は nināya. 弱語形にありては r にて終り多の發聲にて始まる語根, 又大概の r̄ にて終る語根, は窠拏となり其餘は單韻となる。ninyima(15 條に異なり). kri(買ふ)は cikriyima(42 條). dhū(擻ふ)は dudhuvima, dudhuvuh(42 條). dhṛ(持つ)は dadhrima(17 條). smṛ(記憶す)は sasmarima.

185. ji(勝つ)は jigāya, jigetha. jigyima. jigye. hi(棄つ)は jighāya. ci(積む)は cicāya 或は cikāya となる。

186. bhū(有る)は babhūva. babhūvima, babūvuh となる。

187. vid(知る)は字を長することなし。veda, vettha, veda, vidma, vida, viduh.

* e, ai, o, au.

188. ah(言ふ)は唯だ二の單と兩と三の單兩複との爲他にのみ用ゐらる。āttha, āha. āhatuḥ, āhatuḥ. āhuḥ.

189. 複説已過去. 語根又は語幹に語尾 am を加へ此に直に、或は餘の語を挿める後に、kr(作す), bhū(爲る), as(有る), の已過去を加ふ。krは動詞が若し爲自に變化すれば亦爲自に變化す。

190. 複説已過去は第十類の動詞の語根、及び第十類と同様に造らるゝ使役法及び名稱的動詞、又 a, ā の餘の韻にて始まり其韻が本來或は位置に由て長き語根、又 ās(坐はる), と俱に用ゐらる。又 vid(知る), hu(供ふ)の如き五六の動詞と俱に用ゐることを得。cur(盗む)は corayāmāsa. tuṣ 役(満足せしむ)は toṣayāmāsa. kathaya(話す)は kathayāṃ babhūva. iṣ 爲自(視る)は iṣāṃ cakre. ās 爲自(坐はる)は āsāṃ cakre. hu(供へる)は juhavāṃ cakāra.

未 來.

191. 未來の特徴は語勢を有せる sya なり。此音は窶拏化せる語根又は i にて終る窶拏化せる語幹に附加へらる。語尾は第一種變化の現在の語尾を用ゐる。dā(施す)は dāsyāmi, dāsyē. gai(諷ふ)は gāsyāmi (169 條). nī(導く)は neṣyāmi, neṣyē. bhū(爲る)は bhaviṣyāmi. bhid(破る)は bheṭsyāmi. budh(覺る)は bhotsyē (25 條). vac(言ふ)は vaksyāmi (53 條). grah(攫む)は grahīsyāmi (158, 168 條). drś(見る)は drakṣyāmi (13, 166 條). cur(盗む)は corayīsyāmi (127 條の備考)

192. 複説未來. tr(74 條)にて終る作者名詞の體單男に語根 as(有る. 133 條)の現在を附加ふ。此附加へられ

たる語は第三人稱のときは通例は省き去られ其餘のときも省き去らるゝこと少なからず。此後接字は窶拏化したる語根或は i にて終る窶拏化したる語幹に附加へらる。kr(作す)は kartṛ. bhū(爲る)は bhavitṛ. grah(攫む)は gra-hitṛ (191 條参照). drś(見る)は draṣṭṛ (191 條参照). 今 kr(作す)に就て明せば

kartāsmi	kartāsvaḥ	kartāsmah
kartāsi	kartāsthaḥ	kartāstha
kartā	kartāran	kartāraḥ

施 設 過 去.

193. 施設過去は單未來より造らる猶ほ正過去の現在より造らるゝが如し。dāsyāmi, dāsyē (191 條)より adāsyam, adāsyē となる。aneṣyam, aneṣyē. abhaviṣyam, abhaviṣyē. 語尾は正過去のを用ゐる。

受 動 言.

194. 受動言の語幹は弱語根に語勢のある後接字 ya を加へて造る。現在及び正過去のときは此語幹に爲自の語尾を附す。tud(撃つ)は tudyate. dviṣ(憎む)は dviṣyate. grah(攫む)は grāhyate. vac(言ふ)は ucyate. bandh(結ぶ)は badhyate. されど han(殺す)は hanyate にして hayate に非ず (50 條参照)。

195. 第十類の動詞及び使役法の語根は受動言を造るには aya の字 (127 條) を去る。cur(盗む)は coriyate. kr(爲す)の役。kāraya-(爲さしむ)は kāriyate.

196. āにて終る語根は或はāを存するあり或は其を弱めてīに變ずるあり. jñā(識る)はjñāyate. pā(護る)はpyāite. dā(施す)はdiyate. pā(飲む)はpiyate. gai(飄ふ)はgiyate. i或はuにて終る語根は其韻を延長す. ji(勝つ)はjīyate. śru(聞く)はśrūyate. rにて終る語根は此をriに變じ、多の發聲の次後には窠撃に變ず. kr(作す)はkriyate. smr(記憶す)はsmaryate. r̄にて終る語根は此をīrに變じ、唇音の次後にはūrに變ず. śr(破る)śiryate. p̄r(満たす)pūryate.

197. 受動言の不定過去、正過去、未來、及び施設過去は此等に相當する爲自に同じ、其異なる所は下の如し.

198. 三單不過受はīにて終る. 韻にて終る語根及び單發聲の中間にaを有する語根は弗栗地となる、中間にi, u, rを有する語根は窠撃となる. āにて終る語根はyを挿入す. nī(導く)はanāyi. lū(斷つ)はalāvi. kr(作す)はakāri. pac(煮る)はapāci. han(殺す)はaghāni(91條). dīś(示す)はadēśi. budh(覺る)はabodhi. dṛś(見る)はadarśi. dā(施す)はadāyi.

199. jan(生まる)はajani. dam(調ふ)はadami. vadh(殺す)はavadhi. labh(得)はalābhi或はalambhi、前接字を加へたるときは必らずalambhi、に造る.

200. 一切の韻にて終る語根並にgrah(攫む)、dṛś(見る)及びhan(殺す)は(三單を除て)爲自の伊瑟不定過去(168條)を造りて此を受動の意に用ゐることを得. 韻にて終る語根并にgrah及びhanは弗栗地を有し、dṛśは

窠撃を有す. āにて終る語根はyを挿入す. anāyiṣi. alāviṣi. akāriṣi. agrāhiṣi. aghāniṣi(91條). adarśiṣi.

201. 複説已過去(189, 190條)の受動言kr(as)及びbhūは恒に爲自の形を有す.

202. 未來及び施設過去のときは200條に擧たる語根は伊瑟不過と同様に特別なる受動言の形を造ることを得. nāyiṣye, anāyiṣye. grāhiṣye. darśiṣye.

使 役 法

203. 使役法は第十類の動詞(127條)の如くに語幹を造る. 轉聲法は第一種の活用法を用ゐる. 使役法は大抵或人をして語根の詮はす所のものを爲さしむるの意義を有す. 又其意義は語根の意義と異ならざること少なからず(斯かる際には此動詞は213條に明すべき名稱的動詞と見るべし). nī(導く)の語幹はnāyaya(導びかしむ). bhū(成る)の語幹はbhāvaya(現はす). kr(爲す)の語幹はkāraya(爲さしむ). pat(落る)の語幹はpātaya(落す). chid(斷つ)の語幹はchedaya(斷たしむ). budh(覺る)の語幹はbodhaya(覺らしむ).

204. 語根の中間にあるaは數しば短かきまゝのことあり. gam(行く)のgamaya(招く), jan(生る)のjanaya(生む), tvar(急ぐ)のtvaraya(急がす), prath(擴がる)のprathaya(擴げる), に於るが如し.

205. āにて終る語根は大抵payaを有し其使役法たることと表す. dā(施す)はdāpaya(施さしむ). sthā(住ま

る)は sthāpaya (置く). されど pā (飲む)は pāyaya (飲ます). jñā (知る)は jñāpaya 或は jñāpaya (知らす). snā (浴す)は snāpaya 或は snāpaya (浴せしむ).

206. r (擧る)は arpayā (投る), kṣi (盡す)は kṣayaya 或は kṣapaya, ji (勝つ)は jāpaya (勝たしむ), pī (満たす)は pūrāya, ruh (生長す)は rohaya 或は ropaya (立てる), labh (受る)は lambhaya, i (行く)は前接字 adhi と俱に adhyāpaya (誨ゆる), に造る.

求 欲 法

208. 求欲法は字を長じたる語根に或は字を長じて i にて終る語幹に sa を附加へて其語幹を造る. 長字は語勢を有し其韻は i なり, 若し語幹が u を有すれば長字の韻又 u を用ゐる. 轉聲法は第一種の活用法に同じ. pac (煮る)の語幹 pipakṣa (煮んと欲す). kṣip (投る)の語幹 cikṣipsa (投んと欲す). tud (撃つ)の語幹は tututsa (撃んと欲す). vid (知る)の語幹 vivitsa 及び vividīṣa (知んと欲す). duh (牛乳を搾る)の語幹 dudhukṣa (牛乳を搾らんと欲す).

209. 聲の末にある i と u は延長せらる. r と r̄ は īr となり, 唇音の次後には ūr となる. ji (勝つ)の語幹 jīgīṣa. śru (聞く)の語幹 śrūṣa. kr (作す)の語幹 cikīṣa. mṛ (死ぬ)の語幹 mumūṣa.

210. āp (得る)の語幹 īpsa. gam (行く)の語幹 jigāmsa 或は jigamiṣa. grah (攫む)の語幹 jighrīkṣa. dā (施す)の語幹

dītsa. dhā (置く)の語幹 dhītsa. pat (落る)の語幹 pitsa 或は pipatiṣa. bhaj (受る)の語幹 bhikṣa (乞ふ). labh (得る)の語幹 lipsa. śak (能くす)の語幹 śikṣa (學ぶ). han (殺す)の語幹 jighāmsa.

211. 求欲法の不定過去は伊瑟不定過去(168條)を, 已過去は複設已過去(189, 190條)を, 用ゐる. 未來は i にて終る語幹より造らる, 其受動言は194條に准ず.

増 上 法

212. 増上法は種々の方法に由て強めたる長字を語首に加へ以て語幹を造る. 轉聲法は第三類動詞の(143條)を用ゐる. nij (洗除す)は nenekti, 三.複. nenijati. kram (歩む)は camkramīti. dhū (擲ふ)は dodhāvīti. ṛt (躍る)は narīnartti. 典文の梵語にては増上法の語幹は強められたる長字を語首に加へ語勢を有せる ya を語末に加へて造り爲自に於て變化せらる. kram (歩む)は camkramyate. dip (輝く)は dedīpyate. jval (燃ゆ)は jājvalyate. ru (叫ぶ)は rorūpyate. ṛt (躍る)は narīnṛtyate. car (行く)は campeṛyate. nam (屈む) namnamyate.

備考. jāgarti (彼は覺む)も古き増上語なり. 此語は gr̄てふ語根より成れるもの, 或は jāgr̄と云一種特別なる形を有せるもの, と看做され第二類の活用法(143條に注意せよ)に従て轉聲せらる. jāgarmi, jāgarsī, jāgarti. jāgrmah, jāgrtha, jāgrati. 願. は jāgryām. 命. は jāgarāni. 正過. は ajāgaram, ajāgah. ajāgrma, ajāgaruh. 已過. は jajāgara 及び jāgarām cakāra. 現分. は jāgrat.

名稱的動詞

213. 名詞或は形容詞なる名稱詞の語幹は此に人稱の語尾を加へて動詞の語幹として論せらるゝことを得. *aṅkura* (芽)は *aṅkurati* (其は芽を發す). *darpaṇa* (鏡)は *darpaṇati* (彼は鏡なり). *paṅkeruḥa* (蓮)は *paṅkeruḥati* (彼は蓮の如し). *ripu* (敵)は *ripavati* (彼は敵となる). されど大概是名詞, 形容詞の語幹に *ya* 或は *aya* 或は稀には *sya* と云ふ後接字を加へ或は爲他. 或は爲自. に於て第一種活用法に准じて轉聲せらる. 其意義は「其名詞, 形容詞の詮する所のもの, を作す, が有る, と爲る, を欲する」或は「其名詞, 形容詞の, 舉動を爲す, 如く看ゆ」の類なり. *cira* (長き)は *ciraya*, *cirāya* (踟躕す, 猶豫す). *miśra* (混りたる)は *miśraya* (混せる). *padma* (蓮華)は *padmāya* (蓮華に比ぶ). *tapas* (苦行)は *tapasya* (苦行を修す). *putra* (子)は *putriya* (子を欲す). *go* (牝牛)は *gavya* (牝牛を貪求す). *rājan* (王)は *rājāya* (王の如き舉動を爲す). *lokatraya* (三世)は *lokatrayāya* (三世となる).

動詞的名稱

分詞

214. 後接字 *ant*, 其弱形の *at*, は現在(127條以下), 及び未來(191條), の語幹に附加へられたるときは此等の時の分詞の爲他. を造る. 第二種活用法の動詞(130條)にありては現在のときに弱語幹を用ゐる. 字を長じたる語幹(129條の19を除く)は唯だ弱語幹 *at* (83, 84條)を有す. *rohant*, *tudant*, *nahyant*, *corayant*, *dviṣant*, *sant* (as「有る」よ

り來る) *ghmant* (han「殺す」より來る. 91條). *śūsat* (141條). *juhvat*, *śṛṇvant*, *bhīdant*, *kurvant*, *aśnant*, *neṣyant*, *bhaviṣyant*.

215. 後接字 *māna* は第一種活用法に屬する動詞の語幹より現分. 爲自. を造り. 又一切の動詞の未分. 爲自. 又一切の動詞の, 現分. 受., 及び未分. 受., を造る. *rohamāna*, *tudamāna*, *nahyamāna*, *corayamāna*, *neṣyamāna*, *bhaviṣyamāna*, *tudyamāna*, *ucyamāna* (vacより來る). *badhyamāna* (bandhより來る. 194條). *kriyamāna* (kṛより來る. 196條). *nāyīyamāna* (202條).

216. 後接字 *āna* は第二字に語勢を有し(第三類動詞のときの外. 145條)第二種活用法に屬する動詞の弱語幹より現分. 爲自. を造り又一初の動詞の已過去分詞の爲自. と受. とを造る. *dviṣāna*, *juhvāna*, *śṛivāna*, *bhīdāna*, *kurvāna*, *aśnāna*, *ninyāna*, *cakrāna* (kṛより來る). *pecāna* (181條). 語根 *ās* (坐はる)は爲自. にして其現分. は *āsina* なり.

217. 語勢を有する後接字 *vāms* 其中語幹 *vat* 其弱語幹 *us* は已過の弱語幹(176條. 175, 183條に注意すべし)より已過能分. を造る. *rud* は *rurudvāms*. *jan* は *jajūvāms*. *yaj* は *ijivāms*. *vac* は *ūcivāms*. *pat* は *petivāms*. *sthā* は *tasthivāms*. *vid* (知る)は *vidvāms*. 其格例法は98條を見よ.

218. *gam* は *jaganvāms* 或は *jagmivāms* にして, 具. は *jagmuṣā*. *han* は *jaghanvāms* 或は *jaghnivāms*. *drś* は *dadrśvāms* 或は *dadrśivāms*. *vid* (得)は *vividvāms* 或は *vividivāms*. *viś* (入る)は *viviśvāms* 或は *viviśivāms*.

219. 語勢を有せる後接字 ta と na は過受分. を造る. (一) ta は弱語根或は i にて終る弱語幹に附加へらる. 第十類の動詞並に使役法にありては i にて終る語幹の寔拏化したるものに附加へらる(現在の語幹に非ず. 127 條の備考). ji(勝つ)は jita. ni(導く)は nita. hu(供へる)は huta. kr(作す)は kṛta. labh(得)は labdha(48 條). pat(落つ)は patita. cur(盗む)は corita. budh(覺る)の役. bodhita. na b. grah(攫む)は grāhita となる. 過受分. を造るに次の如き數例あり.

- | | |
|-----------------------|-------------------|
| 1) yaj(供ふ) iṣṭa(47 條) | tan(擴ぐ) tata |
| vac(話す) ukta(180 條) | nam(屈む) nata |
| vad(説く) udita | man(惟ふ) mata |
| vap(播く) uṣṭa | yam(拘る) yata |
| vas(住ふ) uṣita | ram(悦ぶ) rata |
| svap(眠る) sūpta | han(殺す) hata |
| hve(hvā)(呼ぶ) hūta | 5) gai(諷ふ) gīta |
| 2) pach(問ふ) pṛṣṭa | dhā(置く) hita |
| bhraj(鏽る) bhṛṣṭa | pā(飲む) pīta |
| vyadh(貫く) viddha | mā(量る) mīta |
| sās(命ず) śiṣṭa | śo(砥ぐ) śīta |
| 3) damś(咬む) daśṭa | so(決心す) sīta |
| bandh(縛る) baddha | sthā(住まる) sthita |
| sañj(著す) saktā | 6) dah(燃ゆ) dagdha |
| sraṃs(壊る) sraṣṭa | snih(愛す) snigdha |
| 4) kṣaṇ(傷ふ) kṣata | ruh(生長す) rūḍha |
| gam(行く) gata | lih(舐る) līḍha |

- | | |
|----------------|--------------------|
| vah(運ぶ) vāḍha | bhram(彷徨す) bhṛānta |
| sah(堪ゆ) soḍha | śam(寂まる) śānta |
| nah(結ぶ) naddha | śram(疲る) śrānta |
- 此外又違例なるものあり. 9) dā(施こす) datta
 7) kha(堀る) khāta 前接字 ā(238 條)と俱に用
 jan(生る) jāta られたるときは °ita=ātta
 8) kām(愛す) kānta となる.
 dam(制御す) dānta

muh は raugdha と mūḍha との二種あり 54 條の備考 1 を参照すべし.

(二) na は恒に直に弱語根に附加へらる. 其使用せらるゝ場合は次下の如し.

1) 若干の語根の韻にて特に ī にて終るとき. 語末の ā は ī となり. ī は i, 唇音の次後には ū, となる. kṣi(壊る)は kṣīna. li(沈む)は līna. lū(絶つ)は lūna. hā(去る)は hīna. kṛ(散らす)は kṛīna. jī(老ふ)は jīna. tī(越ゆ)は tīna. pī(充たす)は pīna. śī(毀る)は śīna. stī(敷く)は stīna.

2) 若干の語根の g 又はにて j にて終るとき. lag(着く)は lagna. bhañj(破る)は bhagna. bhuj(曲る)は bhugna. majj(沈む)は magna. vij(感激す)は vagna.

3) 大抵の語根の d にて終るとき. chid(断つ)は chinna. nud(推す)は nunna. pad(落つ)は panna. bhid(破る)は bhinna. vid(得)は vinna. sad(座る)は sanna.

220. vant 其弱語幹 vat と云ふ後接字を ta 若しくは na にて終る過受分. に加ふるときは其意義は變じて已過能分. となる kṛtavant(作して). dṛṣtvant(見て). chinnavant(断ちて). の如し. 其格例法は 86 條に見ゆ.

221. 後接字 *tavya*, *aniya* 及び *ya* は須要分詞を造る *tavya* (*tavyā* 或は *tāvya*)* は窶拏化したる語根又は窶拏化したる *i* にて終る語幹に附加へらる. *ji* (勝つ) は *je-taya*. *bhuj* (受用す) は *bhoktavya*. *kr* (作す) は *kartavya*. *bhū* (成る) は *bhavitavya*. *cur* (盗む) は *corayitavya*. *grah* (攫む) は *grahitavya* となる. 後接字 *aniya* (*aniya*) は大抵窶拏化したる語根に附加へらる. *ei* (積む) *cayaniya*. *śru* (聞く) は *śravaniya*. *kr* (作す) は *karaniya*. *cint* (考へる) は *cintaniya*. 後接字 *ya* は或は窶拏化したる, 或は栗弗地化したる, 語勢を有する語根に附加へらる. *ā* にて終る語根は其 *ā* を *e* に變ず. *dā* (施こす) は *deya*. *pā* (飲む) は *peya*. *ji* (勝つ) は *jeya*. *bhū* (成る) は *bhavya* 或は *bhāvya*. *kr* (作す) は *kārya*. *muc* (解く) は *mocya*. *vac* (話す) は *vācya*. されど *labh* (得) は *lābhya* なり.

不定法及び絶對法.

222. 不定法の後接字は *tum* にして窶拏化したる語根又は *i* にて終る窶拏化したる語幹に附加へらる. 語勢は語根にあり. *dā* (施こす) は *dātum*. *ji* (勝つ) は *jetum*. *bhū* (成る) は *bhavitum*. *kr* (作す) は *kartum*. *yuj* (軛す) は *yoktum*. *drś* (見る) は *draṣṭum*. *gam* (行く) は *gantum* (50 條). *cur* (盗む) は *corayitum*. *grah* (攫む) は *grahitum*. *tī* (越す) は *taritum* 或は *taritum*.

223. 語勢を有する後接字 *tvā* は單純†の弱語根, 或

* 字の上にある記號 ^ は揚られたる聲の抑へらるゝを示し (circumflex accent). 便宜の爲平聲號 (grave accent) を用ゐる. ˘ は揚られたる聲を示す (acute accent).

† 單純とは前接字副詞等何たる字をも合合せざるを謂ふ.

は *i* のみを加へたる弱語幹より絶對法を造る. 後接字 *ta* (219 條) の前に在るときと同じ形を爲す. *yuj* は *istvā*. *vac* は *uktvā*. *vas* は *uṣitvā*. *svap* は *suptvā*. *prach* は *prṣtvā*. *bandh* は *baddhvā*. *gam* は *gatvā*. *man* は *matvā*. *dhā* は *hitvā*. *pā* (飲む) は *pitvā*. *sthā* は *sthitvā*. *dah* は *dagdhvā*. *lih* は *liḍhvā*. *khan* は *khātvā* 或は *khanitvā*. *bhram* は *bhrāntvā*. *dā* は *datvā*. *bhū* は *hbūtvā*. *grah* は *grhītvā*. 第十類動詞, 使役法, *aya* にて終る名稱的動詞, は語尾を *i* にて終る語幹に加ふ. *cur* は *corayitvā*. *vac* の役は *vācayitvā* となる.

224. 後接字 *ya* は前接字, 副詞, 或は名詞, を合加したる弱語根より絶對法を造る. *ā* にて終る語根は其形を變化せず. *ī* にて終る語根は此 *ī* を *ir*, 唇音の次後には *ūr*, に變ず. 短韻にて終る語根には *ta* を加ふ. 語勢は語根にあり. *vac* に *pra* (告白す) は *procya*. *bhū* に *sam* (連なる) は *sambhūya*. *tī* に *ava* (入る) は *avatīrya*. *pī* に *ā* (満足す) は *āpūrya*. *dā* に *ā* (取る) は *ādāya*. *kr* に *alam* (飾る) は *alamkrīya*. *i* に *pra* (死ぬ) は *pretya*. *kr* に *vaśe* (従へる) は *vaśekrīya*. *kr*. に *phūt* (嘆息す) は *phūtkrīya*.

225. 語根 *gam* (行く), *nam* (屈む), *yam* (拘束す), *ram* (悦ぶ) 又は *man* (惟ふ) の如き *n* にて終るものは *m* 又は *n* を省き去りて *tya* を加へ以て絶對法を造ることを得. *tan* (擴ぐ) と *han* (殺す) は斯く作ることを要す. *gam* に *ā* (來る) は *āgamyā* 或は *āgatya*. *man* に *ava* (悔る) は *avamanya* 或は *avamatya*. *tan* に *vi* (擴ぐ) は唯だ *vitatya* のみ. *han* に *ni* (撲殺す) も唯だ *nihatya* のみ. 語根 *khan* (掘る) 及び *jan* (生る) は *˚khanya*, *˚janya* 或は *˚khānya*, *˚jānya* となる.

226. 第十類及び此と同形に作られたる動詞の語根は其動詞の韻が本來短かきときは語幹に *y* を加ふ。gam に sam の役。語幹 saṅgamaya (聞く) は saṅgamayya. されど budh に pra の役。語幹 prabodhaya (覺ます) は prabodhya.

227. 後接字 am も亦一種の絶待法を造る。此後接字の次前なる語根の韻は三單不過受。(198條)の如くに論せらる。ei (積む) は cāyam. kṛ (作す) は kāram. vid (知る) は vedam. dā (施こす) は dāyam.

造 語 法.

228. 語を造るには後接字を用ゐる。後接字に二類あり。曰く根本曰く枝末是なり。此二類の加へかた及び意義ともに大に異あり。

229. 根本後接字は語根及び動詞の語幹より語を造る。此類の後接字を訖栗呬 (kṛt) 後接字と稱し、其中適用の範圍狭く且つ不規則なる後接字を隴拏地 (unādi) 後接字と稱す。102, 214—227 條に擧たる後接字及び a, aka (女姓) は ikā) ana, as, ā, i, is, u, us, ti, tu, tṛ, tra, tva, tha, ni, nu, man, ra, la, van は皆な隴拏地後接字に屬す。

230. 枝末後接字は名詞、形容詞、代名詞の語幹より更に他の名詞、形容詞の語幹を造る。此類の後接字を呬提多 (taddhita) 後接字と稱す。此中最も普通に用ゐらるゝものは 101 條に擧たる後接字の外 a, ika, in, in, iya, tā, tva, mant, maya, vant, vin なり。例せば div (輝く) は訖栗呬後接字 a を加へて deva (天) と云語となり、更に呬

提多後接字 a を加へて daiva (呬提多後接字 a を加ふるとき訖栗呬後接字の a を省く) (神聖なる) となる。又 man (惟ふ) に訖栗呬後接字 as を加へて manas (意) を造り、更に呬提多後接字 vin を加へて manasvin (聰き) を造る。

231. 又若干の語根は別に後接字を加へずして直に名詞として用ゐらる。diś (方). bhī (怖畏). mud (喜). tṛṣ (渴) の如し。

女 姓 語 幹 を 造 る 法.

232. 女姓語幹を造るには後接字 ā 又は ī を用ゐる。

233. ā は a にて終る語幹に加へらる。asva (牡馬) の女は asvā (牝馬). bala (男兒) の女は balā (女兒). gata (行けり) の女は gata, aka にて終る語幹は多く其女を造るに ikā を用ゐる。pācaka (煮者) の女は pācikā.

234. ī を用ゐる場合は下の如し。

1) 稀には a にて終る語幹に加ふることあり。deva (天) の女. devī (女天).

2) 通常は u にて終る形容詞に加へらる。tanu (薄き) の女. [tanu 或は] tanvī.

3) 常に tṛ にて終る作者名詞に加へらる。datṛ (施者) の女. dātṛī.

4) 常に發聲にて終る語幹に加へらる。若し名詞、形容詞か多くの語幹を有すれば ī は中語幹或は弱語幹に加へらる。balin (強き) の女. balinī. prāñc (東の. 82 條) の女. prāñcī. pratyañc (西の. 82 條) の女. pratīcī. mahant (大なる. 85 條)

の女. mahatī. śvan (狗. 89 條)の女. śunī. rurudvāms (泣きて. 98 條)の女. ruruduṣī.

5) 常に弗栗地化したる形容詞に加へらる. bhārata (bharata の弗栗地)(ブ、ラタに屬する男)の女. bhārati. bhaima (ブ、イマ族の男)の女. bhaimī. naimittika (因より生せる)の女. naimittikī.

235. antにて終る分詞(214 條)は第一種活用法の動詞のとき強詞形 anti を, 第二種活用法の動詞のときは弱詞形 ati を, 有す. 第六類動詞, āにて終る第二類動詞, の現分. と未分. とには anti 或は ati を用ゐることを得. rehantī. corayantī. dviṣatī. satī. juhvatī. kurvati. tudantī 或は tudatī. yantī 或は yātī. bhaviṣyantī 或は bhaviṣyātī.

236. iにて終る名詞, 形容詞は女. のとき大抵變化せず. 但し sakhi(男友. 67 條)の女. の形 sakhī なり.

237. vanにて終る若干の名詞, 形容詞は其女. を varī に作る. pīvan(肥たる)の女. pīvarī. 若干の神の名及び其の餘の特殊の名詞は女. を造るに ānī を用ゐる. bhava (シブ神)の女. bhavānī. indra(因陀羅)の女. は indrānī. mātula (伯父)の女. mātulanī(伯母). yuvan(壯き. 89 條)の女. は yuvati. pat(主. 68 條)の女. は patnī.

合成言語法.

甲. 動詞合成法.

238. 動詞は前接字又は副詞と俱に合成することを得. 是に由て其動詞の意義は種々に變化す.

前接字は

ati 過て. 經て.	ava 下に. 離れて.	parā 彼方に.
adhi 上方に. 上に.	ā まで. 方へ.	pari 回りて.
anu 隨ふて. 方に.	ud 上に. 上方に.	pra 前に. 前方に.
antar 中間に.	upa 方に.	prati 對して. 後方に.
apa 彼處に. 先に.	ni 下に. 中に.	vi 彼方に. 分れて.
abhi 對して. まで.	nis 外に. 出でて.	sam 俱に. 等しく.

副詞は例せば alam(充分に)と kṛ(作す)とにて alamkṛ(飾る). astam(下に)と gam(行く)にて astāgam(沈む). āvis(明に)と bhū(爲る)にて āvirbhū(顯はる).

239. 語根 as(有る), kṛ(爲す), 及び bhū(爲る)の次前には名詞, 形容詞を加ふることを得. 斯く合成したる詞の意義は「或ものがある」「或ことを爲す」「或ものになる」と云ふことなり. aにて終る語幹は其 a を i に變じ, i 又は u にて終る語幹は其韻を延長し, r にて終る語幹は其 r を ri に變ず. śukla(白き) śuklikṛ(白くす). śuci(清き) śucībhū(清くなる). mṛdu(軟らかき)と syāt(as の三. 單. 願.) mṛdūsyāt(彼は軟かくあらしめよ). mātṛ(母) mātṛikṛ(母と爲す). bhasman(灰) bhasmīkṛ(灰と化す)も上の例に同じ.

乙. 名稱語合成法*.

240. 合成語の前部分†は語幹の形なり. 若し名稱語が多の語幹を有するときは中, 或は弱, 語幹(56 條)を用ゐる. rājan(王)の如き u にて終る語幹の時は其語末を a とす即ち rāja. 又 111 條の備考を参照せよ.

* 名稱語と諸の語を合成して一語となることを指す.

† 合成語の最後の語を除く餘の前に在る語を總稱す.

241. 持業 (karmadhāraya 247 條) 及び多財 (bahuvrīhi 250 條) の始には mahat (大なる. 85 條) の代に mahā を用ゐる. 合成語の尾にては異なる格例法に依る語が數しば轉じて a の格例を用ゐる. akṣi (眼. 69 條) は akṣa. rātri (夜) は rātra. sakhi (友. 67 條) は sakha. ahan (日. 90 條) は aha 及び ahna. rājan (王) は rāja. path (路. 93 條) は patha. manas (意. 96 條) は manasa. varcas (輝) は varcasa. 時としては反對に轉することあり. gandha (香) の代に gandhi. go (牝牛. 78 條) は合成語の始にありて且つ韻の次前にあるときは gava となり、語末にあるときは gava 或は gu となる.

(一) 連關合成語即ち相違釋 (dvandva).

242. 相違とは語中の各分互に等しき位にある合成語を云ふ. 此の合成語は 1) 語中の各分の數の二と多とに順つて兩數或は複數となす或は 2) 中性單數の形となす. 1) hariharau (ハリとハラ). sakhadulḥke (樂と苦). devamanuṣyāḥ (諸の天と人). naraśvarathadantīnaḥ (諸の、人と馬と車と象と). somāgnyarkāmbuvāyūnām (蘇摩と火と日と水と及び風との). 2) śītoṣṇam (寒と熱). ahinakulam (蛇とナクラ[鼯屬の獸]). daṁśamaśakam (蝨と蚊). yūkamakṣikamat-kunam (蝨と、蠅と、床蟲).

243. ṭr にて終る語 (74, 75 條) は次下の語が ṭr 或は putra (子) にて終るときは合成語の前分として體單を用ゐる. 而して各分は皆な親縁又は同僚の人を詮はす. mātāpitarau (母と父=兩親). pitāputrau (父と子). hotāpotārau (供養者と洗淨者). 神の名は合成語が二分よりなると

き其初分にありて兩數の形を爲すこと屢しばあり. agniṣomau. (阿耆尼と蘇摩). mitrāvaruṇau (密多羅と縛留拏). (mitrā は古の mitra の兩數なり).

(二) 限量合成語即ち依主釋 (tatpuruṣa).

244. 依主とは後分が前分に由て制限せらるゝ合成語を云ふ. 尙狹き意義の依主は前分が後分に對して格の關係を有するを云ふ (固有の依主). 例せば. grāma-gata (村へ往けり) の前分は業格. devadatta (天より授けられたる) の前分は具格. svargapatita (天より墮たり) の前分は從格. rājaputra (王の子) の前分は屬格なり.

245. 依主の前分には格の形を有せることあり. vācaṅyama (聲を制して=黙して). divaspati (天の主). pad-meśaya (蓮の上に憇ふ).

246. 何れの語根も合成語の最後分として用ゐらるゝことを得而して現分. 爲他. の意義となる. vedavid (吠陀に通せる). annabhuj (食す). 短韻の語根には t を加ふ. ji (勝つ) の viśvajit (一切に勝てる), kr (爲す) の lokakṛt (造世界者) に於けるが如し. 若し男或は中を形容する合成語の終の語根が ā にて終るときは其 ā を短縮す. sthā (住まる) の abhyāśastha (傍に住れる) となるが如し.

247. 依主の前分が形容詞. 副詞或は其類にして後分を制限するときは此を持業釋 (karmadhāraya) と稱す. grāmyagaja (馴れたる象). paramānanda (最勝の喜). atidīrgha (極めて長き). sudāruṇa (甚はだ劇しき). akṛta (爲されざる). antardeśa (中方). aparūpa (不正形).

248. 合成語の前分は數しば名詞なることあり、特に比較を詮はすときに然りとす。kusumasukumāra (花輦なる=花の如く輦なる). vajrakarkaśa (金剛堅なる=金剛の如く堅き). kailāsagaura (カイラーサ*白なる=カイラーサ山の如く白き). 斯の如くして後分も亦名詞なるときは前分は能比にして後分は所比なり。puruṣasiṃha (人師子=人の師子=師子の如き人). rājarābha (牡牛の如き王). upaśu (畜の如き人). kanyāratna (處女寶=寶の如き處女). anaṅgabhujaṅga (アナンガ†蛇=蛇の如きアナンガ). kālahariṇa (時羚羊=羚羊の如き時†)も亦此合成語中に攝せらる。

249. 持業の前分が數詞にして其語形は中性又はīにて終る女姓の名詞となるときは此を帶數釋(dvigu)と稱す。trīratra (三夜)(241條). triloka 或は triloki (三世界). pañcagava 或は pañcagavi (五牛)(241條)。

(三) 所屬合成語即ち多財釋(bahuvrīhi).

250. 多財とは最後分が名詞にして全體を一の形容詞として用ゐられたる限量合成語を云ふ。此合成語は「持する」或は「有する」の意を詮はす。dirghabāhu (長き臂の). prasannamukha (悦ばしき顔容せる). maunavrata (沈黙の戒を受たる). mandamati (劣慧なる). viphalā (果なき). ananta (終りなき). durmanas (憂ふる). sapakṣa (翼ある)。

251. 多財は形容詞と同じ作用あるがゆへに俱に

* 拘鞞羅及び大自在天の住する山の名。

† 戀愛の神。 ‡ 羚羊の疾驅するに時の疾く經過するを喩ふ。

用ゐられたる名詞の姓に隨ふて其姓を定む。故にāにて終る女姓の多財合成語が男姓又は中姓の名詞に關係するときは其韻を縮めてaとす。alpavidya (少しく知れる)はvidyā (知)より, dvijihva (二舌ある)はjihvā (舌)より, bahumāya (多の幻術を有せる)はmāyā (幻術)より, sa-bhārya (妻と俱なる)はbhāryā (妻)より, 來る。合成語の末尾に後接字kaを加ふることあり。bahubhartṛka (多の夫を有せる). viśaloraska (博き胸を有せる). nirarthaka (益なき). sāgnika (阿耆尼と俱なる)。

252. 「手」と云意義の語は合成語の尾にありて「手に持てる」と云義となる。pātrahasta (器を手に持てる). dandapāni (杖を手に持てる)。

(四) 副詞合成語即ち不變詞(avyayibhāva).

253. 不變詞とは前分が不變詞(indeclinable)にして後分が名詞なる副詞的合成語を云ふ。此合成語は業單中の語尾を取る。anukṣaṇam (瞬間毎に). asaṃśayam (疑なく). yathākāmam (欲に隨つて). yathāvidhi (規定に准じて). pratyaham (毎日. 231條). sāvinayam (柔順に). satvaram (急に. tvarā女. 「急速」より來る)。

演 習 例.

254. 59, 60 條に就て. 助動詞 as(有る. 133條)は數しば省畧せらる. 若し所爲格と俱に用ゐられたるときは或ことを「助くる」或ことに「便する」の意となる. 所屬格を以て所爲格に代ふること數しばあり. 形容詞の比較級又は此に類似せる意義の詞の前に來るべき「より」といふ辭は大概所從格にて詮はさる. 二種の絶對格あり. 一を絶對所依格と曰ひ「.....のときに(when)」の義を詮はす. 一を絶對所格と曰ひ「.....に拘はらず.....なるのに(though, while)」の義を詮はす.

यथा वृक्षस्तथा फलम् yathā vṛkṣas tathā phalam ॥ १ ॥ क्रोधो मूलमनर्थानाम् krodho mūlam anarthānam ॥ २ ॥ संतोष एव पुरुषस्य परं निधानम् samtoṣa eva puruṣasya paraṁ nidhānam ॥ ३ ॥ चलं हि यौवनं नित्यं मानुषेषु विशिष्यतः calaṁ hi yauvanam nityaṁ mānuṣeṣu viśeṣataḥ ॥ ४ ॥ अर्धं भार्या मनुष्यस्य ardhāṁ bhāryā manuṣyasya ॥ ५ ॥ न शौर्येण विना जयः na śauryeṇa vinā jayaḥ ॥ ६ ॥ मूले हते¹⁾ हतं सर्वम् mūle hate hataṁ sarvam ॥ ७ ॥ दाराः सुताश्च सुलभा धनमेकं दुर्लभं लोके dārāḥ sutāś ca sulabhā dhanam ekam durlabham loke ॥ ८ ॥ सर्वाणि भूतानि सुखे रतानि sarvāṇi bhūtāni sukhe ratāni ॥ ९ ॥ न लोभादधिको दीपो न दानादधिको गुणः na lobhād adhiko doṣo na dānād adhiko guṇaḥ ॥ १० ॥ व्याधितस्त्रौषधं पथ्यं नीरुजस्तु किमौषधिः vyādhitasyausadhāṁ pathyaṁ nīrujas tu kim auśadhīḥ ॥ ११ ॥ अश्वः दृशो ऽपि शोभायै पुष्टो ऽपि न पुनः खरः aśvaḥ kṛśo 'pi śobhāyai puṣṭo 'pi na punaḥ kharah ॥ १२ ॥ सर्वेषु पेयेषु जलं प्रधानम् sarveṣu peyeṣu jalaṁ pradhānam ॥ १३ ॥ लुब्धेभ्यः सर्वतो²⁾ भयं दृष्टम् lubdhe- bhyah sarvato bhayaṁ dr̥ṣṭam ॥ १४ ॥

1) 絶對所依格 2) भयं २ 處 する 所從格(58條の備考)

255. 63—65. 70—73. 各條 ३ 就て

अप्येव प्रथमं हिरण्यम् ॥ १ ॥ शत्रौ सान्त्वं प्रतीकारः ॥ २ ॥ वह्निरेव वह्निर्भेषजम् ॥ ३ ॥ प्रायेण साधुवृत्तीनामस्त्रायिन्यो विपत्तयः ॥ ४ ॥ अधार्या सितुना गङ्गा ॥ ५ ॥ श्रुतिः स्मृतिश्च विप्राणां नयने द्वे प्रकीर्तिते ॥ ६ ॥ उपदेशो हि मूर्खाणां प्रकीर्पाय न शान्तये ॥ ७ ॥ शत्रोरपि गुणा ग्राह्या दीषा वाच्या गुरोरपि ॥ ८ ॥ संपत्तेश्च विपत्तेश्च देवमेव हि कारणम् ॥ ९ ॥ अकाले दुर्लभो मृत्युः स्त्रिया वा पुरुषेण वा ॥ १० ॥ धर्मेण हीनाः पशुभिः समानाः ॥ ११ ॥ असंतोषः त्रियो मूलम् ॥ १२ ॥ नित्यमाख्यं शुचि स्त्रीणाम् ॥ १३ ॥ वृद्धस्य तरुणी विषम् ॥ १४ ॥ जये धरित्र्याः पुरमेव सारम् ॥ १५ ॥ न हि नार्यां विनेर्षया ॥ १६ ॥

256. 74—77. 各條 2 條 3

भर्ता नाम परं नार्यो भूषणम् ॥ १ ॥ दुहिता कृपणं परम् ॥ २ ॥ दुर्दुरा यत्र वक्तारमत्र मौनं हि शोभनम् ॥ ३ ॥ विधिरुक्कृद्दुहलो नृणाम् ॥ ४ ॥ जामातुर्दुहिता बलम् ॥ ५ ॥ वृथा वक्तुः श्रमः सर्वो निर्विचारे नरेश्वरे ॥ ६ ॥ ज्येष्ठी भ्राता पितृसमो ॥ ७ ॥ मृते पितरि ॥ ७ ॥

अमृतं दुर्लभं नृणां देवानामुदकं तथा ।

पितृणां दुर्लभः पुत्रस्तत्र शक्रस्य दुर्लभम् ॥ ८ ॥

1) 絶對所依格 2) 合成語 245 條

257. 79--81. 83--88. 92. 各條 2 條 3

सर्वः पदस्थस्य सुहृद्वन्पुरापदि दुर्लभः ॥ १ ॥ न शूराय प्रदातव्या कन्या खलु विपश्चिता ॥ २ ॥ यथा चित्तं तथा वाचो यथा वाचस्तथा क्रियाः ॥ ३ ॥ सर्वत्र संपदस्तस्य सतुष्टं यस्य मानसम् ॥ ४ ॥ सर्वविदां समाजे विभूषणं मौनमपण्डितानाम् ॥ ५ ॥ आपत्सु किं विषादेन संपत्तां विस्मयेन किम् ॥ ६ ॥ यथा राजा तथा प्रजाः ॥ ७ ॥ जातस्य हि ध्रुवो मृत्युर्ध्रुवं जन्म मृतस्य च ॥ ८ ॥ दुर्याह्यः पाणिना वायुर्दुःस्पर्शः पाणिना शिखी ॥ ९ ॥ न राज्ञा सह मित्रत्वं न सपते निर्विषः क्व चित् ॥ १० ॥ तस्मा रूपं तपस्विनः ॥ ११ ॥ निघतो देहिनां मृत्युरनित्यं खलु जीवितम् ॥ १२ ॥ न राजानं विना राज्यं बलवत्सपि मन्त्रिषु ॥ १३ ॥ त्यागा गुणो वित्तवतां वित्तं त्यागवतां गुणः ॥ १४ ॥ महान्तो हि दुर्धर्षाः सागरा इव ॥ १५ ॥ निःसारस्य पदार्थस्य प्रायेणाडम्बरो महान् ॥ १६ ॥

भार्यायाः सुन्दरः स्निग्धो वैश्यायाः सुन्दरो धनी ।

श्रीदेव्याः सुन्दरः शूरो भारत्याः सुन्दरः सुधीः ॥ १७ ॥

1) 絶對所依格

258. 96—98. 各條 2 條 3

न खलु वयस्तेजसो हेतुः ॥ १ ॥ न वैद्यः प्रभुरायुषः ॥ २ ॥ मनसि परितुष्टे ॥ ३ ॥ कीर्षवान्को दरिद्रः ॥ ३ ॥ आकिंचन्यं धनं विदुषाम् ॥ ४ ॥ राजा बन्धुरवन्धूनां राजा चक्षुरचक्षुषाम् ॥ ५ ॥ अविदांश्चैव विदांश्च ब्राह्मणो देवतं महत् ॥ ६ ॥ महीयांसः प्रकृत्या मितभाषिणः ॥ ७ ॥ नीपेक्षितव्यो विद्वद्भिः शत्रुरत्यो ऽप्यवज्ञया ॥ ८ ॥ बलीयः सर्वतो ॥ ९ ॥ दिष्टं पुरुषस्य विशेषतः ॥ ९ ॥ श्रीषधं न गतायुषाम् ॥ १० ॥

गुणवान्वा परजनः स्वजनो निर्गुणो ऽपि वा ।

निर्गुणः स्वजनः श्रेयान्यः परः पर एव सः ॥ ११ ॥

किं तस्य दानैः किं तीर्थैः किं तपोभिः किमध्वरैः ।

हृदिस्थो यस्य भगवान्मङ्गलायतनं हरिः ॥ १२ ॥

1) 絶對所依格 2) 比較及從 3) 所從格 (58 條の備考)

259. 11—115. 128. 各條 2 條 3

न हि जलौकसामङ्गे जलौका लगति ॥ १ ॥ यो यद्वपति बीजं हि लभते सो ऽपि तत्फलम् ॥ २ ॥ यदेव रोचते यस्मै भवेत्तत्तस्य सुन्दरम् ॥ ३ ॥ मत्स्यो मत्स्येन जीवति ॥ ४ ॥ देवमेव परं मन्ये पौरुषं तु निरर्थकम् ॥ ५ ॥ न हि निम्बात्सवेत्तौद्रम् ॥ ६ ॥ मातरं पितरं भक्त्या तोषयेन्न प्रकीपयेत् ॥ ७ ॥ अन्तकाले हि भूतानि मुह्यन्तीति पुरायुतिः ॥ ८ ॥ हनूमानब्धिमतरदुष्करं किं महात्मनाम् ॥ ९ ॥ तदभाग्यं धनस्त्वेव यत्राश्रयति सज्जनम् ॥ १० ॥ नार्यः पिशाचिका इव हरन्ति हृदयानि मुग्धानाम् ॥ ११ ॥ स खल्वयस्कान्तमणेरनुभावो यदयो दवति ॥ १२ ॥ न गर्दभो गायति शिञ्जितो ऽपि ॥ १३ ॥

यत्र त्वं तत्र हि वयं तत्सुखं यत्र वै भवान् ।

नगरं तद्भवान्यत्र स स्वर्गो यत्र नो नृपः ॥ १४ ॥

भूयांसं लभते क्लेशं या गौर्भवति दुर्दुहा ।

अथ या सुदुहा राजन्निव तां वितुदन्त्यपि ॥ १५ ॥

द्वाविमौ न विराजते ३) विपरीतेन कर्मणा ।

गृहस्थश्च निरारम्भः कार्यवाञ्छैव भिक्षुकः ॥ १६ ॥

1) अ(238 條) + कुपु 2) 從 (203 條)

2) वि(238 條) + तुद्

3) वि(238 條) + राज्

260. 129. 各條 2 條 3

विद्यया सार्धं म्रियेत न विद्यामूषरे वपेत ॥ १ ॥ अतृणे पतितो वह्निः स्वयमेवोपशाम्यति ॥ २ ॥ हिंसाणां पुरतो वासो न सुखायोपजायते ॥ ३ ॥ न खलु व्यापारमन्त्रेण कलितापि श्रुक्तिर्मुञ्चति मोक्तिकानि ॥ ४ ॥ नैष स्थाणोरपराधो यदेनमन्धो न पश्यति ॥ ५ ॥ चलत्येकेन पादेन तिष्ठत्येकेन बुद्धिमान् ॥ ६ ॥ आ मृत्योः श्रियमन्विच्छेत्त्रिणां ३) मन्येत दुर्लभाम् ॥ ७ ॥ दिनाद्दिनं गच्छति कालं यौवनम् ॥ ८ ॥ चिरकालं पोषितो ऽपि दृश्यत्येव भुञ्जंशमः ॥ ९ ॥

हे दारिद्र्य नमस्तुभ्यं सिद्धो ऽहं त्वत्प्रसादतः ॥ १ ॥

पश्याम्यहं जगत्सर्वं न मां पश्यति कश्चन ॥ १० ॥

अनारतं प्रतिदिशं प्रतिदिशं जले स्थले ।

जायन्ते च म्रियन्ते च वृद्धदा इव वारिणि ॥ ११ ॥

1) उप(238 條) + शम्

2) उप(238 條) + जन्

3) अनु(238 條) + इष्

1) 合成語 (245 條, 111 條の備考参照)

261. 132. 133. 134. 138. 142. 各條 2 條 3

श्रेयः कपोतान्तीति स्थितिरिषा सनातनी ॥ १ ॥ त्यजत मानमलं बत विग्रहैर्न पुनरिति गतं चतुरं वयः ॥ २ ॥ नासौ धर्मो यत्र नो सत्यमस्ति ॥ ३ ॥

सङ्घिव सहासित ॥ ४ ॥ धन्यास्ते पृथिवीपालाः सुखं ये निर्गणं शरते ॥ ५ ॥
गुणी गुणं वेत्ति न वेत्ति निर्गुणः ॥ ६ ॥ अरक्षितारं राजानं घ्नन्ति दो-
पाः ॥ ७ ॥ पीडाकरमभिन्नाणां यत्थात्कर्तव्यमेव तत् ॥ ८ ॥ यं दंष्ट्रया
स्पृशति तं किल हन्ति सर्पः ॥ ९ ॥ गच्छ गच्छसि चैत्कान्तं पन्थानः सन्तु
ते शिवाः ॥ १० ॥

कमले कमला श्रुते हरः श्रुते हिमालये ।
बीराभ्यौ च हरिः श्रुते मन्ये मत्कुणशङ्कया^{१)} ॥ ११ ॥
पततु नभः स्फुटतु मही चलन्तु गिरयो मिलन्तु वारिधयः ।
अधरोत्तरमस्तु जगत्का हानिर्वीतरागस्य ॥ १२ ॥

१) 合成語(245條)

262 143-147, 150-155 の各條に就て

अण्डानि विभति स्वानि न भिन्दन्ति पिपीलिकाः ॥ १ ॥ स्त्रीवृन्द-
स्त्रिव^{१)} मन्दस्त्रं दुनोति कविता मनः ॥ २ ॥ नीचो वदति न कुरुते न
वदति सुजनः करोत्यिव ॥ ३ ॥ पुष्पाति कमलमभ्यो लक्ष्म्या तु रविर्नियो-
ज्यति^{२)} ॥ ४ ॥ ते धन्या ये न शृण्वन्ति दीनाः पण्डितानां गिरः ॥ ५ ॥
यत्स्वाधीनं यदपि सुलभं तेन तुष्टिं विधेहि^{३)} ॥ ६ ॥ कः शक्तिमानपि
मृगाङ्कमूर्ति^{४)} शिलापट्टके पिनष्टि ॥ ७ ॥ अहिरेव ह्यहिः पादान्जिजानीयात्^{५)}
संशयः ॥ ८ ॥ स्वकीयान्भुञ्जते मत्स्याः स्वापत्यानि^{६)} फणाधराः ॥ ९ ॥

आ कल्यादा निशीथाच्च कुच्यर्थं व्याप्रियामहे^{७)} ।
न च निर्वृणुमो^{८)} जातु शान्तास्तु सुखमासते ॥ १० ॥
तेजोहीने^{९)} महीपाले स्त्रे परे च विकुर्वते^{१०)} ।
निःशङ्को हि जनो धत्ते पदं भस्मन्यनूप्मणि ॥ ११ ॥
जानाते यत्र चन्द्राकी^{११)} जानते यत्र योगिनः ।
जानीते यत्र भर्गोऽपि ज्ञानाति कविः स्वयम् ॥ १२ ॥

१) 合成語(245條) २) नि(238條)+ युञ्० 役(2034條)

३) वि(2384條)+ धा ४) वि(2384條)+ जा

५) 合成語(247條) ६) वि(2384條)+ आ(1294條)+ १३)+ पृ ७) निस्
(2384條)+ वृ ८) वि(2384條)+ क् ९) 合成語
(243條)

263 243-253各條の備忘公頃

द्विगुरपि सद्ब्रह्मो ऽहं गृहे च मे सततमव्ययीभावः ।
तत्पुरुष कर्म धारय येनाहं स्या ब्रह्मब्रह्मिः ॥

文抄

I. Mahābhārata 3, 192, 5

अयोध्यायामित्वाकुकुलोद्भवः पार्थिवः परीक्षिताम मृगयामगमत ।
तमेकाश्वेन मृगमनुसरन्तं मृगो दूरमपाहरत । अध्वनिं जातश्रमः चुत्तृणा-
भिभूतश्चैकस्मिन्देहे नीलं गहनं वनखण्डमपश्यत् । तच्च विवेश । ततस्तस्य
वनखण्डस्य मध्ये ऽतीव्रमणीयं सरो दृष्ट्वा साश्व एव व्यगाहत । अथाश्वस्तः
स विसमृणालमश्यायाग्रतो निक्षिप्य पुष्करिणीतीरे संविवेश । ततः शयानो
मधुरं गीतमश्रूणोत् । स श्रुत्वाचिन्तयत् । नेह मनुष्यगतिं पश्यामि कस्य
खल्वयं गीतशब्द इति । अथापश्यत्कन्यां परमरूपदर्शनीयां पुष्पाण्यवचिन्वतीं
गायन्तीं च । अथ सा राज्ञः समीपे पर्यक्रामत् । तामब्रवीद्वाजा । कस्यासि
भद्रे का वा त्वमिति । सा प्रत्यवाच । कन्यास्त्रीति । तां राजांवाचार्यो
त्वयाहमिति । अथोवाच कन्या । समयेनाहं शक्या त्वया लब्धुं नान्यथेति ।
राजा तां समयमपृच्छत् । कन्योवाच । नोदकं मे दर्शयितव्यमिति । स
राजा तां वाढमित्युक्त्वा तामुपयेमे हतोद्वाहश्च राजा परीक्षित्क्रीडमानो
मुदा परमया युक्तस्तूर्णी संगम्य तथा सहास्ते । ततस्तत्रैवासीने राजनि
सेनान्वगच्छत् । सा सेनोपविष्टं राजानं परिवार्यातिष्ठत् । पर्याश्वस्तश्च राजा
तथैव सह शिबिकया प्रायादवघोटितया । स स्वं नगरमनुप्राप्य रहसि तथा
सहास्ते । तत्राभ्याशस्यो ऽपि कश्चिन्नापश्यत् । अथ प्रधानामात्यो ऽभ्याशचरा-
ण्यस्य स्त्रियो ऽपृच्छत्किमत्र प्रयोजनं वर्तत इति । अयाब्रुवंस्ताः स्त्रियः ।
अपूर्वमिव पश्याम उदकं नात्र नीयत इति । अधामात्यो ऽनुदकं वनं कार-
यित्वोदारवृक्षं बद्धपुष्पफलमूलं तस्य मध्ये मुक्ताजालमयीं पार्श्वे वापीं गूढां
सुधोपलिप्तां स रहस्युपगम्य राजानमब्रवीत् । वनमिदमुदारकम् । साध्वत्र
रम्यतामिति । स तस्य वचनात्तथैव सह देव्या तद्वनं प्राविशत् । स कदा
चित्तस्मिन्कानने रम्ये तथैव सह अवाहरत् । अथ चुत्तृणार्दितः श्रान्तो
ऽतिमुक्तकायारमपश्यत् । तत्रविश्व राजा सह प्रियया सुधाकृता विमलां
सलिलपूर्णां वापीमपश्यत् । दृष्ट्वैव च तां तस्यास्तीरे सहैव तथा देव्यावा-
तिष्ठत् । अथ तां देवीं स राजाब्रवीत् । साध्वतर वापीसलिलमिति । सा
तद्वचः श्रुत्वावतीर्य वापीं न्यमज्जन्न पुनरुदमज्जत् । तां स मृगवमाणो राजा
नापश्यत् । वापीमथ निःसाय्य मण्डूकं श्वभ्रमुखे दृष्ट्वा क्रुद्ध आज्ञापयामास
स राजा । सर्वत्र मण्डूकवधः क्रियतामिति । यो मयार्थी स सां नृतम-
ण्डूकोपायनमादायोपतिष्ठेदिति । अथ मण्डूकवधे घोरे क्रियमाणे दिव्य
सर्वासु मण्डूकान्भयमाविवेश । ते भीता मण्डूकराश्चे यथावृत्तं न्यवेदयन् ।
ततो मण्डूकराट् तापसवेषधारी राजानमभ्यगच्छदुपेत्य चैनमुवाच । मा

1) Mā. k. ando ya 14 जं Yudhisthira 王 2 語 3 - 段

III. Pañcatantra 1. 10 (Vgl. Hitopadeśa 3, 6).

अस्ति कांसिश्चिन्नोद्देशे चण्डरवी नाम शृगालः । स कदा चित्तनुधा-
विष्टो जिह्वालोल्यान्नगरमपि प्रविष्टः । अथ तं सारमेया विलोक्य सर्वतः
शब्दायमानाः परिधाय तीव्रदन्तैर्भक्षयितुमारब्धाः । सो ऽपि तैर्भक्ष्यमाणः
प्राणभयात्प्रत्यासन्नरजकगृहं प्रविष्टः । तत्र नीलीरसर्परपूर्णमहाभाण्डमासीत् ।
तत्र सारमेयैराक्रान्तो भाण्डमध्ये पवितः । अथ यावन्निष्क्रान्तस्तावन्नीलीवर्णः
संजातः । तत्रापरे सारमेयास्तं शृगालमजानन्तो यथाभीष्टदिशं जग्मुः ।
चण्डरवो ऽपि दूरतरं प्रदेशमासाद्य काननाभिमुखं प्रतस्थे । न च नीलवर्णेन
कदा चिन्नजरङ्गस्त्यज्यते । उक्तं च ।

वज्रलेपस्य मूर्खस्य नारीणां कर्कटस्य च ।

एको गृहस्तु मोनानां नीलीमद्यपर्यथा ॥

अथ तं हरगलगरलतमालसमप्रभमपूर्वं सत्त्वमवलीक्य सर्वे सिंहव्याघ्रदीपिव-
कप्रभृतयो ऽरुणानवासिनो भयव्याकुलितचित्ताः समन्तात्पलायनक्रियां कुर्वन्ति
कथयन्ति च । न ज्ञायते ऽस्य कीदृग्विवेष्टितं पीरुषं च । तद्दूरतरं गच्छा-
मः । उक्तं च ।

न यस्य चेष्टितं विद्यान्न कुलं न पराक्रमम् ।

न तस्य विश्वसेत्प्राज्ञो यदीच्छेच्छ्रयमात्मनः ॥

चण्डरवो ऽपि भयव्याकुलितान्विज्ञायेदमाहः । भी भोः श्वापदाः किं यूथं मां
दृष्ट्वैव संवृत्ता व्रजथ । तन्न भेतव्यम् । अहं ब्रह्मणाद्य स्वयमेव सृष्टाभिहितः ।
यच्छ्वापदानां कश्चिद्राजा नास्ति तत्त्वं मयाद्य सर्वश्वापदप्रभुत्वे ऽभिषिक्तस्ततो
गत्वा तान्स्वर्वाङ्परिपालयेति । ततो ऽहमन्नागतः । तन्मम च्छ्वापदायां सर्व-
रपि श्वापदैर्वर्तितव्यम् । अहं ककुद्मो नाम राजा त्रैलोक्ये ऽपि संजातः ।
तच्छ्रुत्वा सिंहव्याघ्रपुरःसराः श्वापदाः स्वामिन्प्रभो समादिशेति वदन्तस्तं परि-
ववुः । अथ तेन सिंहव्याघ्रात्पदवी प्रदत्ता व्याघ्रस्य शय्यापालकत्वं द्वीपिन-
स्ताम्बूलाधिकारो वृकस्य द्वारपालकत्वम् । ये चात्मीयाः शृगालास्तैः सहाला-
पमात्रमपि न करोति । शृगालाः सर्वे ऽपि निःसारिताः । एवं तस्य राज्य-
क्रियया वसमानस्य सिंहादयो मृगान्व्यापाद्य तत्पुरतः प्रक्षिपन्ति । सो ऽपि
प्रमुद्यमेण सर्वेषां तान्प्रविभज्य पयच्छति । एवं गच्छति काले कदा चिद्दूरदेशे
शब्दायमानाः शृगाला आकर्णिताः । तेषां शब्दं श्रुत्वा पुलकिततनुरानन्दा-
श्रुपूर्णनयनस्तरस्वरेण विरोतुमारब्धः । अथ ते सिंहादयस्तं तारस्वरमाकर्ण्य
शृगालो ऽस्मिन्नि मत्वा लज्जयाधोमुखाः क्षणं स्थित्वा प्रोचुः । भी वाहिता
अनेन वयम् । सुदृशृगालो ऽयम् । तद्वध्यतामिति । सो ऽपि तदाकर्ण्य पलायि-
तमिच्छंस्तत्र स्थान एव सिंहादिभिः खण्डशः कृतो मृतश्च । अतो ऽहं ववीमि ।

त्यक्ताश्चाभ्यन्तरा येन बाह्याश्चाभ्यन्तरीकृताः ।

स एव मृत्युमाप्नोति यथा राजा ककुद्मः ॥

IV. Pañcatantra 5, 9.

कांसिश्चिन्नगरे काश्चित्स्वभावकृपणो नाम ब्राह्मणः प्रतिवसति स्म । तस्य
भिक्षार्जितैः सक्तुभिभुक्तोर्वरितैर्घटः परिपूरितः । तं च घटं नागदन्ते ऽवलम्ब्य
तस्याधस्तात्खट्वा निधाय सततमेकदृष्ट्या तमवलीकयति । अथ कदा चिट्वाची
सुप्रशिक्षन्त्यामास । यत्परिपूर्णां ऽयं घटस्तावत्सक्तुभिर्वर्तते । तद्यदि दूर्भिक्षं
भवति तदनेन रूपकाणां शतमुत्पद्यति । ततस्तेन मयाजादयं ग्रहीतव्यम् ।
ततः परमासिकप्रसववशात्ताभ्यां यूथं भविष्यति । ततो ऽजाभिः प्रभूता गा
ग्रहीष्यामि गोभिर्महिषीर्महिषीभिर्वडवाः । वडवाप्रसवतः प्रभूता अथा भवि-
ष्यान्ति । तेषां विक्रयात्प्रभूतं सुवर्णं भविष्यति । सुवर्णेन चतुःशालं गृहं संप-
द्यते । ततः कश्चिद्ब्राह्मणो मम गृहमागत्य प्राप्रवरा रूपाढ्यां कन्यां दास्यति ।
तत्सकाशात्पुत्री मे भविष्यति । तस्याहं सोमशर्मेति नाम करिष्यामि । तत्त-
स्मिन्नानुचलनयोग्ये संजाते ऽहं पुत्रकं गृहीत्वाश्वशालायाः पृष्ठदेशे उपविष्ट-
स्तद्वधारयिष्यामि । अत्रान्तरे सोमशर्मा मां दृष्ट्वा जनन्युत्सङ्गाज्जानुप्रचलन-
परी ऽश्वखुरासन्नवतीं मत्समीपमागमिष्यति । ततो ऽहं ब्राह्मणीं कोपाविष्टो
ऽभिधास्यामि । गृहाण तावद्दालकम् । दापि गृहकर्मव्यग्रतयास्वहचनं न श्रो-
ष्यति । ततो ऽहं समन्थाय तां पादप्रहारेण ताडयिष्यामि । एवं तेन ध्यान-
स्थितेश्च तथैव पादप्रहारो दत्तो यथा स घटो भयः । सक्तुभिः पाण्डुरतां
गतः ॥ अतो ऽहं व्रवीमि ।

अनागतवतीं चिन्तासंभाषां करोति यः ।

स एव पाण्डुरः श्रेते सोमशर्मपिता यथा ॥

V. Mahābhārata 3, 122, 1—125, 114).

॥ लोमश उवाच ॥

भृगोर्महर्षेः पुत्रो ऽभूच्छ्रवणो नाम भारत ।

समीपे मरुतस्त्वस्य तपस्तेपे महाद्युतिः ॥ १ ॥

स्थाणुभूतो महातेजा वीरस्त्वानेन पाण्डव ।

अतिष्ठत चिर कालमेकदेशे विशां पते ॥ २ ॥

स वल्मीको ऽभवदृषिर्लताभिरिव संवृतः ।

कालेन महता राजन्समाकीर्णः पिपीलिकैः ॥ ३ ॥

तथा स संवृतो धीमान्मृत्पिण्ड इव सर्वशः ।

तप्यते स तपो धीरं वल्मीकेन समावृतः ॥ ४ ॥

1) Lomāśa 仙師 Yudhisṭhira 王子 語子 一 般

अथ दीर्घस्य कालस्य शर्यातिर्नाम पार्थिवः ।
 आजगाम सरो रस्य विहृतुमिदमुत्तमम् ॥ ५ ॥
 तस्य स्त्रीणां सहस्राणि चत्वार्योमन्परिग्रहः ।
 एकैव च सुता सुभूः सुकन्या नाम भारत ॥ ६ ॥
 सा सखीभिः परिवृता दिव्याभरणभूषिता ।
 चक्रम्यमाणा वल्मीकं भार्गवस्य समामदत् ॥ ७ ॥
 सा वै वसुमती तत्र पश्यन्ती सुमनोरमाम् ।
 वनस्पतीन्विचिन्वन्ती विजहार सखीवृता ॥ ८ ॥
 रूपेण वयसा चैव मदेनैव मदेन च ।
 बभञ्ज वनवृक्षाणां शाखाः परमपुष्पिताः ॥ ९ ॥
 तां सखीरहितामेकामेकवस्त्रामलंकृताम् ।
 ददर्श भार्गवो धीमांश्चरन्तीमिव विद्युतम् ॥ १० ॥
 ता पश्यमानो विजने स रेमे परमद्युतिः ।
 कामकण्ठश्च विप्रर्षिसपोबलसमन्वितः ॥ ११ ॥
 तामावभाषे कल्याणीं सा चास्य न शृणोति वै ।
 ततः सुकन्या वल्मीके दृष्ट्वा भार्गवचक्षुषी ॥ १२ ॥
 कौतूहलात्कण्ठकेन बुद्धिमोहवलात्कृता ।
 किं नु खल्विदमित्युक्त्वा निर्विभेदास्य लोचने ॥ १३ ॥
 अक्रुध्यत्स तथा विद्धे नेत्रे परममन्युमान् ।
 ततः शर्यातिसैन्यस्य शृङ्गनूत्रे समावृणोत् ॥ १४ ॥
 ततो रुद्धे शृङ्गनूत्रे सैन्यमासीत्मुदुःखितम् ।
 तथागतमभिप्रेत्य पर्यपृच्छत्स पार्थिवः ॥ १५ ॥
 तपोनित्यस्य वृद्धस्य रोषणस्य विशेषतः ।
 केनापकृतमद्येह भार्गवस्य महात्मनः ॥ १६ ॥
 ज्ञातं वा यदि वाज्ञातं तद्भूतं ब्रूत माचिरम् ।
 तमूचुः सैनिकाः सर्वे न विज्ञोऽपकृतं वयम् ॥ १७ ॥
 सर्वोपायैर्यथाकामं भवांस्तदधिगच्छतु ।
 ततः स पृथिवीपालः साम्ना चोग्रेण च स्वयम् ॥ १८ ॥
 पर्यपृच्छत्सुहृद्दग्धं पर्यजानन्न चैव ते ।
 आनाहार्तं ततो दृष्ट्वा तस्मिन्यमसुखार्दितम् ॥ १९ ॥
 पितरं दुःखितं दृष्ट्वा सुकन्येदमथाब्रवीत् ।
 मयाटन्त्येह वल्मीके दृष्टं मत्त्वमभिज्वलत् ॥ २० ॥
 स्वद्योतवदभिज्ञातं तव्यया विद्वमान्तकात् ।
 एतच्छ्रुत्वा तु वल्मीकं शर्यातिसूर्णमभ्ययात् ॥ २१ ॥
 तत्रापश्यत्तपोवृद्धं वयोवृद्धं च मार्गवम् ।
 अयाचदथ सैन्याथै प्राङ्गलिः पृथिवीपतिः ॥ २२ ॥

अज्ञानाद्बालया यत्ते कृतं तत्त्वन्तुमर्हसि ।
 ततोऽब्रवीन्नहीपालं च्यवनो भार्गवस्तदा ॥ २३ ॥
 अपमानादहं विद्धो ह्यनया दर्पपूर्णया ।
 रूपौदार्यसमायुक्तां लोभमोहवलात्कृताम् ॥ २४ ॥
 तामेव प्रतिगृह्याहं राजन्दुहितरं तव ।
 संस्थामीति महीपाल सत्यमेतद्ब्रवीमि ते ॥ २५ ॥
 ॥ लोमश उवाच ॥
 ऋषेर्वचनमाज्ञाय शर्यातिरविचारयन् ।
 ददौ दुहितरं तस्मै च्यवनाय महात्मने ॥ २६ ॥
 प्रतिगृह्य च तां कन्यां भगवान्प्रससाद् ह ।
 प्राप्तपसादो राजा वै ससैन्यः पुरमात्रजत् ॥ २७ ॥
 सुकन्यापि पतिं लब्ध्वा तपस्विनमनिन्दिता ।
 नित्यं पर्यचरन्तीत्या तपसा नियमेन च ॥ २८ ॥
 अभीनामतिथीनां च शुश्रूषुरनसूयिका ।
 समाराधयत् क्षिप्रं च्यवन सा शुभानना ॥ २९ ॥
 ॥ इत्यारण्यके पर्वणि सौकन्ये द्वाविंशत्यधिकशतौ
 अध्यायः ॥

॥ लोमश उवाच ॥

कस्य चित्तव्य कालस्य त्रिदशावश्विनी नृप ।
 कृताभिषेकां विवृतां सुकन्या तामपश्यताम् ॥ १ ॥
 तां दृष्ट्वा दर्शनीयाङ्गीं देवराजसुतामिव ।
 ऊचतुः समभिद्रुत्य नासत्यावश्विनाविदम् ॥ २ ॥
 कस्य त्वमि वामोरु वनेऽस्मिन्किं करोषि च ।
 इच्छाव भद्रे ज्ञातुं त्वां तत्त्वमाख्याहि शोभने ॥ ३ ॥
 ततः सुकन्या सत्रीडा तावुवाच सुरोत्तमौ ।
 शर्यातितनयां वित्तं भार्यां मां च्यवनस्य च ॥ ४ ॥
 अथाश्विनीं प्रहस्यैतामब्रूतां पुनरेव तु ।
 कथं त्वमि कल्याणि पित्रा दत्ता गताध्वने ॥ ५ ॥
 भ्राजसेऽस्मिन्वने भीरु विद्युत्मांदामिनी यथा ।
 न देवेष्वपि तुल्यां हि त्वयापश्याव भाविनि ॥ ६ ॥
 अनाभरणसंपन्ना परमाम्बरवर्जिता ।
 शोभयस्यधिकं भद्रे वनमप्यनलंकृता ॥ ७ ॥
 सर्वाभरणसंपन्ना परमाम्बरधारिणी ।
 शोभसे त्वनवद्याङ्गि न त्वेवं मलपाङ्किनी ॥ ८ ॥
 कस्यादेवविधा भूत्वा जराजर्जरितं पतिम् ।
 त्वमुपास्ते ह कल्याणि कामभोगवहिष्कृतम् ॥

असमर्थं परिव्राणे पोषणे च शुचिस्मिति ।
सा त्वं च्यवनमुत्सृज्य वरयस्वैकमावयोः ॥ १० ॥
पत्यर्थं देवगर्भाभि मा वृथा यौवन कृथाः ।
एवमुक्त्वा सुकन्यापि सुरी ताविदमब्रवीत् ॥ ११ ॥
रताहं च्यवने पत्यौ मैवं मां पर्यशङ्कतम् ।
तावब्रूतां पुनस्त्विनामावां देवभिषग्वरौ ॥ १२ ॥
युवाने रूपसंपन्नं करिष्यावः पतिं तव ।
ततस्तस्यावयोश्चैव वृणीष्वान्यतमं पतिम् ॥ १३ ॥
एतेन समयेनैतन्मामन्वय पतिं शुभे ।
मा तयोर्वचनाद्वाजनुपसंगम्य भार्गवम् ॥ १४ ॥
उवाच वाक्यं यत्ताभ्यामुक्तं भृगुमुनें प्रति ।
तच्छ्रुत्वा च्यवनो भार्यामुवाच क्रियतामिति ॥ १५ ॥
भर्ता सा समनुज्ञाता क्रियतामित्यथाब्रवीत् ।
श्रुत्वा तदाश्विनां वाक्यं तत्तस्याः क्रियतामिति ॥ १६ ॥
ऊचतू राजपुत्रो तां पतिस्तव विशत्वपः ।
ततो ऽस्मश्च्यवनः शीघ्रं रूपार्थीं प्रविवेश ह ॥ १७ ॥
आश्विनावपि तद्वाजन्सरः प्राविशतां तदा ।
ततो मुहूर्तोदुत्तीर्णाः सर्वे ते सरसस्तदा ॥ १८ ॥
दिव्यरूपधराः सर्वे युवानो मृष्टकुण्डलाः ।
तुल्यवेषधराश्चैव मनसः प्रीतिवर्धनाः ॥ १९ ॥
ते ऽब्रुवन्सहिताः सर्वे वृणीष्वान्यतमं शुभे ।
अस्माकमीप्सितं भद्रे पतित्वे वरवर्णिनि ॥ २० ॥
यत्र चाप्यभिकामासि तं वृणीष्व सुशोभने ।
सा समीच्य तु तान्सर्वासुख्यरूपधरान्स्थितान् ॥ २१ ॥
निश्चित्य मनसा बुद्ध्या देवी वद्रे स्वकं पतिम् ।
नब्ध्वा तु च्यवनो भार्यां वयो रूपं च वाञ्छितम् ॥ २२ ॥
हृष्टो ऽब्रवीन्महातेजास्तौ नासत्याविदं वचः ।
यथाह रूपसंपन्नो वयसा च समन्वितः ॥ २३ ॥
कृतो भवज्ञो वृद्धः सन्भार्यां च प्राप्तवानिमाम् ।
तस्माद्युवां करिष्यामि प्रीत्याहं सीमपीथिनौ ॥ २४ ॥
मिषतो देवराजस्य सत्यमेतद्ब्रवीमि वाम् ।
तच्छ्रुत्वा हृष्टमनसौ दिवं तौ प्रतिजग्मतुः ।
च्यवनश्च सुकन्या च सुराविव विजहतुः ॥ २५ ॥
॥ इत्यारण्यके पर्वणि सीकन्ये त्रयोविंशत्यधिकशतो
ऽध्यायः ॥

१) 絕對所屬格

॥ लोमश उवाच ॥

ततः शुश्राव श्रयार्तिर्वयःस्त्र्यं च्यवनं कृतम् ।
संहृष्टः सेनया सार्धमुपायाद्भार्गवाश्रमम् ॥ १ ॥
च्यवने च सुकन्या च दृष्ट्वा देवसुताविव ।
रेभे सभार्यः श्रयार्तिः कृत्स्नां प्राप्य महीमिव ॥ २ ॥
श्रापणा सत्कृतस्तेन सभार्यः पृथिवीपतिः ।
उपोपविष्टः कल्याणीः कथाशक्रे मनोगमाः ॥ ३ ॥
अर्थिनं भार्गवो राजनुवाच परिसान्त्वयन ।
याजयिष्यामि राजंस्त्वां संभारानवकल्पय ॥ ४ ॥
ततः परमसंहृष्टः श्रयार्तिरवनीपतिः ।
च्यवनस्य महाराज तद्वाक्यं प्रत्यपूजयत् ॥ ५ ॥
प्रशस्ते ऽहनि यज्ञीये सर्वकामसमृद्धिमत् ।
कारयामास श्रयार्तिर्यज्ञायतनमुत्तमम् ॥ ६ ॥
तत्रैतं च्यवनो राजन्याजयामास भार्गवः ।
अद्भुतानि च तत्रासन्त्यानि तानि निबोध मे ॥ ७ ॥
अगृह्णाच्च्यवनः सोममश्विनोर्देवयोस्तदा ।
तस्मिन्द्वौ वारयामास गृह्णानं स तयोर्ग्रहम् ॥ ८ ॥

॥ इन्द्र उवाच ॥

उभावेतौ न सीमार्हो नासत्याविति मे मतिः ।
भिषजौ दिवि देवानां कर्मणा तेन नार्हतः ॥ ९ ॥

॥ च्यवन उवाच ॥

महोत्साही महात्मानो रूपद्रविणवत्तरौ ।
यौ चक्रतुर्मा मघवन्वृन्दारकामवाजरम् ॥ १० ॥
ऋते त्वां विवधांशान्यान्कथं वै नार्हतः सव्य ।
अश्विनावपि देवेन्द्र देवो विद्धि पुरंदर ॥ ११ ॥

॥ इन्द्र उवाच ॥

चिकित्सकौ कर्मकरौ कामरूपसमन्वितौ ।
लोके चरन्ती मत्यांनः कथं सोममिहार्हतः ॥ १२ ॥

॥ लोमश उवाच ॥

एतदेव यदा वाक्यसाम्प्रिडयति देवराट् ।
अनादृत्य ततः शक्रं ग्रहं जग्राह भार्गवः ॥ १३ ॥
ग्रहीष्यन्ते तु तं सोममश्विनोरुत्तमं तदा ।
समीच्य वलमिद्वेव इदं वचनमब्रवीत् ॥ १४ ॥
आभ्यामर्थाय सोमं त्वं ग्रहीष्यसि यदि स्वयम् ।
वज्रं ते प्रहरिष्यामि घोररूपमनुत्तमम् ॥ १५ ॥
एवमुक्तः सद्यन्निन्द्रमभिवीक्ष्य स आगवः ।

जग्राह विधिवत्सोममश्विभ्यामुत्तमं ग्रहम् ॥ १६ ॥
 ततो ऽस्मि प्राहरद्वयं घोररूपं शचीपतिः ।
 तस्य प्रहरतो वाङ् स्तम्भयामास भार्गवः ॥ १७ ॥
 तं स्तम्भयित्वा चवनो जुहुवे मन्त्रतो ऽनलम् ।
 क्रुत्वार्यो मुमहातेजा देवं हिंसितुमुद्यतः ॥ १८ ॥
 तत क्रुत्वाथ संजज्ञे मुनेस्तस्य तपोवलात् ।
 मदीं नाम महावीर्यो बृहत्कायो महामुरः ॥ १९ ॥
 शरीरं यस्य निर्देष्टुमशक्यं तु सुरामुरैः ।
 तस्यास्यमभवद्गौरं तीक्ष्णाग्रदशनं महत् ॥ २० ॥
 हनुरेका स्थिता त्वस्य भूमविका दिवं गता ।
 चतस्रश्चायता दंष्ट्रा योजनानां शतं शतम् ॥ २१ ॥
 इतरं त्वस्य दशना बभूवुर्दशयोजनाः ।
 प्रामादशिखराकाराः शृलायसमदर्शनाः ॥ २२ ॥
 बाहू पर्वतसंकाशावायतावयुतं समौ ।
 नेत्रे रविशशिप्रस्थे बद्धं क्षालाशिसंनिभम् ॥ २३ ॥
 नेत्रिहस्त्रिह्रया बद्धं विद्युच्चपल्लोलया ।
 व्यात्ताननो घोरदृष्टिर्गसन्नैव जगद्वलात् ॥ २४ ॥
 म भक्षयिष्यन्मंक्रुद्धः शतक्रतुमुपाद्रवत् ।
 महता घोररूपेण लोकाञ्छब्देव नादयन् ॥ २५ ॥
 ॥ इत्यारण्यके पर्वणि तीकन्ये चतुर्विंशत्यधिकशतो
 ऽध्यायः ॥

॥ लीमण उवाच ॥

त दृष्ट्वा घोरवदनं जटं उवः शतक्रतुः ।
 आद्यान्तं भक्षयिष्यन्तो व्यात्ताननमिवान्तकम् ॥ १ ॥
 भयात्मेस्तम्भितभुजः सृष्टिगणी ललिहन्मुहुः ।
 ततो ऽब्रवीद्देवराजश्चवनं भयपीडितः ॥ २ ॥
 सोमार्हावश्विनावितावयु प्रभृति भागव ।
 भविष्यतः सर्वमितदृचो विप्र प्रसीद मे ॥ ३ ॥
 न ते मिथ्याममारम्भा भवत्वेष परो विधिः ।
 ज्ञानामि चाहं विप्रपे न मिथ्या त्वं करिष्यसि ॥ ४ ॥
 सोमार्हावश्विनाविता यथैवाद्य क्रतो त्वया ।
 भूय एव तु ते वीर्यं प्रकाशदिति भार्गव ॥ ५ ॥
 मुक्त्यायाः पतुस्यास्य लोके कीर्तिः प्रथेदिति ।
 अतो मयैतद्विहितं तव वीर्यप्रकाशनम् ॥ ६ ॥
 तस्मात्प्रसादं कुरु मे भवत्वैव यद्यच्छसि ।
 एवमुक्तस्य शक्रेण भागवस्य महात्मनः ॥ ७ ॥

स मन्युर्व्यगमच्छीघ्रं मुमीच च पुरंदरम् ।
 मदं च व्यभजद्राजन्पाने स्त्रीषु च वीर्यवान् ॥ ८ ॥
 अक्षेषु मृगयायां च पूर्वसृष्टं पुनः पुनः ।
 तदा मदं विनिक्षिप्य शक्रे संतर्यं चेन्दुना ॥ ९ ॥
 अश्विभ्यां सहितान्देवान्याजयित्वा च तं नृपम् ।
 विख्याप्य वीर्यं लोकेषु सर्वेषु वदतां वरः ॥ १० ॥
 सुकन्यया सहारण्ये विजहारानुकूलया ॥ ११ ॥

VI. Viṣṇupurāṇa 4, 10.

यतिययातिसंयात्ययातिवियतिरुतिसंज्ञा नङ्गस्य षट् पुत्रा महाबल-
 पराक्रमा बभूवुः । यतिसु राज्यं नैच्छत् । ययातिसु भूमृदभवदुशनसश्च
 दुहितरं देवयानीं शर्मिष्ठां च वार्षपर्वणीमुपयेमे । अत्रानुवंशज्ञोको भवति ।

यदुं च तुर्वसुं चैव देवयानी व्यजायत ।

द्रुह्युं चानुं च पूरुं च शर्मिष्ठा वार्षपर्वणी ॥

काव्यशापाद्वाकालेनैव ययातिर्जरामवाप ।¹⁾ प्रसन्नशुक्रवचनाच्च जरा संक्रा-
 मयितुं ज्येष्ठं पुत्रं यदुमुवाच । तन्मातामहशापादिचमकालेनैव जरा मामुप-
 स्थिता । तामहं तस्मैवानुग्रहाद्भवतः संचारयाम्येकं वर्षसहस्रम् । न तृप्तो
 ऽस्मि विषयेषु । त्वद्वयसा विषयानहं भोक्तुमिच्छामि । नात्र भवता प्रत्या-
 ख्यानं कर्तव्यम् । इत्युक्तः स नैच्छत्तां जरामादातुम् । तं चापि पिता शशाप ।
 त्वत्प्रसूतिर्न राज्यार्हा भविष्यतीति । अनन्तरं च द्रुह्युं तुर्वसुमनुं च पृथि-
 वीपतिर्जराग्रहणार्थं स्वर्ग्यौवनप्रदानाय च चोदयामास । तैरप्येकैकशेन
 प्रत्याख्यातस्ताञ्छशाप । अथ शर्मिष्ठातनयमशेषकनीयांसं पूरुं तथैवाह । स
 चातिप्रवणमतिः प्रणम्य पितरं सवङ्गमानं महान्प्रसादो ऽयमस्माकमित्युदा-
 रमभिधाय जरां प्रतिजग्राह स्वकीयं च यौवनं पित्रे ददौ । सो ऽपि च
 नवयौवनमासाद्य धर्माविरोधेन यथाकामं यथाकालोपपन्नं यथोत्साहं वि-
 षयं चचार सम्यक् च प्रजापालनमकरोत् । विश्वाच्या सहोपभोगं भुक्त्वा
 कामानामन्तमवाप्स्यामीत्यनुदिनं तन्ननस्को बभूव । अनुदिनं चोपभोगतश्च
 कामानतीवाभिरम्यान्नेने । ततश्चैवमगायत ।

न जातु कामः कामानामुपभोगेन शाम्यति ।

हविषा कृष्णवर्त्मैव भूय एवाभिवर्धते ॥

1) काव्यशापादिति । शर्मिष्ठायां दास्यां ययातिना पुत्रोत्पादनं देव-
 यान्या कथितं शुक्ला क्रुद्धस्य शुक्रस्य शापादकाले जरां ययातिरवाप
 (Scholiast; cfr. Mahābhārata .I. 53, 24 ff.).

यत्पृथिव्यां व्रीहियद् हिरण्यं पशुवः स्त्रियः ।
 एकस्यापि न पर्याप्तं तदित्यतितृषं त्यजेत् ॥
 यदा न कुरुते भावं सर्वमूर्तेषु पापकम् ।
 समदृष्टेनदा पुंसः सर्वा एव सुखा दिशः ।
 या दुस्त्यजा दुर्मतिभर्या न जीर्यति जीर्यतः ।
 तां तृष्णां संत्यजन्नाज्ञः सुखेनैवाभिपूर्यति ॥
 जीर्यन्ति जीर्यतः केशा दन्ता जीर्यन्ति जीर्यतः ।
 धनाशा जीविताशा च जीर्यतो ऽपि न जीर्यति ॥
 पूर्णं वर्षसहस्रं मे विषयासक्तचेतसः ।
 तथाप्यनुदिनं तृष्णा मर्मतेष्वेव जायते ॥
 तस्मादेतामहं त्यक्त्वा ब्रह्मण्याधाय मानसम् ।
 निर्द्वन्द्वो निर्ममो भूत्वा चरिष्यामि मृगैः सह ॥
 ॥ पराशर उवाच ॥

पूरोः सकाशादादाय जरां दत्त्वा च यावनम् ।
 राज्ये ऽभिषिच्य पूरुं च प्रययौ तपसे वनम् ॥
 दिशि दक्षिणपूर्वस्थां तुर्वसुं प्रत्यथादिशत् ।
 प्रतीच्यां च तथा द्रुह्युं दक्षिणापथतो यदुम् ॥
 उदीच्या च तथैवानुं कृत्वा मण्डलिनो नृपान् ।
 सर्वपृथ्वीपतिं पूरुं सो ऽभिषिच्य वनं ययौ ॥

॥ इति श्रीविष्णुपुराणे चतुर्थे ऽंशे दशमो ऽध्यायः ॥

VIII. Pañcatantra 1, 5.

कस्मिंश्चिदाधिष्ठाने कौलिकरथकारो प्रतिवसतः स्म । तत्र तौ जन्मप्र-
 भृति सहचारणावास्ताम् । परस्परमतीव स्नेहपरां सकलस्थानविहारिणीं
 सदैव कालं नयतः । अथ कदा चित्तत्राधिष्ठाने कस्मिंश्चिद्देवायतने यात्रा-
 महोत्सवः संवृत्तः । तत्र च नटनर्तकचारणसंकुले नानादिशागतजनावृते तौ
 सहचरौ भ्राम्यन्तौ कां चित्राजकन्यां करेणुकारूढां सर्वलक्षणसनाथां कञ्चु-
 किवर्षधरपरिवारितां देवतादर्शनाय समायातां दृष्टवन्तौ । अथासौ कौ-
 लिकस्तां दृष्ट्वा विषादित इव दुष्टग्रहगृहीत इव कामशूरैर्हन्यमानः सहसा
 भूतले निपपात । अथ तं तदवस्थमवलोक्य रथकारस्तदुःखदुःखित आत्तपु-
 र्षैस्तं समुत्तिष्य स्वगृहमाचारयत् । तत्र च विविधैः शीतोपचारिश्चिकित्स-
 कोपट्टिष्टैर्मन्त्रवादिभिरुपचार्यमाणश्चिरात्कथं चित्तचित्तनो बभूव । ततो रथ-
 कारेण पृष्टः । भो मित्र किमेवं त्वमकस्माद्विचेतनो जातः । तत्कथ्यतामा-
 त्स्वरूपम् । स आह । वयस्य यद्येवं तच्छृणु मे रहस्यं येन सर्वामात्मवे-
 दनां ते वदामि । यदि त्वं मां सुहृदं मन्यसे ततः काष्ठप्रदानेन प्रसादः

क्रियताम् । अन्यतां यदा किं चित्रणयातिरेकादयुक्तं तव मयानुष्ठितम् ।
 सो ऽपि तदाकर्ण्य वाप्यपिहितनयनः सगद्गदमुवाच । वयस्य तदुःखकारणं
 किं तव । तद्वद् येन प्रतीकारः क्रियते यदि शक्यते कर्तुम् । उक्तं
 च यतः ।

श्रीषधार्थसुमन्त्राणां बुद्धेशैव महात्मनाम् ।

असाध्यं नास्ति लोके ऽत्र यद्वाह्याण्डस्य मध्यगम् ॥

तदेषां चतुर्णां यदि साध्यं भविष्यति तदहं साधयिष्यामि । कौलिक आह ।
 वयस्य एतेषामन्येषामपि सहस्रश उपायानामसाध्यं तन्मम दुःखम् । तस्मा-
 न्नम मरणे मा कालक्षेपं कुरु । रथकार आह । भो मित्र यदप्यसाध्यं
 तथापि निवेद्य येनाहमपि तदसाध्यं मत्वा त्वया सह वद्वौ प्रविशामि ।
 न क्षणमपि त्वद्वियोगं सहिष्ये । एष मे निश्चयः । कौलिक आह । वयस्य
 यासौ राजकन्या करेणुकारूढा तत्रोत्सवे दृष्टा तस्या दर्शनानन्तरं मकर-
 ध्वजेन ममेयमवस्था विहिता । तन्न शक्नोमि तदेदनां सोढुम् । रथकारी
 ऽपि सखितमिदमाह । वयस्य दिध्या यद्येवं तर्हि सिद्धं नः प्रयोजनम् ।
 तद्वैव तथा सह संगमः क्रियतामिति । कौलिक आह । वयस्य यत्र
 कन्यान्तःपुरे वायुं मुक्त्वाण्यस्य प्रवेशो नास्ति तत्र रक्षापुरुषाधिष्ठिते कथं
 मम तथा सह संगमः । तत्किं मामसत्यवचनेन विडम्बयसि । रथकार
 आह । मित्र पश्य मे बुद्धिप्रभावम् । एवमभिधाय तत्क्षणात्कीलसंचारिणं
 वैनतेयं सवाङ्मयुगलं चिरजार्जुनवृक्षदारुणा शङ्खचक्रगदापद्मान्वितं सकिरी-
 टकौस्तुभमघटयत् । ततस्तस्मिन्कौलिकं समारोष्य विष्णुचिह्नचिह्नितं कृत्वा
 कीलसंचरणविज्ञानं च दर्शयित्वा प्रोवाच । वयस्य अनेन विष्णुरूपेण
 गत्वा कन्यान्तःपुरे निशीथे राजकन्यामेकाकिनी सप्तभूमिकप्रासादप्रान्तगतं
 मुग्धस्वभावां त्वां वासुदेवं मन्यमानां स्वकीयमिथ्यावक्रोक्तिभी रञ्जयित्वा
 वात्स्यायनोक्तविधिना भज । कौलिको ऽपि तदाकर्ण्य वासुदेवरूपी रहस्यदा
 गत्वा तत्र तामाह । राजपुत्रि सुप्ता किं वा जागर्षि । अहं तव हृते
 समुद्रात्सानुरागो लक्ष्मीं विहार्यवागतः । तत्क्रियतां मया सह संगम इति ।
 सापि गरुडाकूढं चतुर्भुजं सायुधं कौस्तुभोपेतमवलोक्य सविस्मया शयनादु-
 त्थाय प्रोवाच । भगवन् अहं मानुषी कीटिकाशुचिर्भगवांस्त्रैलोक्यपावनो
 वन्दनीयश्च । तत्कथमेतद्व्यज्यते । कौलिक आह । सुभगे सत्यमभिहितं
 भवत्या । परं किं तु राधा नाम मे भार्या गोपकुलप्रसूता प्रथममासीत् ।
 सा त्वमचावतीर्णा । तेनाहमायातः । इत्युक्त्वा सा प्राह । भगवन्वद्येवं तन्मे
 तातं प्रार्थय । सो ऽप्युपकल्प्य तुभ्यं मां प्रयच्छति । कौलिक आह । सुभगे
 नाहं दर्शनपथं मानुषाणां गच्छामि किं पुनरालापकरणम् । त्वं गान्धर्वेण
 विवाहनात्मानं प्रयच्छ । नो चेच्छापं दत्त्वा सान्वय ते पितरं भस्मसात्क-
 रिष्यामीति । एवमभिधाय गरुडादवतीर्य सद्ये पाणौ कृत्वा तां सभयां
 सलज्जां वेपमानां शय्यायामनद्यत्तस्य रात्रिशेषं यावद्वात्स्यायनोक्तविधिना

निषेध प्रत्युषे जलचित्तो जगाम । एवं तां तस्य नित्यं सेवमानस्य कालो
याति । अथ कदा चित्कञ्चुकिनस्तस्या अधरोष्ठप्रवालखण्डनं द्रष्टुं मिथः
प्रोचुः । अहो पशतास्या राजकन्यायाः पुरुषोपभुक्ताया इव शरीरावयवाः
संभाव्यन्ते । तत्कथमयं सुरचिते ऽप्यस्मिन्गृह एवविधो व्यवहारः । तद्राज्ञे
निवेदयामः । एवं निश्चित्य सर्वे समेत्य राजानं प्रोचुः । देव वयं न
विद्मः । परं सुरचिते ऽपि कन्यान्तःपुरे कश्चित्प्रविशति । तद्देवः प्रमाणाभि-
ति । तच्छ्रुत्वा राजातीव व्याकुलितचित्तो देवीं रहःस्थां प्रोवाच । देवि
ज्ञायतां किमेते कञ्चुकिनो वदन्ति । तस्य कृतान्तः कुपितो येनेतदेवं क्रियते ।
देव्यापि तदाकर्ण्य व्याकुलीभूता सत्वरं गत्वा तां खण्डिताधरां नखविकर्ति-
तशरीरावयवामपश्यत् । आह च । आः पापे कुलकलङ्कानि किमेवं शील-
खण्डनं कृतम् । को ऽयं कृतान्तावलीकितस्त्वत्सकाशमभ्येति । तत्कथ्यतामे-
वेगते ऽपि सत्यम् । तच्छ्रुत्वा सापि त्रपाधोमुखी सकलं विष्णुरूपकौलिक-
वृत्तान्तं निवेदयामास । सापि तच्छ्रुत्वा प्रहसितवदना पुलकाङ्कितसर्वाङ्गी
सत्वरं गत्वा राजानमूचे । देव दिव्या वर्धसे । नित्यमेव निशीथे भगवा-
न्नारायणः कन्यकापार्थे ऽभ्येति । तेन गान्धर्वविवाहेन सा विवाहिता ।
तदव त्वया मया च रात्री वातायनगताभ्यां निशीथे द्रष्टव्यो यतो न स
मानुषैः महालापं करोति । तच्छ्रुत्वा हर्षितस्य राज्ञस्तद्दिनं वर्षशतप्रायमिव
कथं चिज्जगाम । ततस्तु रात्री निभृतो भूत्वा राज्ञीसहितो राजा वाताय-
नस्थो गगणासक्तदृष्टिर्वावत्तिष्ठति तावद्गरुडारूढं तं शङ्खचक्रगदापद्महस्तं
यथोक्तचिह्नाङ्कितं व्योम्नो ऽवतरन्तमपश्यत् । ततः सुधापूरझावितमिवात्मानं
मन्यमानस्तापुवाच । पिपे नास्त्यन्यो धन्यतरो मत्तस्त्वत्तश्च यत्प्रसूतिं नारा-
यणो भजते । तत्सिद्धाः सर्वे ऽस्माकं मनोरथाः । अधुना जामातृप्रभावेण
सर्वा वसुमती वशे भविष्यति । एवं निश्चित्य सर्वैः सीमाधिपैः सह मर्या-
दाव्यतिक्रममकरोत् । ते च तं मर्यादाव्यतिक्रमेण वर्तमानमालोक्य सर्वे
समेत्य तेन सह विग्रहं चक्रुः । अत्रान्तरे स राजा देवीमुखेन तां दुहित-
रमुवाच । पुत्रि त्वयि दुहितरि स्थितायां किमेवं युज्यते यत्सर्वे पार्थिवा
मया सह विग्रहं कुर्वन्ति । तत्संबोधो ऽव भर्ता त्वया यथा स मम
शत्रून्व्यापादयति । अथ तथा स कौलिको रात्रीं सविनयमभिहितः ।
भगवन त्वयि जामातरि स्थिते मम तातो यच्छत्रुभिः परिभूयते तन्न
यत्कम । तत्प्रमादं कृत्वा सर्वान्मान्यापादय । कौलिक आह । सुभगे किय-
न्वावस्त्विते तत्र पितुः शत्रवः । तद्विद्यता भव जणेनापि सुदंशेनचकेण
सर्वास्त्रिणा खण्डयिष्यामि । अथ गच्छता कालेन समस्तदेशः शत्रुभिर्ध्यातः ।
अस्य केवलं स राजा पाकारशेषः कृतः । तथापि वासुदेवरूपधरं कौलिक-
मजाननाज्ञा नित्यमेव विप्रोषतः कर्पूरागुरुकस्तूरिकाटिपरिमलविप्रोषाज्ञाना-
प्रकारवस्त्रभक्ष्यपेयांश्च प्रेषयन्द्दुहितृमुखेन तमूचे । भगवन्प्रभाते नूनं स्थान-
भङ्गी भविष्यति यतो यवमन्धनक्षयः संजातस्तथा सर्वो ऽपि जनः प्रहार्ज-

जैरितदेहः संवृत्तो योद्गुमक्षमः प्रचुरो मृतश्च । तदेवं ज्ञात्वात्र काले
यदुचितं भवति तद्विधेयमिति । तच्छ्रुत्वा कौलिको ऽप्यचिन्तयद्यत्स्थानभङ्गे
जाते ममानया सह वियोगो भविष्यति । तस्मान्गरुडमारुह्य मायुधमात्मान-
नमाकाशे दर्शयामि । कदा चिन्मां वासुदेवं मन्यमानास्ते साशङ्का राज्ञो
योद्गुभिर्हन्यन्ते । उक्तं च ।

निर्विषेणापि सर्पेण कर्तव्या महती फणा ।

विषं भवतु मा भूदा फटाटोपो भयंकरः ॥

अथ वा मम स्थानार्थं उद्यतस्य मृत्युर्भवति । तथापि सुन्दरतरम् । उक्तं च ।

गवामर्थे ब्राह्मणार्थे स्वाम्यर्थे स्त्रीकृतं ऽथ वा ।

स्थानार्थं यन्मज्जित्पाणोस्तस्य लोकाः सनातनाः ॥

एवं निश्चित्य प्रत्युषे दन्तधावनं विधाय तामूचे । सुभगे समस्तैः शत्रुभिर्ह-
तैरन्नं पानं चाम्वाटयिष्यामि । किं वङ्गना । त्वयापि सह संगमं ततः
करिष्यामि । परं वाच्यस्त्वया निर्जपिता यत्त्वया प्रभाते सर्वसैन्येन सह
नगरान्निष्कस्य योद्गुमहं चाकाशस्थस्तान्निस्तेजसः करिष्यामि । पश्चात्मुखेन
भवता हन्तव्याः । यदि पुनरहं तान्स्वयमेव सूदयामि तत्तेषां पापात्मनां
वैकण्ठीया गतिः स्यात् । तस्मान्ना तथा कर्तव्या यथा पलायन्तो हन्यमानाः
त्वगं न गच्छन्ति । सापि तदाकर्ण्य पितुः समीपं गत्वा सर्वं वृत्तान्तं न्यवे-
दयत् । राजापि तस्या वाक्यं श्रद्धधानः प्रत्युषे समुत्थाय सुसंनद्धसैन्यो
युद्धार्यं निर्जगाम । कौलिको ऽपि मरणकृतनिश्चयथापपाणिर्गगणगतिर्गु-
डारूढो युद्धार्यं प्रस्थितः । अत्रान्तरे भगवता नारायणेनातीतानागतवर्त-
मानवेदिना स्मृतमात्रो वेनतयः संप्राप्तो विहस्य प्रोक्तः । भो गरुडन्
जानामि त्वं यन्मम रूपेण कौलिको दारुमयगरुडे समारूढो राजकन्यां
कामयत । सो ऽव्रवीत् । देव सर्वं ज्ञायते तच्चेष्टितम् । तन्किं कुर्मः सांप्र-
तम् । श्रीभगवानाह । अथ कौलिको मरणे कृतनिश्चयो विहितनियमो
युद्धार्ये विनगंतः । स नूनं प्रधानक्षत्रियशराहतो निधनमेष्यति । तस्मिन्हते
मर्षो जनो वदिष्यति यत्प्रभूतक्षत्रियैर्मिलित्वा वासुदेवो गरुडश्च निपातितः ।
ततः परं लोक आवयोः पूजां न करिष्यति । ततस्त्वं द्रुततरं तत्र दारुम-
यगरुडे संक्रमणं कुरु । अहमपि कौलिकशरीरं आवेशं करिष्यामि येन स
शत्रून्व्यापादयति । ततश्च शत्रुवधादावयोर्माहात्म्यवृद्धिः स्यात् । अथ तथेति
प्रतिपत्ते श्रीभगवान्नारायणस्तच्छरीरे संक्रमणमकरोत् । ततो भगवन्माहा-
त्म्येन गगणस्थः स कौलिकः शङ्खचक्रगदाचापचिह्नितः क्षणदिव लीलथैव
सर्वानपि प्रधानक्षत्रियास्त्रिस्तेजसश्चकार । ततस्तेन राज्ञा स्वसैन्यपरिवृत्तेन
जिता निहताश्च ते सर्वे ऽपि शत्रवः । जातश्च लोकमध्ये प्रवादो यथानेन
विष्णुजामातृप्रभावेण सर्वे शत्रवो निहता इति । कौलिको ऽपि तान्हुता-
न्द्वा प्रमुदितमना गगणादवतीर्णः सन्यावद्राजामात्यपीरलोकास्तं नगरवा-
स्तव्यं कौलिकं पश्यन्ति ततः पृष्टः किमेतदिति । ततः सो ऽपि मूलादारभ्य

सर्वं प्राग्वृत्तान्तं न्यवेदयत् । ततश्च कौलिकसाहसानुरञ्जितमनसा शत्रुवधा-
दवाप्ततेजसा राज्ञा सा राजकन्या सकलजनप्रत्यक्षं विवाहविधिना तस्मै
समर्पिता देशश्च प्रदत्तः । कौलिको ऽपि तया सार्धं पञ्चप्रकारं जीवलो-
कसारं विषयसुखमनुभवन्कालं निनाय । अतस्तूच्यते ।

सुप्रयुक्तस्य दम्भस्य ब्रह्माप्यन्तं न गच्छति ।

कौलिको विष्णुरूपेण राजकन्यां निषेवते ॥

字 書

字書中字の排列順は大概巻首に出せる梵語字母の順に依るものなりと雖も隨韻 (m) と止聲 (h) とは特別の配置法に依るものなるを以て此處に是を辨す。半韻又は吹氣音にて直に従はれたる隨韻は k の前にあり。例へば samśaya は sakala より前にあり。然るに喉等五類の發聲の前に來りて其類の鼻音に代用し得べき隨韻は其鼻音の位置に在り。例せば samkāśa=sankāśa は sagadgam の下にあり。此に類して止聲の變化すべからざるもの即ち硬き喉、唇音に先たてるものは總ての發聲より先に來る。例せば antahpura は anta の後、antaka の前にあり。然るに硬吹氣音に直に先たてる(各種の吹氣音と同化するも可なる)止聲は宛も其吹氣音なるが如く (niḥśaṅka は niśśaṅka の如く)認められ其に相當する處に置かる。例せば niḥśaṅka は niścaya の後 nistejas の前にあり。

字書中所用の略語は巻首に其解を掲げたるも尙ほ此處に加ふべきものは：形=形容詞。形合.=形容詞的合成語。過=過去受動分詞。副=副詞。代=代名詞。數=數詞。

a

a (韻の前には) an (剝奪を示す辭) 無・非・不(等の義)
a (代名詞の語幹 idam を看よ)
amśa (男) 部、分
akasmāt (副) 豫期せざる、突然の
akāla (男) 非時; °lena (及び) °le 非時に、時ならぬ。

akṣa (男) 骰子
akṣama (形) 資格なき; 堪能ならざる
agāra (中) 家、舎
aguru (男・中) 沈香
agni (男) 火、火神、阿耆尼
agra (中) 頂; °tas (副) 先き、先きに、先の方に
agrya (形) 勝れたる、最も勝れたる。

añkita (過.) 標されたる, 示されたる.
 aṅga (中.) 肢, 體; (形合. 女.) i.
 aṅgaṇa (中.) 庭.
 acakṣus (形.) 眼なき; 盲ひたる.
 acyuta (形.) 傾動すべからざる, 泰然たる.
 aja (男.) 山羊; (女.) ā.
 ajara (形.) 不老なる, 常に壯き.
 ajñāta (形.) 知られざる; °m (副.) 知らずに.
 ajñāna (中.) 無智, 無了.
 aṭ 1. 往く, 行く.
 aṅḍa (中.) 卵.
 atas (副.) 故へに, それゆへに.
 ati (副.) 非常に, 甚はだ.
 atitr̥ṣ (女.) 過量の欲望, 過大の食.
 atithi (男.) 客.
 atimuktaka (男.) (樹名. gaertnera racemosa); °kāgāra (中.) a°にて造られたる一小屋.
 atireka (男.) 過量.
 atita (中.) 過去.
 ativa (副.) 非常に, 過量に, 甚はだ.
 atr̥ṇa (中.) 草のなき處.
 atra (副.) 此處, 其處; 此方へ, 其方より, 其方へ; 其に就て, 其に由て.

atra kāle 此の時, 今.
 atha (副.) 此に於て, そのとき; 而して, 又; 然りながら, 然るに. atha vā 或は寧ろ.
 ad 2. 食ふ.
 adas (代.) (115) 其.
 adūra (形.) 遠からざる; °re (...より [屬.] 遠からざる, より懸隔せざる.
 adbhuta (中.) 未曾有.
 adya (副.) 今日; 今.
 adhara (男.) 下唇; (單. 總稱的) 唇.
 adharottara (形.) 上と下の, 間雜したる.
 adharoṣṭha (中.) (16 條の備考). 下唇; (總稱的) 唇.
 adharma (男.) 不法, 不正, 罪惡.
 adhastāt (副.) (...の [屬.] 下) に
 adhārya (形.) 防ぐ可らざる, 耐ゆ可らざる.
 adhika (形.) 量を超へたる, 一層大なる, 一層強き; 更に多き, 増されたる. (副.) °m 甚はだ, 大に, 非常に.
 adhikara (男.) 官.
 adhipa (男.) 君, 王.
 adhiṣṭhāna (中.) 處, 市.
 adhunā (副.) 今.
 adhomukha (形.) (女.) i. 顔を下

方に向けたる.
 adhyāya (男.) (書物の) 章.
 adhvan (男.) 路.
 adhvāra (男.) 供養.
 anaḍuh (男.) (100) 去勢したる牛, 犍牛, 牡牛.
 anantaram (副.) 直接に, 直に; (合.) の次後に.
 anaparādin (形.) 何人をも惱まさざる, 或何人をも惱ましたることなき; 罪のなき.
 anartha (男.) 不幸, 災禍, 損害.
 anarha (形.) 値なき, 相應せざる, 不適當なる.
 anala (男.) 火.
 analamkṛta (形.) 嚴られざる.
 anavadya (形.) 過失なき.
 anasūyaka (形.) (女.) °yikā 不平のなき; 喜べる.
 anāgata (中.) 未來.
 anāgatavat (形.) (女.) i 未來の爲にせる, 未來に關せる.
 anārata (形.) 息まざる, 常住なる. (副.) °m.
 anitya (形.) 無常なる; 消滅すべき.
 anindita (形.) 過失なき.
 anindya (形.) 過失なき.
 anu (男.) (yayāti と śarmiṣṭhā との子の名.)

anukūla (形.) 恩を施こす, 慈愛ある; 赤誠ある.
 anugraha (男.) 恩, 慈愛, 慈愍.
 auuttama (形.) 上なき, 最高の, 最勝の.
 anudaka (形.) 水なき.
 anudīnam (副.) 日々, 毎日.
 anubandha (男.) 執取, 主張, 固執, °ndham kṛ ... を主張す;
 anubhāva (男.) 威勢, 力.
 anuyoga (男.) 使命, 命令.
 anurāga (男.) 貪欲, 愛.
 anuvamśa (形.) 系統の, 系統に關せる.
 anūṣman (形.) 熱くなき, 涼かなる.
 anṛtikatva (中.) 不眞實なるべきこと, 虚妄なるべきこと.
 anta (男.) 末; antam gam ... を終る.
 antalipura (中.) 王城; 後宮.
 antaka (男.) 死; 死神.
 antakāla (男.) 死時, 臨終.
 antara (中.) 内; 中間, 時間; 際; atrāntale 此の時に, 此の際に; 差別; °re vṛt 二分す; 差異, deśant° 他の方; 不在, °reṇa (業.) なく.
 antika (中.) 近傍; °kāt 近傍より, 近傍に.

andha (形.) 盲ひたる.
 anna (中.) 食.
 anya (形.) (116). 他の; 'sunna-
 hani 一日 (あるひ).
 anyatama (形.) 多の中の随一.
 anyathā (副.) 異なりて、然らず
 んば、否らずして; nānya° 然ら
 ずんばあらず.
 anvaya (男.) 種姓、親屬.
 ap (女.) (94) 水.
 apakṛta (中.) 過失、違犯.
 apaṇḍita (形.) 無學の、無教育
 の、愚なる.
 apatya (中.) 兒、子孫.
 apamāna (男.) 無禮、輕蔑.
 apura (形.) 後方の、後時の; °re
 此に於て; 他の.
 aparādha (男.) 違犯、罪.
 api (副.) 亦、加之、假令; 雖ども;
 及び. (疑問代名詞の意義をし
 て不定なるしむ (119); 數詞若
 しくは此に類せる意義ある代
 名詞の後に在ときは) 一切、咸
 な.
 apūrva (形.) 未だ曾て有らざる、
 全く新らたなる、前代未聞の.
 apratima (形.) 比類なき.
 apriya (形.) 愛らしからざる、
 親しからざる.
 abandhu (形.) 親戚なき.

abdhi (男.) 海、大洋.
 abrahmaṇya (形.) 婆羅門を尊
 重せざる、無信心なる.
 abhāgya (中.) 不幸.
 abhikāma (形.) (...を[依]) 欲
 求する、望む.
 abhimukham (副.) の方向に於
 て、の方へ.
 abhiramya (形.) 喜こぼしき、快
 よき.
 abhiseka (男.) 灌頂.
 abhyantara (男.) 親縁の人.
 abhyāsa (男.) 近傍; °cara (及び)
 °stha (形.) 近傍に在る、近傍
 に住まる.
 amātya (男.) 輔相.
 amitra (男.) 敵.
 amu (adās を看よ).
 amṛta (形.) 不死の; (中.) 不死
 飲、甘露.
 ambara (中.) 衣服、衣裳.
 ambhas (中.) 水.
 ayam (idam を看よ).
 ayas (中.) 鐵.
 ayaskāntamaṇi (男.) 磁石.
 ayasmaya (形.) 鑛の、鐵の.
 ayāti (男.) (那臘沙 [naluṣa] の
 子の名).
 ayukta (形.) 不適當なる、不相
 應なる.

ayuta (中.) 萬.
 aye (感歎詞) 嗚呼.
 ayogya (形.) 不適當なる、不相
 應なる、(...に[屬]) 相應せ
 ざる.
 ayodhya (女.) (僑薩羅[kosala]國
 首府の名), Oudh (Andh).
 arakṣitr (作者名詞) 不護者.
 aranya (中.) 林.
 arka (男.) 日.
 arjita (過.) 利得されたる、得ら
 れたる、收得されたる.
 arjuna (男.) (樹の名. terminalia
 arjuna).
 arth 1.10. 欲望す.
 pra (或人に或ことを) 請ふ.
 artha (男.) 事件、事物、事務; 錢
 artham, arthāya, arthe
 の爲に、に由て.
 arthavat (形.) 富める.
 arthin (形.) (具. と俱に若しくは
 合成語の前分のとき) 希求す、
 欲望す; (或ひとに[具.] 或こ
 とを) 望む.
 ardita (過.) 惱まされたる、苦し
 められたる.
 ardha (形.) 半の; (中.) 半分.
 arh 1. 相當す; 可とす; 容す; 能
 す; 須ゆ.
 arha (形.) 至當なる、値ある、相

當なる.
 alakṣita (形.) 認められざる.
 alam (副.) (具. 又は絶對法と俱
 に) にて足る、を止めよ. (kr と
 俱に用ゐられたる例は kr の
 下を看よ).
 alpa (形.) 小さき、微なる、弱き、
 少なき.
 avajānā (女.) 侮蔑、輕凌.
 avanipati (男.) 君、王.
 avayava (男.) 肢.
 avasthā (女.) 位置.
 avijānat (形.) 知らざる、了解せ
 ざる.
 avidvat (形.) 知らざる、學ばざ
 る.
 avirodha (男.) 無害.
 avyayibhāva (男.) 不變語; 儉
 約、無費; 匱乏、貧窮.
 aś 9. 食ふ.
 aśakya (形.) 不可能なる、成就
 すべからざる.
 aśuci (形.) 不淨なる.
 aśosa (形.) 餘りなき; °kanīyas
 最も幼なき.
 aśru (中.) 涙.
 aśva (男.) 馬.
 aśvatara (男.) 騾; (女.) i 牝
 騾.
 aśvin (男.) (兩. 雙神の名).

as 2. (133) 有る; (爲. 又は屬.) 屬す.
 asatya (形.) 不真なる; (男.) 詐僞者.
 asatyavacana (中.) 妄語.
 asantoṣa (男.) 不満足.
 asamartha (形.) (...に依.) 堪へざる.
 asaṁbhāvyā (形.) 想像すべからざる, 遂ぐべからざる.
 asādhyā (形.) 果すべからざる.
 asi (男.) 劍.
 asukha (中.) 不樂; 痛, 愁.
 asura (男.) 鬼, 妖精.
 asau (adas を看よ.)
 asthāyin (男.) (女.) i 住まらざる, 常ならざる.
 asmadvidha (形.) 我等の類.
 ah (188) 言ふ, 曰ふ, pra+ 言ふ, 曰ふ.
 aham (中.) (90) 我.
 aham (mad を看よ.)
 ahi (男.) 蛇.
 aho (感歎詞) 嗚呼.

ā

ā (前置詞) より始めて; (從. と俱に) に至るまで.
 ākāra (男.) 形, 狀.
 ākāśa (男.) 虚空.

ākimcanya (中.) 無所有, 赤貧.
 āgama (男.) 着, 入場.
 āgamana (中.) 來, 着.
 ājñā (女.) 命, 使令.
 āṭopa (男.) 膨脹, 隆起.
 āḍambara (男.) 誼譚, 轟々.
 ādhyā (形.) (或ものに) 富む.
 ātman (男.) 魂, 心; 己, 自身, 第二の我. (數ば反應代名詞として用ゐらる. 其意義は) 自ら.
 ātmīya (形.) 自の, 己に屬せる.
 ātreya (男.) (婆莫提婆 [vāma-deva] の弟子の名).
 ādi (男.) 始; (形合. の尾に在るときは) 其及び其他, 等.
 ānana (中.) 口, 嘴; 面.
 ānanda (男.) 樂, 慶喜.
 ānaha (男.) 便秘.
 āp 5. 達す, 得. (過.) 相應せる, 頼るべき, 親しき.
 (求欲法 ips [210]) 望む, 求む, 希ふ.
 ava+ 達す, 得.
 pari+ 終る; (過.) 決定されたる, 卒へる; yadi paryāptam 汝卒へたるならば; (...[屬]) に裕なる, に充分なる, 足れる.
 pra+ 達す, 得, 奪ふ, 從へる. (過.) 達せられたる, 發見さ

れたる, 得られたる; 及べらる, 到達したる.
 anupra+ 及ぶ, 達す.
 sampra+ (過.) 來至したる.
 vi+ (過.) 取り入れたる, 所有されたる.
 āpad (女.) 不幸.
 ābharāṇa (中.) 莊飾.
 ābhā (女.) 光, 貌; (形合. の終に在るとき) 如く, 等しき.
 āyatana (中.) 處, 場, 坐.
 āyu (男.) (蛙王の名).
 āyudha (中.) 武器.
 āyusmat (形.) 壽を具せる, 健康の, 長壽の.
 āyus (中.) 壽.
 āraṇyaka (形.) 林に關せる, 林のことを論せる. °kaṁ parva (摩訶婆羅多 [mahābhārata] 第三卷の名).
 ārta (過.) 痛められたる, 惱まされたる.
 ārtarūpa (形.) 窘められたる, 痛められたる, 弱はらされたる.
 alāpa (男.) 談, 對話; °paṁ kṛ saha 對談す.
 āveśa (男.) 入ること.
 āśānkā (女.) 憂悞, 恐懼.
 āśā (女.) 豫期, 希望.
 āśu (形.) 速やかなる.

āśrama (男. 例外は中.) 行者の住處.
 āś (感歎詞) 嗚呼, 嗟.
 āś 2. (爲自.) (216) 坐はる, 止まる, 居る, 住ふ, 交通す.
 āpa+ (...[業.]) を敬ふ, に事ふ.
 āsaṁna (中.) 近傍.
 āśya (中.) 日.

i

i 2. (134) 往く; 來る.
 ati+ (atita を看よ).
 anu+ 追ふ, 搜索す, 探す; 識る. (過) 具へたる.
 samanu+ (過.) 具へたる.
 abhi+ (...[業.] 又は[依.]) へ往く, に來る.
 ā+ 到る, 來る, 達す.
 samā+ (...業.) に會ふ, に集まる, に到る.
 upa+ 到る, 往く; (過.) 具へたる.
 pari+ 旋り行く; (過.) 充されたる, 捕へられたる.
 palā+ 1. 逃る.
 ikṣvāku (男.) (Ayodhyā の最初の王の名. 複數) i° の末孫, i° の後裔.
 itara (形.) 他の或ひと, 他の人.
 iti (副.) 斯く, (思想, 直談, 或は章, の始又は終にありて 其全

部の意義を該攝す).

- dam (代.) (114) 此れ.
- ndu (男.) 月; ソーマ (soma)
- indra (男.) 君, 上首; (天王の名), 因陀羅 (Indra).
- indriya (中.) 感官, 感能.
- ndhana (中.) 薪.
- iva (副.) 如く, 等しく. (先だてる語を強む). apūrvamiva 決して未だ曾て有らざるもの.
- iṣ 4. (pra+ 役.) 遣はす, 送る.
- iṣ 6. (129, 11) 欲す; (過.) 欲されたる, 好まれたる.
- anu+ 探す, 希ふ.
- abhi+ (過.) 欲されたる, 適意の, 好ましき.
- iha (副.) 此處; 此の世にて, 此の下界にて.

I

- iṣṭ 1. (爲自.) 見る.
- āpa+ 豫期す.
- upa+ 注意せざる, 等閑にす.
- abhipra+ 見る, 認む.
- abhivi+ 看る.
- sam+ 觀る, 認む, 見る.
- ikṣana (中.) 眼.
- ips+ (āp を看よ).
- iṣyā (女.) 嫉.
- iśvara (男.) 支配者, 主; 君.

U

- ukta (vac [219, 1, 1] の過.) 言はれたる.
- ukti (女.) 談, 語.
- ugra (中.) 嚴.
- ucita (過.) 適當なる, 相應なる.
- uccais (副.) 高く, 上に; 高聲に.
- ucchriḥkhala (形.) 解縛されたる; 推測すべからざる, 隨意なる.
- utkaṅṭhā (女.) 眷戀, 欲望.
- uttama (形.) 最高の, 最上の, 最勝の.
- utpādana (中.) 發生.
- utpādin (形.) 起さるゝ, 生まるゝ.
- utsaṅga (男.) 腰.
- utsava (男.) 祭.
- utsāha (男.) 力, 精力.
- udaka (中.) 水.
- udae (形.) (82) (女. udici) 北の.
- udāra (及び) udārika (形.) 尙と; 勝れたる, 華麗なる. ram (副.) 寛仁なる.
- uddeśa (男.) 方, 場.
- udreka (男.) 饒多; dhanod' (男.) 大富.
- udvaha (男.) 結婚; 後人, 子.
- udvāha (男.) 結婚, 嫁娶.
- upacāra (男.) 療治.
- upadeśa (男.) 論, 教示, 訓諭.

- upabhoga (男.) 受用.
- upādhyāya (男.) 教師.
- upāya (男.) 方便.
- upāyana (中.) 晉物, 供物.
- upekṣitavya (形.) 注意すべからざる, 等閑にせらるべき.
- ubha (形.) (兩數) 兩.
- urvarita (形.) 餘りたる.
- uśanas (男.) (鬼神の教師の名, 水星を人に擬したるもの).

ū

- ūśara (男. 中.) 鹹鹵不穰の川.

r

- r (129, 11) sam+ 役. (206) 委す.
- rte (前置詞.) (...の [業]) 外, (...を [業]) 除て.
- rṣi (男.) 仙, Rṣi.

e

- eka (數.) 一; 單; 他なき; 唯一の; 或一の; 多數中の隨一の, 同類中の一の.
- ekadā (副.) 一時, 曾て.
- ekadr̥ṣṭi (女.) 凝視.
- ekadeśa (男.) 同處.
- ekarūpatā (女.) 等形性, 不變性.
- ekavastra (形.) 唯だ一衣を被たる.

- ekākin (形.) (女.) i 單の, 孤獨の.
- ekaikaśya (中.) 次第性; śyena 順次に.
- etal (代.) (114) 此れ, 其れ.
- enad (代.) (116) 彼れ.
- enas (中.) 罪.
- eva (副.) 實に, 正に, 唯だ, 已に. (次前の語を強むる用をなす).
- evamvādin (形.) 是の如く語る.
- evamvidha (形.) 是の類の, 是の如き.
- evamgata (形.) 是の如き状態の; 'te 'pi 是の如き状態にありと雖ども.
- evam (副.) 然様に, 是の如く.

ai

- aiśvarya (中.) 自在位.

au

- aupārya (中.) 卓越性.
- ausadha (中.) 藥劑, 藥物.

ka

- ka (kim を看よ).
- kakuddrama (男.) (固有名詞).
- kañcukin (男.) 宮内官.
- kañṭaka (男.) 棘.
- katham (副.) 何, 夫は如何なる所以なりや. katham cid 所有手段を盡して, 盡力して.

kathaya- (名稱的動詞) 話す, 報
らす, 告ぐ, 名ざす, 曰ふ.
kathā (女) 對談, 對話, 說述. ka-
thāh kṛ 對話す.
kadā (副) 何時. kadā cid 曾て,
一日; 恐くは.
kauīyas (形) 更に幼なき.
kanyakā (女) 處女, 少婦; 嬢.
kanyā (女) 處女, 少婦; 嬢.
kapotā (男) 鴿.
kam (役: 爲自) (...[業])を愛す
る, 欲樂に耽る.
kamala (中) 蓮華; (女) ˚lā (落吃
澁弭 [lakṣmī] 即ち幸福と美
の女神, 所謂吉祥天女の號).
kaṇṇa (中) 爲, 作, 成.
kaṇṇīya (形) 作されべき, 爲さ
れべき.
kareṇukā (女) 牝象.
karkatā (男) 蟹.
karnaya- (名稱的動詞) ā+ 聽く.
kartavya (形) 作されべき, 爲さ
れべき.
karpūra (男, 中) 樟腦.
karmakara (形) 給事す; (男) 勞
働者, 僕使, 手工.
karman (中) 業, 工, 事業, 作, 作
業, 活動, 職業.
kala (形) 不明了の, 不可解の.
kalāṅkin (形) (女) i 汚れたる;

汚す, 辱かしむる.
kalaśa (男) 瓶, 甌.
kalita (過) 壞られたる.
kalya (中) 曙, 晨朝.
kalyāṇa (形) (女) i 宜しき, 巧
なる; 妙なる; (中) 祭, 愉快.
kavi (男) 詩人.
kavitā (女) 作詩法.
kaṣṭha (形) 拙なき, 悪しき; (中)
苦痛, 艱難, 害惡. aho kaṣṭam
嗟痛ましきかな, 嗟災なるか
な.
kastūrikā (女) 麝香.
kānana (中) 林.
kānta (過) 愛されたる; (男) 所
愛者.
kāma (男) 志望, 意樂, 要求; 欲
慾, 愛; 愛の神, kāma.
kāmarūpa (中) 随意の形.
kāya (男) 身, 體.
kāraṇa (中) 根本, 因.
kārya (中) 用事, 作業. ˚m (彼は
[屬] ...を[具])作さるるを
得ず, (彼は...と[具])共に作
さるるを得ず.
kāryavat (形) 作業ある.
kāla (男) 時; lam nī 時を過ご
す.
kalāgni (男) 末期の火(世界の終
に一切を燒盡する火).

kāvya (男) (uśanas 或は śukra
の從父名 [patronymic]).
kāś 1. (爲自. 史詩にては爲他. の
ときあり) pra+ 現はる, 顯
はる, 示す.
kaṣṭha (中) 木, 材木.
kim (代) (116) 誰ぞ; kasyāsi 汝
は誰の(妻或は女)なりや. kim
(具. と俱に)...を以て何とか
せん, ...は何の爲なりや,
...は何の要あらん. 或
ひと; (必らず次に api, cana,
eid. [119] の來るものとす);
(否定詞と俱に) 一人もなし.
kasya eitkālasya 若干時を
經て. (副) 何の爲に, 何ゆへ
に; kim tu 併ら, 然れど; (否定
詞又は否定文の後に)のみな
らず. kim punar 況んや....
あらんや. kim vā 或は然らず
して...か, 或は...か. kim
vā kim, 然るか或は然ら
ずして...か. kasmat 何の爲
に, 何ゆへに.
kiyaumātra (形) 殆んど無意味
の, 影響を及ぼさる.
kirīṭa (中) 冕.
kila (副) 實に, 確に, 斯く: 傳へ
説く.
kilbiṣa (中) 債, 罪.

kiṭikā (女) 蟲.
kidṛś (形) 云何なる質の, 云何
なる類の.
kīrti (女) 譽.
kila (男) 櫛.
kuṅṣi (男) 胎.
kuṅṭala (中) 耳, 璫.
kup 4. (過) (...を[屬]) 怒り
て, 忿りて.
pra+ (役) 怒る.
kumāra (男) 童子.
kuru (男) (或民族又は其君の
名).
kula (中) 姓, 族.
kṛ 8. (15±) 作す, 爲す; 行ふ.
(役) 爲さしむ.
adhi+ (過) 任命されたる;
(男) 吏.
apa+ (...を[屬]) 犯す.
(過) ˚krta (中) 違犯.
alam+ 飾る.
vi+ (...を[依]) 犯す, 詈し
る, 蔑にす.
kṛcchra (中) 苦痛, 艱難.
kṛt 6. (129, 16) 切る.
vi+ (役. 過) ˚kartita 肉を
傷られたる, 搔むしられた
る.
kṛtakārya (形) 目的を達した
る.

kṛtānta (男.) 運命; 死神, (閻魔 [yama] の號).
 kṛti (男.) (那臘沙 [naruṣa] の子の名).
 kṛte (kṛta [中.] の依.) (...に [屬.] 由て.
 kṛtyā (女.) 妖術.
 kṛtsna (形.) 全き, 完き.
 kṛpaṇa (形.) 貧しき, 艱難なる, 苦痛ある; 吝さかなる. (男.) 吝嗇者. (中.) 艱難, 苦痛, 不幸.
 kṛśa (形.) 枯槁したる, 瘦せたる.
 kṛṣṇavartman (男.) 火.
 kṛ 6. (219, 18) samā + (過.) °kīr-
 ṇa (129, II, 1) 充されたる, 覆はれたる.
 kṛp 1. (爲自.) 調ふ.
 ava + (役.) 調へる, 準備す.
 upa + (役.) 調へる, 調度する; 取り寄す.
 kevala (形.) 單の. °m (副.) 唯だ.
 keśa (男.) 頭髮.
 kopa (男.) 怒.
 kautūhara (中.) 好奇心.
 kaulika (男.) 織師.
 kaustubha (男.) (毗瑟紐 [Viṣṇu] の胸に懸れる寶玉).
 kram 1. (129, 12) 歩む. (増上法)
 camkramya- (212) 經行す.
 ā + (過.) °krānta 攻撃されたる.

nis + 出で去る, 降る.
 pari + 旋り行く.
 sam + (役.) 昇らす.
 kriyā (女.) 完成, 業, 作, 作業, 装置; 事業.
 kṛid 1. 遊ぶ, 戯る, 滑稽を爲す.
 kṛudh 4. 忿を發す, 忿る. (過.)
 kṛuddha 忿れる. sam + (過.) °kṛuddha 忿れる.
 krodha (男.) 忿.
 kleśa (男.) 煩, 惱, 苦, 痛.
 kva (副.) 何處. (api, cana, cid と俱に) 或る處, 或る時. na kva cid 到處に無し, 決して無し.
 kṣaṇa (男.) 瞬時. kṣaṇenāpi 一瞬時に; kṣaṇāt (及び) tatksaṇāt 一瞬時の後, 直に.
 kṣatra (中.) 君主の位, 士位. (第二姓).
 kṣatriya (男.) 士, 第二姓に屬する人, 刹帝利 (kṣatriya).
 kṣam 1. 忍ぶ; 甘受す, 容す.
 kṣama (形.) 忍耐なる; 相應せる, 適當せる, 正しき, 愛らしき. (女.) kṣamā 忍辱, 忍耐, 堪忍.
 kṣaya (男.) 盡, 端.
 kṣāma (形.) 渴したる, 枯れたる, 瘦せ衰へたる.
 kṣi 5. 滅す, 毀つ. (過.) kṣīna 盡き

たる, 消失したる; 薄き, 少な
 pra + (受.) 亡ぶ, 斃る. (過.) °kṣīna 毀れたる, 滅ぼされたる, 消へたる.
 kṣitīsa (男.) 支配者, 王, 君.
 kṣip 6. 投ぐ.
 samud + 擧ぐ.
 ni + 投げ棄つ.
 vini + 散らす, 離散せしむ.
 pra + 投げ棄つ. (有人に或ことを) 提出す.
 kṣipra (形.) 速やかなる. °m (副.)
 kṣīrabdhi (男.) 乳海.
 kṣudra (形.) 庸劣なる; 通常なる.
 kṣudh (女.) 餓.
 kṣudhā (女.) 餓.
 kṣepa (男.) 投擲; 猶豫, 延期.
 kṣaudra (中.) 蜜.
 kṣaura (中.) 剃鬚; °raṇ kṛ 鬚を剃る, 己の鬚を剃る.
 kṣaurakarapa (中.) 剃鬚.

kha

khaṭvā (女.) 臥床.
 khaḍga (男.) 劍.
 khaṇḍa (中.) 片, 段, 分, 品, 聚.
 khaṇḍana (中.) 負傷, 傷害.
 khaṇḍaya- (名稱的動詞.) 解散す, 亡ぼす; 傷害す, 傷つける.

khaṇḍasas (副.) 片々, 毎片; °sala kṛ 寸斷す.
 khadyota (男.) 螢.
 khara (男.) 驢.
 khyā 2. 名づく.
 ā + 告ぐ, 名ざす, 報らす, 曰ふ.
 pratyā + 斥ぞく, 拒む.
 vi + (役.) 知らす, 廣告す.

ga

gagana (中.) 虚空.
 gaṅgā (女.) 殑伽, Ganges.
 gaṇa (男.) 衆, 群.
 gata (gam の過.) 往ひたる, 過ぎ去りたる; 中に在る.
 gatādhvan (形.) 路を行ひたる; 老たる.
 gatāyus (形.) 死したる.
 gati (女.) 道, 路; 趣, 所至; 存在; 容有性.
 gadā (女.) 杵.
 gam 1. (129, 11) 往く, 過ぐ, 經過す. (過. は別に出す.)
 adhi + 探る, 搜がす.
 anu + 追ひ往く, 追ひ來る.
 abhi + 向つて去る.
 ā + 此方へ來る, 至る.
 upa + 向つて去る; (pañcat-vam と俱に) 死ぬ.

nis+ 出で行く.
 vinis+ 出で行く.
 prati+ 還り去る, 戻る.
 vi+ 離れ去る; 消ゆ, 飛び去る.
 sam+ 會合す; 連絡す; 婦人と同棲す.
 upasam+ 向つて去る.
 garala (中.) 毒.
 garuḍa (男.) 揭路荼 (Garuḍa), (毗瑟紐 [Viṣṇu] の乗る動物).
 garutmat (男.) 鳥; (揭路荼 [Garuḍa]).
 gardabha (男.) 驢.
 garbha (男.) 胎, 兒, 稚兒.
 gala (男.) 咽喉, 頸.
 gahana (形.) 稠げき, 通過すべからざる. (中.) 密林, 稠林.
 gā 3. 往く, 來る; (或ることを [業.] 共にす).
 gātra (中.) 肢.
 gāndharva (形.) 健鬪婆 (gāndharva) に固有なる; g° vivāha 自由結婚.
 gāh 1. (爲自.) 入浴す, 入り去る.
 vi+ 入浴す, 沐浴す, 入り去る.
 gir (女.) 語, 聲.
 giri (男.) 山.
 gīta (中.) 歌.
 guṇa (男.) 本性; 利, 勝, 德, 益.
 guṇavat (形.) 具德の, 殊勝なる,

超出したる.
 guṇin (形.) 勝利を有せる, 德を有せる.
 gupta (過.) 覆はれたる, 埋もれたる. (副.) °m.
 guru (形.) 重き. (男.) 師.
 gūḍha (guh [129, 12] の過.) 覆はれたる, 埋もれたる, 見難き.
 gr̥ (jāgr̥ を看よ).
 gr̥ha (男. 中.) 家; °Karman 家業.
 gr̥hastha (男.) 己の家政をとる己婚の婆羅門, 家主.
 gai 1. (127) 謠ふ.
 go (男.) 牡牛; (女.) 牝牛.
 gopa (男.) 牧牛者.
 grah 9. (157. 158. 168. 191. 192. 200. 210. 219, 1. 221. 222. 223.) 攫む, 包む, 把る; 捉る, 捕へる, 從へる, 克つ, 得, 受く; 買ふ; 掬ふ.
 anu+ 恵む, 利益す.
 prati+ 受く, 受取る, 所有す; 得て妻とす.
 sam+ 攫む, 手に取る.
 graha (男.) 攫, 包, 執; 滿匙 (神に液體を献ずるとき); 把持者 (遊星, 鬼神を云ふ).
 grahana (中.) 受, 領收.
 grāhya (形.) 認めらるべき, 參照さるべき.

gha

ghaṭ 1. (爲自. 役. 爲他.) 完成す.
 ghaṭa (男.) 瓶.
 ghuṭ 1. 6. ava+ (役.) 輒らかにす, 綿を入れて膨らす.
 ghora (形.) 恐ろしき, 畏るべき, 暴威の.

ca

ca (接續詞) 及び, 又; 併ながら.
 cakra (中.) 輪; 投環.
 cakṣ 2. (爲自.) (52) 視る.
 ā+ 告ぐ, 言ふ, 名ざす, 話す.
 cakṣus (中.) 眼; 瞥見.
 caṇḍarava (男.) (野干の名).
 catur (數.) (196) 四.
 catura (形.) 愛らしき, 殊妙なる.
 caturtha (數.) 第四.
 caturdhā (副.) 四分に, 四分に於て, 四重に. ca° vah 裂て四分となす.
 caturbhujā (形.) 四臂ある.
 caturvīṃśati (女.) 二十四.
 catuḥśāla (形.) 四堂を具へたる, 四房を具へたる.
 cana (不變辭). (疑問詞の意義をして不定ならしむ) (119).
 candra (男.) 月. caṇḍārdhacū- (āmaṇi (男.) 半月の髻珠を有

せる人, (śiva の一稱).
 capala (形.) 動き易き, 固定せざる, 遷り易き. (男.) 水銀.
 car 1. 往く, 行く; 遯ぶ, 完うす, 了ふ, 爲す, 作す, 證明す.
 anu+ 追ふ; 了ふ.
 upa+ (役.) (...にて [具.] 治療す).
 pari+ 逍遙す; 侍す, 事ふ, 看護す.
 vi+ (役.) 伺察す, 考慮す.
 sam+ (役.) (屬.) (...に [屬.] 交付す).
 cara (形) 往く, 行く, 持續せる.
 cal 1. 搖れる, 撼へる; 運動す, 往く.
 cala (形.) 運動する, 動き易き; 固定せざる, 滅し易き, 遷り易き.
 calana (中.) 動搖, 前後上下動.
 cāpa (男. 中.) 弓.
 cāraṇa (男.) 遊行する俳優.
 ci 5. 重ね; 集む.
 ava+ 摘む.
 nis+ 確定す, 集合す, 決斷す.
 vi+ 穿鑿す, 探索す.
 cikitsaka (男.) 醫士.
 citta (中.) 志, 心, 情; 思想.
 citra (形.) 雜色の, 斑らなる; 飾られたる. °rūpa (羽等にて) 斑らなる, 飾られたる.

cid (不變辭). (疑問詞の意義をし
て不定ならしむ)(119).
cint (1.) 10. 思ふ.
vi+ 考慮す, 沈思す.
cintā (女.) 思想, 思惟, 憂慮.
cira (形.) (時の) 長き, 永續せる.
cirāt 長き時を経て, 終に.
(副.) °m.
cirakālam (副.) 長時に, 長く.
ciraja (形.) 老たる.
cihua (中.) 記, 相.
cilmita (過.) 記されたる, 標さ
れたる, 顯はされたる.
cud(1.) (役.) 推す; 要求す, 逼まる.
cūlāmaṇi (男.) (武士の名).
cetas (中.) 感, 心.
ced (接續詞). ならば; no ced 然
らずんば, 然らざるときには,
反對のときに, 其の他.
ceṣṭita (中.) 舉動, 動作, 行狀.
cyavana (男.) (仙人の名).

cha

chatra (中.) 蓋(君主の標幟).
chandasa (中.) 頌法.
chāndasa (形.) 吠陀の.
chāyā (女.) 蔭.

ja

jagat (中.) 世界.

jan 4. (爲自.) (129, 14). 生まる
ゝ, 發生す. (過.) jāta (219, 1,
7). (...より[依.]) 生れたる;
(...に由つて[具. 又は從.]生
れたる; 轉じたる, 發生したる,
臨みたる, 存在する, 起りたる.
upa+ 發生す; 在る; (...を
[爲.]資く.
vi+ 生む.
sam+ 生まるゝ; 發生す, 現
はる; 轉ず. (過.) °jāta.
jama (男.) 所造物, 人間, 人; 民
族, 人民, 臣民. (合成語の尾に
ありて數しば多數の總名に用
ゐらるゝことあり).
janani (女.) 母.
janman (中.) 生.
jaya (男.) 勝; 克勝, 征服.
jāyā (女.) 齡.
janjārita (形.) 衰へたる, 枯槁し
たる, 弱き, 脆き.
jala (中.) 水.
jalankas (女.) 蛭.
java (男.) 急劇, 速度.
jali han の二. 單命. 爲他. (142).
jāgr. (212 備考). 覺む.
jāta (jan の過.)
jāta (副.) 到底; (na と共に) 到
底然らず, 全く然らず, 決して
斯ることなし, 決して然らず.

jānu (中.) 膝.
jāmātr. (男.) 婿.
ji 1. 勝つ, 從へる.
vi+ 從へる, 征服す.
jigāṃṣa— (han の求欲法 [210]).
jihvā (女.) 舌.
jiv 1. 活く.
ā+ (...にて[業.] 活く, ..
..より利を得.
jivaloka (男.) 生物世界; 人類.
jivita (中.) 命.
jī 4. (44) 老ふ.
jñā (9) (157) 知る, 承知す; 識る,
經驗す. jñātam (副.) 知りて.
anu+ (役.) (...より[業.]
退ぞく.
samanu+ 可とす, 賛成す, 許
す.
abhi+ 認む; (...なりと
[°vat]) 謂ふ.
ā+ 經驗す, 聞く. (役.) (205)
命令す.
pari+ 確知す, 知る.
prati+ 覺る, 悟る.
vi+ 覺る, 注意す, 知る, 承
知す.
jñāna (中.) 知, 承知.
jyestha (形.) 最勝の, 最善の;
最長年の.
jval 1. abhi+ 輝く.

da

ḍamb 1. 10. vi+ 嘲る; 詐る, 欺
く.

ta

ta (tad を看よ).
takra (中.) 水を混和したる精
乳.
tad (役.) 撃つ, 撲ち倒す.
tatas (副.) 其處より, 此の方に;
其處に; 其の方に; 此に於て,
然るときに; 夫ゆへに.
tattva (中.) 眞實.
tatra (副.) 其處に; 其處の方に;
然るときに.
tathā (副.) 如く, 正に然かく; 實
に然り, 可なり. tathāpi 關せ
ず; tathā...yathā 此も亦..
..の如く; yathā...tathā..
..の如く此も亦實に; ...の
如く此も亦.
tathāgata (形.) 斯かる状態にあ
る.
tathāvidha (形.) 此類の, 此方法
の.
tad (代.) (113) 其, 彼. (數しば第
二人稱代名詞と俱に [sā tvam
此處なる汝] 又は冠詞として
用ゐらる).

(副.) 其處; 今, 然るとき;
 其の方に; 其の理にて, 夫ゆへ
 に. tena 其に由て, 斯くして,
 其の結果として, 夫ゆへに. ta-
 smāt 夫ゆへに, 其の理にて.
 tadavastha (形.) 此の状態にあ
 る.
 tadā (副.) 爾の時, 其處にて, 然
 る時, 此の時に際して.
 tadānim (副.) 爾の時, 然る時.
 tanaya (男.) 子; (女.) ā 女.
 tanu (女.) 軀, 身.
 tanmanaska (形.) 意を其處に用
 ゐて, 其を思惟して.
 tap 1. 4. 苦行す.
 tapas (中.) 苦行; tapastap 苦行
 を修す.
 tapasvin (男.) 苦行者.
 taponitya (形.) 常に苦行を修す.
 tamāla (男.) (最も黧黒なる皮を
 有せる樹の名. Xanthochy-
 mus pictorius).
 taruṇa (形.) 幼かき; (女.) ī 少婦.
 tarhi (副.) 其際に, 然るときに.
 tala (男. 中.) 平面, 平坦處.
 tāta (男.) 父.
 tāpasa (男.) 苦行者.
 tāmbūla (中.) 檳榔樹葉.
 tāmbūlādhikāra (男.) 檳榔樹葉
 を持して扈從する役.

tāra (形.) 透徹する, 高聲の, 鋭
 多く響く.
 tāvat (形.) 然様に大なる, 然様
 に多き. (副.) 然様に甚はだし
 き, 然様に多き; 然様に長く, 爾
 る間, 暫時. (命令法の後に用
 られたるときは) 初に, 且ら
 く. yāvat... tāvat... ならば
 爾の時に.
 tigma (形.) 鋭とき, 尖りたる;
 °tejas (形.) 鋭とき尖を有せる.
 tila (男.) 胡麻子; 小片.
 °śas (副.) 小片に.
 tiśtha— (sthā を看よ.)
 tīkṣṇa (形.) 鋭とき, 尖りたる.
 tīra (中.) 岸.
 tīrtha (男.) 浴場, 巡禮場.
 tīvra (形.) 鋭とき; 劇しき, 強き
 tu (副.) 併ら.
 tud 6. vi+ 刺す, 鞭うつ, 打つ.
 turvasu (男.) (yayāti と deva-
 yāni との子の名).
 tulya (形.) (或ひとに[具.] 等し
 き; 同類の, 同じ貌の.
 tuṣ 4 満足す. (役.) 満足せしむ.
 tuṣṭi (女.) 満足; tuṣṭim vidhā
 満足す.
 tūrṇa (過.) 速やかなる.
 tūṣṭim (副.) 静かに, 黙して.
 tṛṇa (中.) 草.

trp4. (過.) trpta (...に[依.] 飽
 されたる, (...に[依.] 飽たる.
 sam+ (役.) 飽かす, 満足さす,
 悦こばす.
 trṣ (女.) 渴; 貪愛.
 trṣṇā (女.) 渴; 貪愛.
 tr 1. 越す.
 ava+ 降り来る, 降り往く;
 身を化作す. (過.) °tirṇa.
 ud+ 昇り来る; 逃る; 度る.
 tejas (中.) 鋭, 利, 尖端; 鋭とき
 こと, 力, 精; 威, 勢.
 tyaj 1. 捨つ; 放つ, 棄つ, 胃す,
 廢す. (受.) (...を[具.] 離る,
 (...より[具.] 自在を得.
 sam+ 放つ, 棄つ.
 tyāga (男.) 捨施.
 tyāgavat (形.) 能く捨施する.
 trapā (女.) 羞.
 traya (中.) 三, 三數.
 trayaviṃśati (女.) 二十三.
 tras 1. 怖る.
 sam+ (過.) 驚ひたる.
 trā (trai を看よ).
 tri (數.) (106) 三.
 tridaśa (男.) 神.
 trai 1. 守護す, 保護す, 救ふ.
 trailokya (中.) 三世界 (天, 地
 上, 地下).
 tvattas (tvad [58 の備考] の從.)

tvad (111) (第二人称代名詞の
 語幹); 汝.
 tvādrśa (形.) 汝に似たる, 汝に
 等しき.

da

damś 1. (129, 17) 咬む, 刺す.
 sam+ 齒にて執ふ, 咬む.
 damṣṭrā (女.) 犬齒, 牙.
 dakṣiṇapūrva (形.) 東南の.
 dakṣiṇāpatha (男.) 南方の地,
 Dekhan.
 danta (男.) 齒.
 dambha (男.) 詐僞.
 daridra (形.) 貧しき.
 dardura (男.) 蛙.
 darpa (男.) 僞逸, 貢高心.
 darśana (中.) 見, 瞻親; 訪問;
 外貌; °nam dā 容貌を示す, 現
 はる.
 darśaniya (形.) 見られべき; 威
 容ある, 美しき.
 dala (男.) (parikṣit の子の名).
 daśan (數.) 十.
 daśana (男.) 齒.
 dśama (數.) 第十.
 daśayojana (形.) 長さ十踰繕那
 ある.
 daśavarṣa (形.) 十歳の.
 dā 3. (147. 161. 171. 183. 205. 21

9, 1, 9. 223.) 施こす, 興へる; 嫁せしむ; 作す, 整理す, 遂ぐ. (過.) datta.
 ā+ 取る, 容る, 受く; 除く, 去る, 省く. ādāya (....と [業.] 俱に.
 vyā+ (過.) vyāta (219, 1, 9.) 開かれたる.
 pra+ 施こす, 交付す, 支拂ふ, 貸す.
 prati+ 返濟す.
 dāna (中.) 施, 惠施; 施物.
 dānta (過.) 馴されたる, 馴れたる; 柔和なる.
 dāra (男.) (複.) 已婚婦人, 婦人.
 dāridrya (中.) 貧窮.
 dāru (中.) 木.
 dārumaya (形.) 木より成れる, 木の.
 dāsa (男.) 僕使. (女.) i.
 dina (中.) 日; dine dine 日々, 毎日;
 dināddinam (副.) 日より日に互りて.
 div (女.) (95) 天.
 divasa (男.) 日.
 divya (形.) 天の, 神の; 天上にて見る如く美はしき, 莊麗なる.
 diś 6. 示す.
 ā+ 指す, 命す.

samā+ 命す.
 upa+ (過.) °diṣṭa 命せられたる.
 nis+ 記載す, 審かにす.
 prati+ 指す, 委任す, 就かしむ. (pratyathādiśat は史詩特別の使用法にして atha pratyadiśat に同じ.)
 sam+ 訓示す, 説示す, 教誡す
 diś (女.) 天空の方處, 方.
 diṣṭa (中.) 運命.
 diṣṭyā (diṣṭi の具.) 天なるかな, 幸なるかな.
 diḥ 2. 塗る, 糊塗す. (過.) digdha.
 dina (形.) 悲しき, 哀れなる.
 dirgha (形.) 長き. °sya kālasya 長き時を経て.
 du 5. 燃す, 惱ます, 苦します.
 duḥkha (中.) 苦, 痛.
 duḥkhita (形.) 愁しき, 悲しき.
 duratikrama (形.) 從へ難さ.
 durātman (形.) 悪しき. (男) 悪人.
 durgrāhya (形.) 捉へ難き, 持ち難き.
 durjana (男.) 悪しき人, 兇漢.
 durduha (形.) 乳を搾らしむるを難しとせる.
 durdharṣa (形.) 敵し難き, 近づき難き, 危険なる.

durbhikṣa (中.) 饑饉.
 durmati (形.) 愚かなる, 癡なる, 無知の.
 durlabha (形.) 得難き, 有り難き, 稀の.
 durvicāraṇa (形.) 考究し難き, 伺察し難き.
 duṣkara (形.) 作し難き, 完うし難き.
 duṣṭa (形.) 敵の, 悪意の, 不良の, 悪しき.
 duṣṭyaḥ (形.) 捨き難き, 癢め難き.
 duḥsparśa (形.) 觸れ難き, 捉へ難き.
 duhitṛ (女.) 女. 嬢.
 dūra (形.) 廣き, 遙かなる. (副.) °m.
 dṛ. 6. (爲自.) ā+ (129, 18) 劬勞す.
 dṛś (129 備考) 見る. (過.) dṛṣṭa 見られたる, 認められたる; 居る, 存す, 有る; 定まりたる, 固き, 至當なる. (役.) 見せしむ, 顯はす, atmānam dṛś (役.) 己を顯はす, 現はる; 教ゆ.
 dṛṣṭa (dṛś の過.)
 dṛṣṭi (女.) 視, 眼; 瞻視; 了解; 見解.
 edya (形.) (221) 施こされべき.

deva (男.) 神, 王, (女.) devī 后, 女王; 王女.
 devagarbha (男.) 神兒.
 devatā (女.) 神; 神像.
 devayāni (女.) (uśanas の女にして yayāti の配偶の名).
 devarāj (男.) 神王.
 devarāja (男.) 神王.
 devasuta (男.) 神兒, 神子.
 devāyatana (中.) 神殿.
 devendra (男.) 神の君.
 deśa (男.) 方, 處, 場.
 deha (男.) 體.
 delin (男.) 生物, 人.
 daiva (中.) 天命, 運.
 daivata (中.) 神.
 doṣa (男.) 過, 失, 罪, 責.
 dauḥśīlya (中.) 悪しき性質, 悪性.
 dyuti (女.) 輝, 美麗, 値.
 draviṇa (中.) 財産, 富.
 draviṇavat (形.) 財産を有せる, 富める.
 dru 1. 走る, 迅く動く.
 samabhi+ 走り來る, 急ぎ來る.
 upa+ (....に [業.] 急ぎ往く, を襲ふ.
 druta (過.) 速やかなる. (副.) °m.
 druhyu (男.) (yayāti と sarmiṣṭhā との子の名).

dva (dvi を看よ).
 dvaya (中.) 偶.
 dvār (女.) (及び) (中.) 戸, 門.
 dvārapālakatva (中.) 門衛の役.
 dvāvimsāti (女.) 二十二.
 dvi (數.) (106) 二.
 dvigu (形.) 二の牛を所有せる.
 dvija (形.) 再び生れたる; (男.)
 婆羅門.
 dvipin (男.) 豹.

dha

dhana (中.) 錢, 富.
 dhanin (形.) 富める.
 dhanya (形.) 幸福なる.
 dhara 持てる, 有せる.
 dharitri (女.) 地, 土地.
 dharma (男.) 務, 德; 敬虔; 秩序; 制, 正理, 法.
 dhā 3. (147. 161. 171. 210. 219, I, 5. 223.) 置く, 安置す.
 abhi+ 言ふ, 語る; (或ひとに) 語る. (過.) hita.
 ā+ 彼方に置く; (...に [依.] 向ける.
 ni+ 彼方に置く.
 sampranī+ 下に置く; 看過す.
 pi+ (過.) pihita (其語を看す.)
 vi+ 造る, 完成す. 起す, 爲す, 調へる, 處理す.

śrad+ 信す.
 sam+ 集む; (或ものに [爲. 或は屬.] 對して弓に箭を) 加ふ.
 dhārin (形.) 持する.
 dhāv 1. 走る.
 anu+ 追ひ走る, 追ひ馳す, 追ひ行く.
 pari+ (役.) 圍む, 包む.
 dhāvana (中.) 磨擦, 研磨, 雕琢.
 dhimat (形.) 聰とき, 伶俐なる, 賢こき.
 dhṛ 10. (及び役.) 持つ; 定む, 與ふ, 向ける.
 ava+ 識る, 研究す.
 sam+ 斥ぞく, 停む, 抑制す.
 dhṛtātman (形.) (...に [依.] 意を向けたる人の, (...に [依.] 思想を向けたる人の.
 dhyāna (中.) 熟考, 熟慮.
 dhyaī 1. 考ふ, 熟考す.
 ā+ 考慮す.
 dhruva (形.) 牢き; 動かすべからざる; 確かなる, 眞實の.

na

na (副.) 不; (例外の際には命令法るとき mā の代に用ゐることあり). na hi 否な然らず, 全く然らず.

nakha (中.) 爪.
 nagara (中.) 城, 市.
 naṭa (男.) 俳優.
 nad 1. (役.) 響かす, 遍ねく喚聲を聞かしむ.
 nabhas (中.) 天空.
 nam 1. 身を屈す.
 pra+ (...の [業.] 前に屈む. 屈む.
 namas (中.) 歸敬, 敬禮.
 nayana (中.) 眼.
 nartaka (男.) 舞踏者.
 narendra (男.) 主, 君, 王.
 nareśvara (男.) 主, 君, 王.
 nava (形.) 新なる.
 naś 4. 盡く, 滅す, 消ゆ.
 nah 4. (54 備考 2) sam+ (過.) naddha 武裝したる.
 nahuṣa (男.) (君主の名).
 nāga (男.) 象. danta 象の齒; 木釘 (壁より出せるものにして物を懸るに用ゐる.)
 nānā (副.) 種々の方法にて, 種々異なりて.
 nānādeśa (男.) 異なりたる土地, 異なりたる地方.
 nānāprakāra (形.) 異なる類の.
 nāpita (男.) 理髮師.
 nāman (中.) 名; nāma kṛ (或人に [屬.] 名を與ふ. (副.) nāma

名を以て; 確かに, 疑ひなく, 即ち, 正に.
 nārāyaṇa (男.) 那羅延 (毗瑟紐 [viṣṇu]).
 nārī (女.) 婦人.
 nāśa (男.) 沒, 滅.
 nāsatya (男.) (兩.) (アシュボン [aśvin] の號).
 nija (形.) 生來の, 固有の. (數しば相當せる所有格の代名詞を以て譯せらる).
 nitya (形.) 固有なる, 常の; 續て (或ことに [合成語] 専らなる. (副.) °m 常に, 續て, 常時.
 nidhana (中.) 死; °m i 死す.
 nidhāna (中.) 寶.
 nidhi (男.) 寶.
 nibhṛta (過.) 静かなる; 認められざる, 隠れたる. (副.) °m.
 nimba (男.) (苦き果實を有せる樹の名 [azadirachta indica]).
 niyata (過.) 確定されたる, 定まりたる, 確かなる.
 niyama (男.) 制限; 規律, 法則; 服事; 修行; 禁戒.
 nirarthaka (形.) 益なき, 益とならざる, 目的に適はざる.
 nirārambha (形.) 企圖することなき, 疎懶の.
 nirguṇa (形.) 德なき, 惡しき, 下

劣なる。
 nirdaya (形.) 同情なき, 憐れま
 ざる, 悲心なき. (副.) °m.
 nirdvandva (形.) (喜と憂等の如
 き)相違の事に對して平等な
 る, 感動なき.
 nirmama (形.) 一切に對して平
 等なる; 煩惱なき.
 nirvicāra (形.) 伺察せざる, 顧
 慮せざる.
 nirviṣa (形.) 毒なき, 毒となら
 ざる.
 nivāsin (形.) 止住する.
 niś (女.) 夜.
 niśitha (男.) 中夜, 夜.
 niścaya (男.) 決定, 決斷; yaṃ
 kṛ 決心す, 誓ふ.
 niḥśaṅka (形.) 恐れなき, 苦慮
 せざる, 猶豫なき.
 nistejas (形.) 力なき, 弱き.
 niḥsāra (男.) 力なき, 虚しき; 眞
 價なき.
 nī 1. 導く; 過ぐす (又時に就て
 も用ゐる).
 ā+ 持ち來る, 取り寄す. (役.)
 持ち來らる.
 upa+ 導き來る, 將ひ來る.
 nīca (形.) 下等の, 賤しき.
 nīruja (形.) 健康なる.
 nīla (形.) 紺色の, 青き; 紺の.

(女.)nīli 藍.
 nīlivarna (形.) 藍色の.
 nu (不變辭) 今; 尙, 加ふるに;
 多分, 實に(殊に疑問のときに
 用ゐらる).
 nud 6. 推す, 追ふ, 漸く. (過.)
 nunna.
 pra+ 推し進む, 推し入る; 衝
 く. (過.) °punna.
 nūnam (副.) 現時; 直に; 確に,
 必らず.
 nṛ (男.) 男, 人.
 nṛpa (男.) 君, 王.
 nṛpati (男.) 君, 王.
 nṛśarīsa (形.) 賤しき, 下劣な
 る. (男.) 兇漢.
 netra (中.) 眼.
 no (副.) 不; no ced 爾らざる
 ときに, 爾らざる際に, 爾ら
 ざれば.

pa

pañikin (形.) 穢れたる, 塗られ
 たる.
 pañcatva (中.) 死. °m upagam
 死す.
 pañcau (數.) (107) 五.
 pañcaprakāra (形.) 五重の, 五
 倍の.
 pat 1. 降る, 落つる, 落ち入る,

落ち來る. (役.) 落とす, 夷ら
 ぐ, 殺す.
 ni+ 墜落す, 落ち來る. (役.)
 夷らぐ, 殺す.
 prañi+ (...の[業.爲.依.]前
 に投降す, (恭しく...の
 [業.爲.依.]前に屈服す).
 pati (68) (男.) 主; 夫, 已婚の男
 子.
 patita (pat の過.) 落ちたる.
 patitva (中.) 夫たること. °tve
 vṛ 選んで夫とす.
 patra (中.) 羽, 翼; 運搬具, 乗
 path (93) (男.) 道, 路.
 patha (男.) 道, 路. darśana 視界
 pathya (形.) 利ある, 愈す.
 pad 4. (爲自.) 彼方に往く.
 vyā+ (役.) 亡ぼす, 斃す, 殺
 す.
 ud+ 發生す, 發展す, 生長す.
 upa+ (過.) °panna 量に應じ
 たる, 相當なる. (副.) m.
 pra+ 到る; 同意す許す, 約す
 praati+ 加はる; 同意す. (過.)
 °panna
 sam+ 共にす, 發る, 起る,
 發生す. (過.) °pa na 共にし
 たる; 具へたる, 與へられた
 る, 所有したる
 pada (中.) 足.

padavī (女.) 跡; 道; 位置, 官;
 padastha (形.) 顯要の地位に立
 てる, 高位に居る.
 padārthā (男.) 物, 對象.
 padma (中.) 蓮華 (nelumbium
 speciosum).
 para (形.) 遠くにある, 遙かな
 る; 後の; 勝れたる; 最も好き,
 最勝の, 最大の, 最高の; (或こ
 とに) 専らなる, 全く心を委ぬ
 る (合成語); 他の, 異なる
 (男.) 異人, 敵. (副.) 又, 更に,
 tataḥ param 其次に; 然れど,
 併ら, param kiṃ tu 然れど,
 併ら, 爾るに.
 parajana (男.) 異人, 敵.
 parama (形.) 非常の, 甚はだし
 き; 最高の, 最良の, 最勝の
 (副.) °m.
 parasparam (副.) 相互に, 相互
 にて, 更互に.
 parākrama (男.) 威, 力, 強制.
 parāsara (男.) (古代著名の作家
 の名, 彼は viṣṇupurāṇa 等の
 書を造れりと傳ふ).
 parigraha (男.) 家屬; 婢僕; (總
 じて) 妾.
 paritusta (過.) 満足せる.
 paritrāṇa (中.) 守護, 保護.
 paripūrṇa (pari+ pūr の過.) 充満

したる.
 parimala (男.) 好香; 好香料.
 parikṣit (男.) (阿踰闍 [ayodhya] の古の王の名).
 parita (pari+i の過).
 parokṣa (形.) 見へざる, 秘密なる.
 parvata (中.) 嶺, 山.
 parvan (中.) (書物の)章, 部.
 palāya (palā+i を看よ).
 palāyanakriyā (女.) 遁, 逃走.
 paś 4. (129 備考) 見.
 paśu (男.) 畜.
 paścāt (副.) 爾來, 此より, 然るのち.
 paṇi (男.) 手; paṇau kṛ 手にて捉る.
 pāṇḍava (男.) pāṇḍu の末孫(即ち Yudhiṣṭhira).
 pāṇḍura (形.) 白き.
 pāṇḍuratā (女.) 白きこと; °tām gam 白くなる.
 pāda (男.) 足.
 pāna (中.) 飲み, 酒飲み; 飲物.
 pāpa (形.) 悪しき. (中.) 害, 苦痛; 罪, 犯罪, 過失.
 pāpaka (形.) 悪しき.
 pāpātman (男.) 悪を爲す人, 悪漢.
 pāṛthiva (男.) 主宰, 君, 王.
 pārśva (男.) 脇; pārśve 彼方に.

pālakatva (中.) 警誡官.
 pālana (中.) 保護, 守護, 統治, 支配.
 pālaya— 護る, 庇ふ.
 pari+ 護る; 治む, 支配す.
 pāvana (形.) 清む, 愈す, 償ふ.
 pāśa (男.) 罽索, 繩.
 piṇḍa (男.) 團, 土塊.
 pitṛ (男.) 父; (複.) 祖先.
 pipilikā (女.) 蟻.
 piśācaka (男.) (女.) °cikā (233) 惡魔, 鬼, 畢舍遮 (piśāca).
 piṣ 7. 碎く, 擣く, 粉碎す.
 pihita (pi=api+dhā [219, I, 5] の過) 覆はれたる, 埋まりたる, 昧ふされたる.
 pīḍ (役.) 惱ます, 痛ます.
 pīḍākara (形.) 害をなす, 痛を興ふ, 痛を起す.
 pīthin (形.) 飲む.
 pums (男.) (99) 男, 人.
 punya (形.) 恵む, 幸する; 善き, 信心ある; 神聖の; °loka (男.) 信心あるものの世界, 樂土. (中.) 善業, 善作, 宗教上の福業.
 putra (男.) 子; (女.) i 嬢, 童女.
 pumar (副.) 返りて, pu°da 返す, pu°i 還る, 復た來る; 復た, 再び.

更に, punah punah 再三; 更に又, 後に; 併ら, na pu° 併ら然らず; kiṃ pu° 何に況んや; yadi pu° 併ら設し..ならば.
 pur (女.) 都.
 pura (中.) 堡, 要塞を圍らせる都.
 puratas (副.) 前に(屬. 或は合成語).
 purandara (男.) 破堡者, (因陀羅 [Indra] の號).
 puraḥsara (形.) 先だつ; (合成語の尾にありては) 初として, 續きて, 俱に.
 purā (副.) 曾て; 古來.
 purāsruti (女.) 古傳説, 古説.
 puruṣa (男.) 男, 人; 最高の靈, 神.
 pulaka (中.) 身毛豎立(淫佚或は喜悅の相).
 pulakita (過.) 豎立せる毛を以て.
 puṣ 4.9. 榮へしむ, 長せしむ; 養ふ. (過.) puṣṭa 養はれたる; 營養の好き, 肥へたる, 膨りたる; 健康なる.
 puṣkarinī (女.) 池.
 puṣṭa (puṣ の過).
 puṣpa (中.) 華.
 puṣpita (過.) 花を開ける.
 pustaka (中.) 書物, 本.
 pūj (役.) 拜す, 敬ふ.

abhi+ 敬ふ, 敬禮す, 尊重す.
 prati+ 慶ぶ, 甘諾す.
 pūjā (女.) 敬禮, 尊崇; 恭敬.
 pūra (男.) 流, 洪水.
 pūru (男.) (yayāti と śarmiṣṭhā との子の名).
 pūrṇa (pī [219, II, 1] の過).
 pūrva (形.) 前の; 先だてる; 昔しの, 己前の. (副.) °m.
 pṛ vyā+ (29, 18) 營む, 苦心す, 働く.
 pṛthivī (女.) 地.
 pṛthivīpati (男.) 君, 王.
 pṛthivīpāla (男.) 君, 王.
 pṛthivīpati (男.) 君, 王.
 pṛṣṭhadeśa (男.) 後側; °śe (..の [屬.] 後に).
 pī 9. 充たす, 満たす. (過)
 pūrṇa (219, II, 1) 満たる; 經過したる (時). (役.) pūrāya— (206) 満たしむ, 足す.
 abhi+ (受.) pūryate (196) 満たつ; 満たさる.
 pari+ (過.) °pūrṇa 満たされたる, 満たる. (役.) 満たす.
 peya (形.) 飲に適したる, 飲まべき. (中.) 飲料.
 poṣaṇa (中.) 養ひ, 扶け, 護り.
 puṣita (puṣ の役. 過.) 育てられたる, 扶けられたる, 護られ

・ たる。
 paura (男.) 都人。
 paura (中.) 丈夫の力, 丈夫の
 氣, 勇氣, 勢, 力。
 prakāra (男.) 類, 方。
 prakāśana (中.) 照明; 顯示。
 prakīrtita (過.) 公言されたる;
 解決されたる; 名づけられた
 る; 稱する, 通ずる。
 prakṛti (女.) 本性; prakṛtyā 性
 來, 初めより, 即せる。
 prakopa (男.) 怒。
 prakhyā (女.) 容貌。(合成語の
 尾) 同 じ 貌 の, 似 たる。
 pracalana (中.) 前後上下に動く
 こと。
 pracura (形.) 多き, 多數の, 頻
 繁なる。
 prach 6. (129, 15) 問ふ; (或ひと
 に[業]或ことを[業]) 問ふ, 質
 す。(過.) prsta (219, I, 2).
 pari+ 尋ぬ。
 prajā (女.) 後裔, 末孫; 人民, 庶
 民; 臣民。
 pranaya (男.) 親好, 信任, 愛。
 pranayin (形.) 愛されたる, 愛
 らしき。(男.) 親友, 所愛者。
 prati (副.前置詞) 對して, 彼の
 方に, 上の方に, 彼の後方に, 關
 して。(大概は作業格先にあり)。

pratidinam (副.) 毎日。
 pratidiśam (副.) 總の方に。
 pratideśam (副.) 一切の土地に。
 pratikāra (男.) 治療劑, 豫防劑,
 解毒劑。
 pratyakṣam (副.) 眼前に, 現前
 に。
 pratyac (82) (女.) pratici 西の。
 pratyakhyāna (中.) 謝絶; 拒絶,
 排斥。
 pratyūṣa (中.) 曙光, 日出。
 prath 1. 擴がる。
 prathama (形.) 第一の, 最勝の。
 (副.) °m 初に; 昔し, 曾て。
 pradātavya (形.) 嫁すべき。
 pradāna (中.) 施與, 棄捨; kaṣṭha°
 木を積んで火葬の薪とす。
 pradeśa (男.) 方, 場。
 pradhāna (形.) 最勝の, 最上の,
 主要の; (中.) 主要事, 最上, 重
 要。
 prabhā (女.) 光, 輝, 容貌。
 prabhāta (中.) 日出。
 prabhāva (男.) 威, 力。
 prabhu (形.) (...に於て[屬]) 自
 在を得たる; (男.) 主, 統治者。
 prabhutva (中.) 主たること, 主位。
 prabhūta (過.) 多き。
 prabhṛti (形.) 始めとする, 等;
 (副.) よりのち; adya pra° 今日

よりのち; 今よりのち; tatah
 pra° 其よりのち, 爾の時以來。
 pramāna (中.) 尺度; 標準; 依
 憑, devaḥ pramānam 王が決定
 せざる可らず, 王が裁断する
 を要す。
 prayojana (中.) 起因, 主旨, 目
 的, 趣意. kimatra prayojanam
 vartate 其處に何に事ありや。
 pravāna (形.) 傾むく, 進んで爲
 さんとする。
 pravāda (男.) 巷説, 風説。
 pravāla (男.中.) 條, 朶, 幼枝; 珊
 瑚。
 pravīra (男.) 大勇者。
 praveśa (男.) 入場; 到達。
 prasasta (過.) 賞讚されたる; 適
 したる, 便なる。
 prasava (男.) 分娩, 産, 生。
 prasāda (男.) 恩, 惠; °dam kr
 惠を垂る, 恩を施す; 宥恕。
 prasūti (女.) 子孫, 兒。
 prahāra (男.) 擊打, 射. pādapra-
 hāraṃ dā 蹴る。
 prakāra (男.) 牆, 壁。
 prāgvṛttānta (男.) 古事。
 prājña (形.) 聰慧なる, 伶俐な
 る。
 prāñjali (形.) 合掌(兩手を伸し
 左右の指と掌とを合し中央に

少しく空處を存す)したる, 兩
 手を前方に伸したる(尊敬及
 び卑下の相)。
 prāna (男.) 息, 呼吸; 生命(複)。
 prānin (男.) 生物, 動物, 人。
 prātar (副.) 早く, 晨に; 翌朝に,
 翌日に。
 prānta (男.中.) 側, 邊, 尖端。
 prāpta (pra+āp の過)。
 prāptavara (形.) (女.) ā持參金
 を得たる。
 prāpti (女.) 達, 得。
 prāya (男.) 多數; (合成語の尾
 に在るとき)大部分を占むる, 成
 れる, 似たる. prāyeṇa 大抵,
 普通。
 prasāda (男.) 宮殿。
 priya (形.) 愛らしき, 快よき;
 (女.) ā 所愛者, 妻; (中.) 可愛の
 物, 望ましき物, 嗜好物。
 prīti (女.) 喜。
 plu 2. (役.) 灌ぎ懸る, 沿びせる。

pha

phaṭā (女.) 龍頭。
 phañā (女.) 龍頭。
 phañādhara (男.) 蛇。
 phala (中.) 果。

ba

bata (感歎詞) 嗟, 禍哉.
 bandh 9. (157) 縛る, 拘束す.
 ni+ 緊く縛る. (過.) °baddha (219, I, 3) 拘束されたる.
 bandhu (男.) 親類, 朋輩, 朋友.
 bala (中.) 力, 強さ, 威勢. (男.) (parikṣit の子の名).
 balavat (形.) 強き, 力ある; 勢ある.
 balātkṛta (形.) 克れたる.
 baliyas (形.) (102) 一層強き, 一層勢ある.
 bahiṣkṛta (形.) 閉ぢ出されたる; 省く, 闕く.
 bahu (形.) 多き; kiṃ bahunā 何ぞ多言するを須ひん.
 bahuvrīhi (形.) 多の米を有せる, 米に富める.
 bāḥam (副.) 善哉, 同意なり, 爾るべし, 可なり.
 bāndhava (男.) 門徒, 親戚.
 bāla (形.) 幼なき. (男) 兒, 童男; (女.) ā 童女, 所愛, 少婦.
 bālaka (男.) 童男, 少年, 子.
 bāspa (男.) 涙.
 bāhu (男.) 臂.
 bāhya (形.) 外に在る; 家族等に非ざる, 異なるる.

bisa (中.) 蓮根.
 bīja (中.) 種子.
 buddhi (女.) 洞見, 悟る, 理性, 思慮, 精心.
 buddhimat (形.) 聰とき, 穎敏なる.
 budbuda (男.) 水泡, 泡.
 budh 1. 覺る; 知る, 認む; 想像す, 推測す.
 ni+ (..を[屬.]聽く, 聞く.
 sam+ (役.) 注意せしむ, 教誨す, 知らせむ.
 bṛhat (形.) 大なる, 強き, 高き.
 brahman (中.) 最高にして人格を越えたる神, 梵 (brahman); 婆羅門位, 僧侶, 第一姓. (男.) 印度教の最上の神, 梵; 僧, 婆羅門.
 brāhmaṇa (男.) (女.) ī 第一姓に屬する人, 婆羅門.
 brāhmāṇḍa (中.) 梵の卵, 宇宙, 世界.
 brū 2. (135) 語る, (或ひとに[業.]語る, 言ふ.

bha

bhakti (女.) 歸命, 愛, 信仰.
 bhakṣ 1.10. 咬む; 食ふ.
 bhakṣya (中.) 食物.

bhagavat (形.) 尊き, 高尚なる, 神聖なる.
 bhāṅga (男.) 破壊; 滅没, 敗滅, 亡.
 bhāṅgura (形.) 破壊すべき, 滅すべき.
 bhaj 1. (182) 分つ; 享く; 愛す, (..と[業.]通す.
 vi+ 分つ.
 pravi+ 分つ.
 bhāñj 7. 壊る, 毀つ. (過.) bhagna (219, II, 2) 破壊されたる; bhagnāśa (形.) 豫期と違へる, 希望と違へる.
 bhadra (形.) 善き, 美はしき, 尊とき. (呼.) bhadra (男.) °dre (女.) 吾が親友よ.
 bhaya (中.) (..の[從.]怖畏.
 bhyamkara (形.) 怖畏を引起する.
 bharga (男.) (梵[男.]の號).
 bhartṛ (男.) 夫, 既婚の男子, 男.
 bhavat (女.) ī (86) (第二人称代名詞の敬語).
 bhavitavya (形.) 有らざる可らざる, 有るべき; (中. 非人称にして具. と俱に) tvayā sukhinā bhavitavyam 汝は幸福なるべし.
 bhasman (中.) 灰.

bhasmasāt (副.) 灰に; °tkṛ 變じて灰と爲す.
 bhāṅḍa (中.) 器, 樽, 瓶.
 bhārata (男.) 婆羅多 (bharata) の後裔. (女.) ī (辨財天女の一の名).
 bhārgava (男.) 敦栗瞿 (bhṛgu) の後裔.
 bhāryā (女.) 妻, 婦.
 bhāva (男.) 轉, 有; 感情, 性情. °vaṃ pāpakam kṛ (..に對して[依.] 惡意を懷く.
 bhāvin (形.) 有るべき.
 bhāvinī (女.) 端嚴なる美人.
 bhāṣ 1. 説く.
 ā+ 談しかける.
 bhikṣā (女.) 乞.
 bhikṣu (男.) 乞匄; 乞匄僧.
 bhikṣuka (男.) 乞匄; 乞匄僧.
 bhid 7. 破る, 壊る. (過.) bhinna (219, II, 3) 壊られたる.
 nis+ 貫通す, 傷つく, 穿つ.
 bhīṣaj (男.) 醫師.
 bhī 3. (145) (..を[從.]怖る. (過.) bhīta 怖る, 臆病なる, 驚ろかされたる.
 bhīru (形.) (女.) bhīru (又は) bhīrū 臆病なる, 怯るゝ.
 bhukta (bhujの過.) 食はれたる. (中.) 食物, 食料.

bhuj 7. 食ふ; 受用す, 利用す, 使用す.
 upa+ 受用す, 使用す, (...より[業.] 利益を得.
 bhujā (男.) 臂.
 bhujāngama (男.) 蛇.
 bhū-1. (127) 轉ず, 發生す; (或こ
 とを[屬.] 共にす, 起る, (或ひ
 とに) 會ふ; 有る; 住ふ, 在る.
 (過.) bhūta (別に出す).
 anu+ 受用す.
 abhi+ 勝つ, 克つ, 痛むる,
 惱ます.
 pari+ 克つ, 捷つ.
 sam+ 發生す, (...より[從.]
 出づ, (...と[屬.男.] ..の間
 に[依.女.] 生まる. (役.) (或
 ひとを[業.] 敬禮す; 何事か
 あるべきことを認む; 假定
 す; (受.) 似る.
 bhū (女.) 地.
 bhūta (bhū の過.) 轉じたる.
 (中.) 物.
 bhūtala (中.) 地面, 地.
 bhūbhṛt (男.) 君, 王.
 bhūmi (女.) 地.
 bhūmikā (女.) 層樓; saptabhū-
 mika (形.) 七層樓の.
 bhūyas (形.) (102) 一層大なる,
 一層劇しき, 一層多き. (副.)

尙多く, 甚はだ, 大ひに, 復,
 新に.
 bhūṣ 1. 飾る.
 bhūṣaṇa (中.) 莊飾.
 bhṛ 1.2. 運ぶ.
 bhṛgu (男.) (古仙人の名).
 bheṣaja (中.) 治療劑, 解毒劑.
 bhoga (男.) 受用.
 bhos (感歎詞) (38 備考) よ.
 bhram 1.4. (128, 13) 彷徨す, 逍
 遙す.
 bhraj 1. (爲自.) 光る, 輝く.
 bhrātṛ (男.) 兄弟.

ma

makaradhivaja (男.) 愛の神.
 maghavan (形.) (89) 仁惠なる.
 (男.) 因陀羅の號.
 maṅgalāyatana (中.) 吉祥處, 吉
 祥坐.
 majj 1. 沈む.
 ud+ 浮む.
 ni+ 沈む.
 maṅḍalin (形.) 地方, 土地, 國,
 を支配せる; m° nrpa 地方長
 官, 縣知事.
 maṅḍūka (男.) 蛙.
 mati (女.) 意思, 思想, 信仰; 分
 別, 覺悟, 了解.
 matkūpa (男.) 床蟲.

mattas (mad [58 備考]の從).
 matsya (男.) 魚.
 mad (111) (第一人稱 代名詞の
 語幹); 我.
 mada (男.) 醉, 酩酊; 姪佚; 憍
 逸, 高貢, (阿修羅[asura]の名).
 madana (男.) 體慾, 情欲, 肉慾.
 madyapa (男.) 酩酊者, 好酒家.
 madhura (形.) 甘き, 愛らしき,
 妙なる.
 madhya (中.) 中央; madhye 中
 央に, の中に, 間に, 中央へ,
 中の方へ.
 madhyaga (形.) 内に在る, 居る.
 madhyama (形.) 中央の.
 man 4. (爲自.) 惟ふ, 信す, 認
 む, 謂ふ.
 manas (中.) 意, 精神, 心.
 manuṣya (男.) 人.
 manojava (形.) 意の如く速やか
 なる.
 maroratha (男.) 願.
 monorama (形.) 心を喜ばしむ
 る, 殊妙なる, 美はしき, 愛ら
 しき.
 mantra (男.) 文, 聖文, °tas 聖文
 を誦する間に; 咒文.
 mantravādin (男.) 咒文を誦す
 る人, 巫覡.
 mantraya— ā+ 談しかける,

問ふ.
 mantrin (男.) 輔相.
 manth 9. (187) 攪動す.
 pra+ 夷らぐ, 斃す, 殺す.
 manda (形.) 徐ろなる; 遲緩な
 る, 幼稚なる, 鈍き.
 manyu (男.) 怒.
 manyumat (形.) 怒りたる.
 maraṇa (中.) 死.
 martya (男.) 死すべき物, 人.
 maryādā (女.) 境界.
 mala (男.) 垢.
 mahat (形.) (85) 大なる; 高位の,
 顯要の; 長き (時).
 maharṣi (男.) 大仙.
 mahā° (形.) (241) 大なる.
 mahātman (形.) 貴き, 君子の;
 高位の, 勢ある, 強き.
 mahārāja (男.) 大王, 大君主.
 mahiṣa (男.) 水牛; (女.) i 牝水
 牛; 第一の王妃.
 mahi (女.) 地; mahiṃ gam 地
 上に倒る.
 mahipāla (男.) 君, 王.
 mahiyas (形.) (102) 一層大なる,
 一層勢力ある; 甚はだ大なる,
 甚はだ勢力ある, 甚はだ顯要
 なる.
 mā (副.) (125) 莫.
 mā 3. (爲自.) (148) 量る, 測定

す, 區域を劃す. (過.) mita (219, I, 5).
 mācīram (副.) 猶豫なく, 直ちに, 至急に.
 mātāmaha (男.) 母方の祖父.
 mātr (女.) 母.
 mātra (中.) 量; (合成語の尾) 唯, 唯是のみ, 單に.
 mādrśa (形.) 我が類, 我に等しき.
 māna (男.) 貢高, 慢; 懊惱, 怨恨.
 mānava (男.) 人. °vendra 君, 王.
 mānasa (中.) 精神, 心, 意.
 mānuṣa (形.) (女.) i 人の. (男.) 人.
 mārkandeya (男.) (古仙の名).
 mās (男.) 月.
 mähātmya (中.) 大なること, 威勢, 價值, 權貴.
 mitabhāsin (形.) 言ば少なき.
 mitra (中.) 朋友.
 mitratva (中.) 朋友たること.
 mithas (副.) 俱に, 互に, 各自に.
 mithyā (副.) 顛倒して, 虚偽にて, 不實にて; 徒らに, 空しく. (kr と俱に) 不實ならしむ.
 mithyāsamārambha (形.) 功空しき, 企業徒勞に屬せる.
 mil 6. 會ふ, 集まる; 衝突す.
 miś 6. 目を開く, (唯だ現分. にのみ用ゐらる) 目前に.
 mina (男.) 魚.

muktājālamaya (形.) 眞珠より成れる.
 mukha (中.) 口; 面; 孔. mukhe-na 由て, 媒介にて. (合成語の尾の女.) i.
 mugdha (muh の過. [54 備考 1]) 可憐なる, 天真の, 單純の, 癡呆の.
 mugdhasvabhāva (形.) (女.) ā 無經驗なる, 罪なき, 天真の.
 muc 5. (129, 16) 放つ, 赦す, 解く. muktvā (..を〔業.〕除ひて. vi+ 容るす, 廢す; 解く; 投ぐ, 擲つ, 發射す.
 mud 1. (爲自.) 歡こぶ. (過.) 歡こばされたる, 悦ばしき.
 pra+ (過.) 歡こばされたる, 悦こばしき.
 mud (女.) 歡喜, 慾.
 muni (男.) 賢人, 行者, 婆羅門, 牟尼.
 muh 4. 迷ふ, 思慮を失ふ, 明らかなる知覺を失ふ. (過.) mugdha (及び) mūdha (54 備考 1).
 muhur (副.) 毎瞬時, 重ねて; 忽ち.
 muhūrta (男.) 瞬時; °rtat 一瞬の後, 直ちに.
 mūdha (muh の過. [54 備考 1]) 癡呆の, 愚かなる. (男.) 癡人, 愚者.

mūtra (中.) 尿.
 mūrka (男.) 癡人, 愚者.
 mūrta (女.) 形狀, 體; 像.
 mūla (中.) 根; 基本, 初.
 mṛ 6. (爲自.) (129, 18) 死ぬ. (過.) mṛta 死したる.
 mṛga (男.) 鹿.
 mṛgaya— 逐ふ, 狩る; 探索す; 窮追す.
 mṛgayā (女.) 獵; °yām gam 出獵す.
 mṛgāṅka (男.) 月.
 mṛj 2. 6. 拭ふ. (過.) mṛṣta (47) 清き, 素き.
 mṛnāla (中.) 蓮根.
 mṛta (mṛ の過.) 死したる.
 mṛtyu (男.) 死.
 mṛd (女.) 粘土, 泥.
 mṛṣta (mṛj の過. [47]).
 moha (男.) 迷, 混亂; 欺き, 惑はし, 癡.
 mauktika (中.) 眞珠.
 mauna (中.) 默.
 mreḍ 1. ā+ (役.) 重複す.

ya

ya (yad を看よ).
 yakṣeśvara (男.) 藥叉 (yakṣa) 主 (財寶の神なる鳩鞞羅 [kuvera] の號).

yaj 1. 祀る. (役.) (或ひとに〔業.〕代りて祭祀僧として働く, (或ひとに代りて祀る).
 yajña (男.) 供物.
 yajñāyatana (中.) 獻供場, 獻供所.
 yajñīya (形.) 供物とするに適合せる.
 yat 1. (爲自.) 勤む.
 nis+ (役.) 交付す, 還す.
 pratinis+ (役.) 還す.
 yatas (副.) 何處よりなりとも; 何處にても; 何處へなりとも; 故に, 以て. (直話或は詩句の初には具等の序詞として用ゐらる).
 yati (男.) (那臘沙 [naluṣa] の子の名).
 yatna (男.) 勤勞; yatnam kr (..の爲に〔依.〕勤勞す).
 yatra (副.) 何處にても, 何處なりとも, 何なりとも (58 備考); 何處へなりとも, 何れへなりとも, 何時にても.
 yathā (關係副詞. 接續詞) 如く; 然様に, 然るが爲に; yathā tathā の如く是の如く; と等しく. (直話の初には其の序詞として用ゐらる).
 yathākāmanam (副.) 隨意に.
 yathākālopapannam (副.) 時の状態に應じて.

yathāgatam (副.) 従て來りし如く.
 yathābhīṣṭadīśam (副.) 所欲に隨つて何方へなりとも.
 yathāvṛttam (副.) 起りし如く.
 yathotsāham (副.) 力に應じて.
 yad (關係代名詞) (116) 有もの, yadvā kim cid 何なりとも, yo yad 隨一が; yadyasmai 隨一に. (接續詞) 若然るならば, 然るときに, 然りと雖も, 或とき, ときに; ことのために; 以て, 故に. (直話の初には其の序詞として用ゐらる). yena 其に由て, 夫ゆへに; 其に由るがゆへに, 然るがために, yasmāt 故に, 以て.
 yadā (接續詞) ときに.
 yadi (接續詞) ならば; yadyapi 縱令然るも; yadyevam 設し然りとせば; 斯の如くして; vā ... yadi vā ... か或は.
 yadu (男.) (yayāti と devayāni との子の名).
 yam 1. (129, 11) 制す.
 ā+ (過.) °yata 擴ぐる; 長き.
 ud+ 擧ぐ, 上ぐ, 震ふ. (過.) udyata 準備する, 用意したる, 決定したる; 勞する, 勤むる.
 upa+ (爲自.) 結婚す.

ni+ (過.) °yata 確定したる, 決定したる, 確實なる.
 pra+ 與ふ, 交付す; 與へて妻とす; 出す, 還す.
 yama (男.) (死の神の名); 閻魔 (yama).
 yayāti (男.) (那隴沙 [nahuṣa] の子の名).
 yava (男.) 穀; 麥.
 yavasa (中.) 草, 餌.
 yā 2. 行く, 往く, 過ぐ,
 abhi+ (...へ[業.] 到る.
 ā+ 此方へ來る, 近づく.
 samā+ 此方に來る.
 upa+ (...へ[業.] 到る.
 pra+ 途に上る, 出發す, 行く.
 yāc 1. 乞ふ, 哀願す.
 yātudhāna (男.) 鬼, 惡魔.
 yātrā (女.) 行列.
 yāna (中.) 運送具, 運搬器, 乗り, 終生.
 yāvāt (形) 同大の, 同數の. (副.) 廣に隨て, 多に隨て, 屢しばなるに隨て, 甚はだしきに隨て; 間に; 暫時, 中間に; ときに; ...の間は, ...せしときは. (前置詞) (業. と俱に) あいだ; まで.
 yugala (中.) 偶.

yuj 7. 繋ぐ, (...を[具.] 具ふ. (受.) (或ことを[具.] 共にす. yujyate 相應す. (過.) yukta (...に[依.] 繋がれたる, (...にて[依.] 軛されたる; (...を[具.] 具へたる, (...にて[具.] 充されたる; 相應する, 適度なる, 適當なる. (副.) °m. samā+ (過.) 具へたる, 付與されたる.
 ni+ (役.) (或ひとに[業.] 或ものを[具.] 供給す, 付與す.
 pra+ (過.) 軛されたる; 果されたる, 完結されたる; 指示されたる, 引起されたる, 命令されたる.
 yuddha (中.) 戦闘, 戰爭.
 yudh 4. 闘ふ.
 yuvan (83) 少かき.
 yuvām (tvad を看よ).
 yūtha (男.中.) 隊, 群; 聚.
 yogin (男.) 觀行者, 瑜祇 (yogin).
 yogya (形.) 符合する, 適應したる, 能する, 堪能なる.
 yojana (中.) (里程の量, 約そ我國の四里), 踰繕那 (yojana).
 yoddhṛ (男.) 戰鬥者; 兵士.
 yauvana (中.) 壯年.

ra

raṁhas (中.) 迅速.
 rakṣ 1. 守る, 保つ, 護る, 衛る; 保存す, 蓄ふ.
 rakṣāpuruṣa (男.) 守衛者.
 raṅga (男.) 色.
 rajaka (男.) 洗濯者; 染色者.
 rañj 4. (129, 17) (役.) 喜こぼす, 福す, 非常に歡喜せしむ.
 ann+ (役.) (過.) 喜こぼされたる, 樂しめる.
 rata (ram の過. [219, I, 4]) (...を[依.] 喜こべる, 樂しめる, 好む, 愛する.
 ratna (中.) 眞珠; 寶.
 ratha (男.) 車.
 rathakāra (男.) 造車者, 木匠.
 rabh 1. (爲自.) ā+ 着手す, 始む(過.) ārabdha 着手したる, 始めたる. (絶對法) ārabhya (...より[從.] 以來.
 ram 1. (爲自.) 感動す; 悦ぶ; 樂しむ; 歡ぶ. (過.) rata (別に出す).
 ramaṇīya (形.) 殊妙なる, 適意の, 美はしき.
 ramya (形.) 殊妙なる, 恍忽たらしむ.
 ravi (男.) 日.

rasa (男.) 汗, 液.
 rahas (中.) 寂寞, 屏處. rahasi
 屏處に於て; 秘密に; 隠れて;
 (副.) rahas 秘密に.
 rahasya (中.) 秘密.
 rahahsatha (形.) 獨り在る.
 rahita (過.) 離れたる, 無き.
 rākṣasa (男.) 夜中の妖怪, 惡魔,
 羅刹 (rākṣasa).
 rāj 1. vi+ 顯はる, 卓出す, 光を
 放つ.
 rāj (男.) 王.
 rāja (241) (合成語の初又は尾に
 在りて rājan に同じ).
 rājakanyā (女.) 王女.
 rājan (男.) 王; (女.) rājñī 女王.
 rājaputra (男.) 王子. (女.) °rājñī 王
 女.
 rājapurusa (男.) 王の侍従, 王の
 役人.
 rājya (中.) 王國, 王土, 領域.
 rājyakriyā (女.) 施政, °yayā vṛt
 政を施す.
 rātri (女.) 夜.
 rādhi 4. 5. 成就す.
 ā+ (役.) 満足せしむ, 利益を
 求む, (或ひとに[業.]事ふ.
 samā+ (役.) 満足せしむ, 親愛
 せしむ, (或ひとに[業.]事ふ.
 rādhi (女.) (訖里瑟拏[kṛṣṇa] 即

ち毘瑟紐[viṣṇu]の所愛なる牧
 牛女の名).
 ru 2. vi+ 吠ゆ, 高く叫ぶ.
 rue 1. (爲自.) 樂ふ.
 rudhi 7. 拒む, 止む. (過.) ruddha.
 upa+ 停む, 斥ぞく, 妨ぐ, 止
 む.
 ruh 1. 生長す.
 ā+ 乗る; (過.) °rūḍha (219, I,
 6) 坐わる, 乗る.
 samā+ (過.) °rūḍha (...に
 [依.] 昇りたる, (...に
 [依.] 乗りたる. (役.) (206)
 乗らす, 上に置く.
 rūpa (中.) 形, 容貌; 美はしき
 形, 美麗.
 rūpaka (男.) ルーピー (rupee)
 (貨幣の名).
 rūpadhara (形.) 形を有せる.
 rūpin (形.) 形を有せる.
 roṣa (男.) 怒.
 roṣaṇa (形.) 怒れる.
 raudra (形.) 畏ろしき, 暴惡なる.

la

lakṣaṇa (中.) 相, 標, 屬性.
 lakṣmī (女.) 美麗; 落吃澁弼
 (lakṣmī) (美麗と幸福との女
 神にして毗瑟紐 [viṣṇu] の妃
 なり).

lag 1. (...に[依.] 附着す, 懸
 かる.
 laguḍa (男.) 杖.
 lajjā (女.) 羞耻.
 latā (女.) 蔓草.
 labh 1. (爲自.) (史詩には又爲他.
 に用ゐることあり) 達す, 得.
 (過.) labdha.
 upa+ 得, 知る, 覺る, 證す;
 認む, 聞く.
 vipra+ 僞はる, 誑かす, 欺
 く, 誣ゆ.
 lamb 1. (爲自.) ava+ (役.) (...
 ..より[依.] 垂下す.
 liṅga (中.) 男女の姓.
 lip 6. (129, 16) 塗る.
 upa+ 塗布す.
 lih 2. 舐る. (増上法) 強く舐る.
 līlā (女.) 遊戲, 滑稽 līlayā 戯れ
 て, 輕ろく.
 lubdha (過.) 貪欲なる.
 lok 1. (爲自.) 視る.
 ava+ (役.) 瞻る, 觀る.
 vi+ (役.) 視る, 知る.
 lokā (男.) 世界; °traya (中.) 三
 世界(天, 地面, 地下); (單數
 にて總じて言とき又は複數
 のとき) 人, 人民; (合成語
 の尾にありては複數を詮は
 す).

jīvaloka 諸人; pauralokāḥ 諸
 の都人.
 loc ā+ (役.) 思惟す, 熟考す.
 locana (中.) 眼.
 lobha (男.) 貪欲; 貪著, 貪.
 lomaka (男.) (仙人の名).
 lola (形.) 動搖する, 靜止せざる.
 laulya (中.) 貪婪, 貪求.

va

vaktṛ (男.) 語る人, 談す人, 語
 者, 談者.
 vaktra (中.) 口; 面.
 vakra (形.) 曲りたる; 曖昧の,
 詐僞の, 狡猾の.
 vac 2. (164, 180, 219, I, 1) 言ふ,
 語る; (或ひとに[業.] 語る, 談
 しかける. (過.) ukta 示された
 る, 告られたる, uktaṃ ca 而
 して曰く. vācya (別に出す).
 pra+ 言ふ, 語る.
 prati+ 答ふ.
 vacana (中.) 語, 談.
 vacas (中.) 語.
 vajra (男.) 金剛.
 vajralepa (男.) 聖; セメント.
 vaḍavā (女.) 牝馬.
 °vat (後接字) 如く.
 vad 1. (168) 談す, 語る.
 vadana (中.) 口; 面.

vadh 1. (現. の. 爲他. 及び爲
自. とには用ゐられず) 撃つ,
殺す.
vadhā (男.) 殺.
vadhū (女.) 婦, 已婚婦人.
vana (中.) 林.
vanaspati (男.) 樹.
vandaniya (形.) 尊重さるべき,
恭敬さるべき.
vap 1. 地上に散らす; 播く.
vapus (中.) 身, 體; 容貌, 形状.
vayas (中.) 齡; 壯年; 老年.
vayasya (男.) 朋友.
vayahstha (形.) 壯年の, 壯き.
vara (形.) 最上の, 最勝の; (...
より[從.]好き. (男.)願; varam
vr 願を建つ, 慈惠を請ふ; 持
參金.
varavarṇin (形.) 殊勝なる顔色
を有せる.
varuṇa (男.) (海の神の名即ち
我國の水天宮).
varga (男.) 群, 聚.
varjita (過.) 離れたる, 皆無なる.
varṇa (男.) 色.
varṇin (形.) 色を有す, 血色を有
す.
vartamāna (中.) 現在.
vartin (形.) 留まる, 居る.
vardhana (形.) 増す, 強むる, 進

むる.
varṣa (男.) 雨; śara° 箭の雨; 歳.
varṣadhara (男.) 閻人.
valabhid (男.) vala を殺せし人,
(因陀羅 [Indra] の號).
valmika (男.) 蟻群.
vaśa (男.) 意欲; 統治, 權力;
vaśam gam 服従す; 勝たしむ;
vaśe bhū 服従す. vaśāt 結果
として.
vas 1. 住ふ.
ni+ 居る, 住ふ.
prati+ 住ふ.
vasumatī (女.) 地; 方, 土地.
vastra (中.) 衣.
vah 1. (180. 219, I, 6) 乗せ行く,
運ぶ; 出す; 牽き出す; 裂く.
(役.) 欺く, 欺罔す.
vi+ (役.) (爲自.) 結婚す.
sam+ 俱に運ぶ; 乗せ行く.
valmi (男.) 火.
vā (接續詞) 或は; vā...vā...
か或は, ...なりとも或は..
..なりとも. (疑問, 及び關係,
代名詞の後) 恐らく, 多分. kim
vā...kim vā...恐らく...
か或は多分...か.
vākya (中.) 談, 語.
vāc (女.) 聲, 談, 語.
vācya (形.) 發音さるべき; 談さ

るべき; 嗤けらるべき, 嗤笑
に値する.
vāñch 1. 願ふ.
vāta (男.) 風.
vātaramhas (形.) 風の如く疾き.
vātāyana (中.) 窓.
vātsyāyana (男.) (kāmasāstra
[愛論]の作者の名).
vādin (形.) 談す, 語る.
vāpī (女.) 長き池.
vām (tvad を看よ).
vāmadeva (男.) (古仙の名).
vāmorū (女.) 美ばしき腰を有せ
る女.
vāmya (男.) (婆莫提婆 [vāma-
deva] の馬の名).
vāyu (男.) 風.
vāri (中.) 水.
vāridhi (男.) 海, 洋.
vārṣaparvāna (男.) (女.) ī vārṣa-
parvan の末孫.
vāsa (男.) 滯留, 居住.
vāsudeva (男.) 婆藪提婆 (vasu-
deva) の子, (訖里瑟拏 [kṛṣṇa]
即ち毗瑟紐 [viṣṇu]).
vāstavya (形.) 居住する. (男.)
居住者.
vāha (男.) 運送具, 乘, 運搬器,
牽引獸.
vāhana (中.) 運送具, 乘, 牽引獸.

vikrama (男.) 力, 氣力, 勇氣.
vikraya (男.) 賣.
vighraha (男.) 諍, 喧嘩, 戰爭.
vicetana (形.) 失神したる, 悶絶
したる.
viceṣṭita (中.) 行狀, 行儀, 動作.
vijana (形.) 人なき, 寂寥なる.
vijñāna (中.) 識; 熟練, 技能.
vitta (中.) 貨財, 財産.
vittavat (形.) 富める.
vid 2. (187) 知る, 識る.
ni+ (役.) 告ぐ, 報らす, 話す.
viddha (vyadh の過).
vidyā (女.) 知, 學問.
vidyut (女.) 電.
vidvat (形.) 學びたる, 智ある,
賢き, 聰明なる.
vidhi (男.) 指示, 規定; 所作,
準備, 事業; 運命.
vidhivat (形.) 規定に准せる.
vidheya (形.) 他人の意欲に従
ふ, 從順なる.
vinaya (男.) 溫良.
vinā (前置詞) (... [業. 又は
具.]なしに).
vipatti (女.) 不幸.
vipad (女.) 不幸.
viparīta (過.) 顛倒せる.
vipaścit (形.) 伶俐なる, 聰明な
る.

vipra (男.) 僧, 婆羅門.
viprarṣi (男.) 僧の仙人.
vibudha (形.) 聰明なる. (男.) 神.
vibhūṣaṇa (中.) 嚴飾.
vimala (形.) 無垢の, 淨き.
viyati (男.) (那臘沙 [nahuṣa] の子の名).
viyoga (男.) (...より[合成語]) 離別, (...と[具. 及び saha]) 離別.
vivāha (男.) 婚禮, 婚姻, 結婚.
vividha (形.) 種々の, 多種の.
viś 6. (...の[業.]) 中に入る, 趣むく, 至る.
ā+ 入る; 乗入る; (...に[業.]) 通曉す. (過.) °viṣṭa 充されたる; 執られたる; 壓倒されたる.
upa+ 坐る. (過.) °viṣṭa 坐る.
upopa+ (過.) °viṣṭa (或ひと)の側に坐りたる; —坐る.
pra+ 入る; (...に[業. 又は 依.]) 趣むく.
vaḥnau— 火葬の薪の上に昇る.
sam+ 坐る; 臥す.
viś (男.) 族; 民. (複.) 臣民; 民.
viśeṣa (男.) 差別; 類; 種.
viśeṣatas (副.) 第一に; 特別に; 格段に.

viśvācī (女.) (天女の名).
viśvāsa (男.) 信任.
viṣa (中.) 毒.
viṣaya (男.) 境, 範圍; 領域; °yam car 政治を施す, 治む. (複.) 感覺の對象, 感覺的受用物.
viśāda (男.) 狐疑, 落膽, 小膽.
viṣṇu (男.) (神の名), 毗瑟紐 (viṣṇu).
viṣṇupurāṇa (中.) (書物の名).
vismaya (男.) 驚嘆; 自負, 大膽.
vihārin (形.) 散歩する, 逍遙する.
vihita (vi+dhā の過).
vitarāga (形.) 煩惱なき, 世の一切の貪欲を離れたる.
virasthāna (中.) (苦行者の身體の態度の一種).
vīrya (中.) 力, 勢; 勇氣; 武勳.
vīryavat (形.) 強き, 勢ある.
1. vṛ 5. 9. (大抵爲自.) (或ひととして[業. 或は artham]) 己の爲に選ぶ, (或ものとして[依.]) 己の爲に選ぶ; 願ふ, 請ふ. (役爲自.) (...として [artham]) 選ぶ.
2. vṛ 5. 蔽ふ, 覆ふ. (過.) vṛta 満たる; 圍まれたる. (役.) 防ぐ, 障ふ.
ā+ (過.) °vṛta 満たる.
samū+ 禁止す, 防ぐ, 停止す.

(過.) °vṛta 繞られたる.
nis+ 安靜ならしめらる, 安靜なる.
pari+ (及び 役.) 繞る, 圍む.
(過.) °vṛta (及び) °vārita 繞られたる, 圍まれたる.
vi+ (過.) 暴露したる, 衣を脱したる, 裸かなる.
sam+ (過.) 繞られたる, 覆はれたる.
vṛka (男.) 狼.
vṛkṣa (男.) 樹.
vṛ 1. (爲自.) 始まる, 起る, 行ふ, (...と俱に [具.]) 働く; 留まる, 居る, 在る, 有る. śvā-padairvartitavyam 野獸は居るべし, — 住るべし, — 有るべし.
sam+ (過.) °vṛtta 到來したる, 圓滿したる, 轉じたる.
vṛttānta (男.) 興起, 發生, 事蹟, 非常事.
vṛtibī (女.) 動作, 所作.
vṛthā (副.) 徒らに, 空しく. vṛthā kṛ 唐捐にす.
vṛddha (過.) 老たる, (...のために [合成語]) 白髪となりたる. (男.) 老人, 白髪の老人.
vṛddhi (女.) 増長, 増加, 増上, 增多.

vṛdh 1. (爲自.) 増長す, 増加す, 自ら幸なりと惟ひ能ふ, 喜び能ふ.
abhi+ 更に大になる, 更に強くなる, 生長す.
vṛnda (中.) 群, 聚.
vṛndāraka (男.) 神.
vedanā (女.) 苦, 痛.
vedin (形.) 知る, 識る.
vṛp 1. (爲自.) 顛へる.
veśyā (女.) 妓.
veṣa (男.) 衣服, 被服.
vai (不變辭) (前の語を強ふするために用ゐらる).
vaikunṭhiya (形.) (毗瑟紐 [viṣṇu] の天なる) vaikunṭha に關係せる, °yā gatih syāt (彼等は) vaikunṭha 天に到るべし.
vaidya (男.) 醫.
vainateya (男.) vinatā の子(即ち伽樓羅 [garuḍa] 鳥).
vyagrata (女.) 繁忙.
vyatikrama (男.) 違犯, 損害. °mena vṛt 傷つく.
vyatyaya (男.) 交換.
vyath 1. (爲自.) 動搖す, 正氣を失ふ. (過.) 落膽したる, 混亂したる, 憂慮したる.
vyadh 4. (120, 15) 貫く, 傷つく. (過.) viddha (219, I, 2).

vyavahāra (男.) 所作, 行動, 興起.
 vyākula (形.) 静止せざる, 興奮
 したる, 混亂したる, 正氣なき.
 vyākulita (過.) 混亂したる, 興奮
 したる; 充たれたる, 満たる.
 vyāghra (男.) 虎.
 vyāta (vyā+dā の過).
 vyādhitā (過.) 病める.
 vyāpāra (男.) 營務, 勤勞.
 vyoman (中.) 天.
 vraj 1. 行く, 逝く, 逃走す.
 ā+ (...へ[業]) 往く.
 vrata (中.) 作, 作業, 職, 役, 分,
 禁戒, 規定.
 vrihi (男.) 米.

śa

śak 4.5. 能くす, 堪ゆ. (受.) śak-
 yate (不定法と俱に用ゐられ
 たるときはその不定法は受動
 の意義となる) yadi śakyate
 kartum 若し此が作され能ふ
 ならば.
 śakṛt (中.) 糞, 排泄物.
 śaktimat (形.) 力ある, 堪能なる,
 能する.
 śakya (形.) 容有の; 能く (有り
 [不定法] 得る, 能く (作され
 [不定法] 得る.
 śakra (男.) (因陀羅[indra]の號).

śaṅk 1. (爲自.) 苦慮す.
 pari+ (史詩は爲他. に用ゐ
 る)(某人を)怪しむ, (某人に
 [業]) 頼らぬ, (某人を) 邪推
 す.
 śaṅkā (女.) 怖畏.
 śaṅkha (男.) 螺貝.
 śacīpati (男.) 舍脂 (śacī) の夫, (因
 陀羅[indra]の號).
 śata (中.) 百, śataṃ śatam 毎百.
 śatakratu (男.) (因陀羅[indra]
 の號).
 śatru (男.) 怨.
 śap 1. 咒ふ, 咒詛す.
 śabda (男.) 音聲, 喧騒, 呼號;
 語.
 śabdāya— (爲自.) 自ら音を發
 す, 哮る, 吠る.
 śam 4. (129, 13) 靜まる, 息む,
 消ゆ. (過.) śanta (219, I, 8) (別
 に出す).
 upa+ 消ゆ.
 śayana (中.) 牀坐, 臥床.
 śayyā (女.) 牀坐, 臥床.
 śayyāpālakatva (中.) 牀坐を護衛
 するの役.
 śara (男.) 箭.
 śarad (女.) 秋.
 śarīra (中.) 身, 體.
 śarmiṣṭhā (女.) (Yayātiの妃の名).

śaryāti (男.) (王の名).
 śala (男.) (parikṣitの子の名).
 śaśin (男.) 月.
 śākḥā (女.) 枝.
 śānta (śamの過. [229, I, 8]) 寂ま
 りたる, 一切煩惱を離れたる,
 寂靜を證得したる.
 śānti (女.) 寂靜, 安泰, 満足; 安
 樂, 幸福, 福樂.
 śāpa (男.) 咒詛; śāpaṃ dā 咒詛
 す.
 śālā (女.) 屋, 家, 室; 舍.
 śās 2 (52 備考 3. 141) 命令す.
 anu+ 教授す, 教ゆ.
 pra+ 指示す, 教ゆ, 統治す,
 支配す.
 śikṣita (過.) 教へられたる, 教授
 されたる.
 śikhara (男. 中.) 尖, 端, 頂.
 śikhin (男.) 火.
 śita (śoの過. [129, 15. 219, I, 5])
 鋭とき, 尖りたる.
 śibikā (女.) 輦.
 śilāpattaka (男.) 石板.
 śiva (形.) 善き, 親しき, 恵みあ
 る, 幸ひなる, 福樂ある. (中.)
 善, 惠. śivena 惠を以て.
 śiṣya (男.) 弟子.
 śī 2. (爲自.) (138) 臥す, 臥し居
 る; 眠る.

śighra (形.) 速なる. (副.) °m.
 śita (形.) 寒き.
 śila (中.) 性質, 性情, 習慣, dhar-
 maśila (形.) 正しき性質の, 正
 しき, 德義的; 善き風俗, 德
 行.
 śukti (女.) 貝, 眞珠貝.
 śukra (男.) (固有名詞にして金
 星の人化なる uśanas kāvya
 に同じ).
 śuci (形.) 清き, 澄める.
 śucīsmita (形.) 愉快に笑ふ.
 śuddha (過.) 清き.
 śubh 1. (爲自.) 美はしくある,
 端しくす, 人の目を惹く. (役.)
 飾る, 光彩を添ふ.
 śubha (形.) 潔き, 美しき, 良き.
 śuśrūṣu (形.) 柔順なる, 順ふ.
 śūra (男.) 武士, 勇者.
 śūla (男. 中.) 鎗, 投鎗.
 śūgāla (男.) 野干.
 śeṣa (男. 中.) 餘, 殘. (形合. の尾
 に在るとき) 其中にて餘れる,
 餘るものは唯だ是のみなる,
 prakāra° 壁のみを餘せる.
 śeṣatva (中.) 殘餘, 餘.
 śoka (男.) 憂, 苦.
 śobhana (形.) 美なる, 麗はしき;
 勝れたる, 相應せる, 至當な
 る.

śobhā (女.) 美. 嚴.
 śaurya (中.) 豪氣, 勇氣.
 śyena (男.) 鷹.
 śyenajit (男.) (dala の子の名).
 śrad (dhā を看よ).
 śram 4. (129, 13) 疲るる. (過.)
 śrānta (219, I, 8) 疲勞したる.
 śrama (男.) 奮勵, 劬勞, 疲勞.
 śri 1. ā+ (某人に) 會ふ, (某人
 と[業.] 共に) 來る, 達す.
 śrī (女.) 吉祥, 幸福, (美と吉祥と
 の女神), 室利 (śrī). (固有名詞,
 書題, 地名等の始に付加へら
 れたるときは其等の物の尊き
 こと又は卓越せることを証は
 す).
 śrīdevī (女.) 女神室利 (śrī), 吉祥
 天女, (毘瑟紐 [viṣṇu] の妃に
 して美と吉祥との女神).
 śrī 5. (151) 聞く, (某人の[屬.]
 ..するを) 聞く. (求欲法) śus-
 rūṣa (209) (某人に[業.] 順ふ.
 śruti (女.) 聞, 聽取す; 説, 傳説;
 聖典. (單. 總稱的) 諸聖典.
 śreyas (形.) (102) 一層善き, 一層
 勝れたる, 選取さるべき.
 śreṣṭha (形.) 最も善き, 最も勝れ
 たる.
 śloka (男.) 頌, 詩史の頌, 輸盧迦
 (śloka).

śvan (男.) (89) 狗. (女.) ṣunī (234)
 牝狗.
 śvabhra (男. 中.) 孔.
 śvas 2. (135) 息す, 喘ぐ.
 ā+ 息を回す, 回復す.
 paryā+ 回復す.
 vi+ (某人を[屬.] 信用す, (某
 人に[屬.] 己を委す. (過.) °śva-
 sta 顧慮せざる, 泰然たる.
 śvas (副.) 明日.
 śvāpada (男. 中.) 猛獸, 野獸.

ṣa

ṣaṁmāsika (形.) 六ヶ月の, 半年
 の.
 ṣaṣ (數.) (107) 六.

sa

sa (39 備考 1. 113) (tad を看よ).
 sa° (合成語の始にありて共通, 攝
 在, 等同, 等を証はす).
 saṁyāti (男.) (那臘沙 [reḥuṣa]
 の子の名).
 saṁśaya (男.) 疑; na saṁayah
 (此の中) 疑あることなし, 疑
 ひなく.
 sakala (形.) 全き, 充分の, 一切
 の.
 sakāśa (男.) 現在, 近隣; (業.) °m
 (...の) 彼方に, (從.) °sāt (...

..より) 此方に, より.
 saktu (男.) 穀類の粉末にしたる
 もの.
 sakhi (男.) (67) 朋友; (女.) sakhi
 (236) 女友.
 sagadgadā (副.) 訥りて.
 saṁkāśa (男.) 容貌. (形容合成語
 の尾にありては) (...の) 状
 をなせる, 等しき.
 saṁkula (形.) 充されたる, 満た
 る.
 saṁkramaṇa (中.) (...の中に
 [依.] 乗り入る.
 saṁgama (男.) 集會, 合會 (又男
 女の交接を指す).
 sacetana (形.) 思慮深き, sa° bhū
 思慮を發す, 知覺を發す.
 sajjana (男.) 善き人, 貴き人.
 saṁcaraṇa (中.) (...に因る [合
 成語]) 動搖.
 saṁcārin (形.) 動搖する.
 sañj 1. (129, 17) 懸り居る.
 ā+ (過.) °sakta 懸れる, 向け
 られたる.
 saṁjñā (女.) 名.
 sat (現分.) (214) 有る; 善き, 良
 き, 正しき.
 satatam (副.) 相續せる, 不斷の,
 恒の, 常の.
 satkula (中.) 善き種姓, 貴き種

姓, 尊き後胤.
 satkṛta (形.) 敬はれたる, 恭しく
 容れられたる, 親しく迎へられ
 たる, 好遇されたる.
 sattva (中.) 物, 萬物.
 satya (形.) 眞實の, 實有の. (副.)
 °m 眞に, 實に, 確に, 正しく.
 (中.) 眞實, 實有.
 satvaram (副.) 急に.
 sad 1. (129, 15) 坐る; 着坐す; 降
 る, 滅る, 消ゆ, 亡ぶ.
 ā+ (過.) °sanna 近き; (中.) 隣
 近. (役.) (某物に) 衝る, (某
 物に) 中る, 見出す, 得, 達す,
 獲; 入る, (...に[業.] 及ぶ.
 pratyā+ (過.) °sanna 近き.
 samā+ 達す, 及ぶ.
 pra+ 慈しむ, 慈しみを生ず,
 恕す. (過.) 懺謝されたる, 仁
 慈なる.
 sadā (副.) 常に, 恒に, 恒時に.
 sadvaṁdva (形.) (喜と憂等の) 相
 違事に對して感激する, 極め
 て感激し易き.
 sanātana (形.) (女.) i 不滅の, 永
 久の.
 sanātha (形.) 具へたる.
 saṁtuṣṭa (過.) 満足したる.
 saṁtoṣa (男.) 満足, 充分.
 saṁnibha (形.) 等しき, 似たる.

saputrabāndhava (形.) 子及び親戚と俱なる.
 saptan (數.) (107) 七.
 saptabhūmika (形.) 七層樓の.
 sabalumānam (副.) 大に尊敬して.
 sabhārya (形.) 妻と俱なる, 彼の婦と俱なる.
 sama (形.) 平らかなる, 滑らかなる; 等しき, 似たる, (...に [依.] 譲らざる, 同類の, 同様の; 同じき, 不變の.
 samadṛṣṭi (形.) 一切を見ること平等なる; 等しき情想の.
 samantāt (副.) 一切の方へ, 一切の方に向つて.
 samaya (男.) 時; 條件. °ye 正しき時に, 時の來りしとき.
 samasta (過.) 全き, 一切の.
 samāja (男.) 集會.
 samāna (形.) 等しき, (...に [具.] 異ならざる.
 samārambha (男.) 企圖, 初發.
 samīpa (中.) 隣近.
 samudra (男.) 海, 洋.
 samṛddhimat (形.) 滿せしむる, 相當せる.
 sampatti (女.) 幸福.
 sampad (女.) (單. 及び複.) 安寧, 富裕; 幸福.

sambhāra (男.) 資糧, 須用物, 須用の材料.
 samyak (形.) 正しき, 至當の.
 saras (中.) 池.
 sarpa (男.) 蛇.
 sarva (形.) 各の, 一切の.
 sarvatas (副.) 一切の方より; 遍ねく.
 sarvatra (副.) 遍ねく, 到處に; 總ての際に; 何時にても.
 sarvathā (副.) 總ての際に; 畢竟.
 sarvavid (形.) 一切を知れる; 遍ねく學びたる.
 sarvaśas (副.) 全く, 徹頭徹尾; 所有る方法にて. 恒に; 遍ねく.
 salila (中.) 水.
 sava (男.) 蘇摩 (soma) の獻供; 供物.
 savinayam (副.) 柔順に.
 savya (形.) 左の.
 savrīḍa (形.) 深く慚むたる, 赤面したる.
 saśiṣya (形.) 弟子と俱に.
 sasainya (形.) 軍と俱なる.
 sasmitam (副.) 笑ふて.
 sah 1. (大抵爲自.) (54, 備考 2) 堪ゆ, 忍ぶ; 能す, 堪能なる.
 abhyud + 堪能なる, 能くす.
 saha (副.) 俱に, (...と [具.] 俱に.

sahacāra (男.) 同行, 伴侶.
 saha-carin (男.) 同行, 伴侶.
 sahasā (副.) 俄に, 直に.
 sahasra (中.) 千.
 sahasraśas (副.) 千倍に.
 sahita (形.) 結合されたる, 合同したる; 俱なる; (複.) 一切の; sahitah sarve 皆俱なる.
 sā (tad を看よ).
 sāgara (男.) 海, 洋.
 sādḥ 1. (役.) 成就す, 遂ぐ, 竣功す.
 sādhu (形.) 善き, 貴き. (男.) 善き人, 貴き人. (副.) 善く, 正しく, 快よく, 美はしく. (命令法と俱に用ひらるるとき) いざ.
 sādhuvr̥tti (形.) 善き性質の, 良き風俗の.
 sādhya (形.) 成就し得べき, 成就さるべき.
 sānurāga (形.) 戀著せる, 深く愛著せる.
 sāntva (中.) 善き語, 鎮める語.
 sāntvaya — pari + 鎮む, 穩にす; 親しく話しかく.
 sāntvaya (形.) 族類と俱なる, 一族と俱なる.
 sāman (中.) 溫和, 善良; sāmnā 懇切に.
 sāmpratam (副.) 今.

sāyaka (男.) 箭.
 sāyudha (形.) 武器を着たる, 武装したる.
 sāra (男. 中.) 堅牢, 力, 強壯; 身代, 財産, 富; 中心, 要件, 精粹; 善, 最上, 最極.
 sārameya (男.) 狗.
 sārḍham (副.) (具.) と俱に, と.
 sāśanika (形.) 恐を懐ける, 疑惧せる.
 sāśva (形.) 馬を有せる.
 sāhasa (中.) 傲慢, 冒險, 大膽なる動作.
 sīṃha (男.) 獅.
 sic 6. (126 の 16) 灌ぐ.
 abhi + 灌ぐ; (...の [依.] 位に登す; (...の [依.] 職に就がしむ.
 siddha (形.) 成就されたる, 遠せられたる, 堪能なる, 成滿したる; 目的を達したる人; 出世間の力を得たる, 更に世間法に左右されざる.
 sīman (女.) 界區.
 sīmādhipa (男.) 隣國の君.
 su (副.) 好く, 善く, 大に. (數しば合成語の初に用ゐらる).
 sakanyā (女.) (saryāti の女の名.)
 sukha (形.) 楽しき, 快よき. (中.) 安康, 快樂, 喜悅, 幸福. (副.)

sukham (及び.) sukheṇa 快よく, 愉快に, 静かに, 容易に, 便利に, 劬勞なく.
 suklin (形.) 幸の, 快ばしき.
 sujana (男.) 善人.
 suta (男.) 兒, 子; (女.) ā女.
 sudarśana (男.) 善見 (毗瑟紐 [viṣṇu] の圓板).
 suduhkhita (形.) 劇しく惱める.
 suduha (形.) 容易に乳を搾らしむる.
 sudhā (女.) 石灰; kṛta 白堊を塗りたる; 甘露.
 sudhī (形.) 敏とき, 聰明なる.
 sunibhṛtam (副.) 全く秘密に.
 sundara (形.) 美はしき, 善き, 正しき.
 subhaga (形.) 幸なる; 麗はしき, 美はしき; 愛されたる. (女.) ā 所愛, 所愛の婦.
 subhrū (形.) 美はしき眉毛ある, 美はしき眉毛を有せる少女.
 sumanorama (形.) 甚はだ艶麗なる, 甚はだ美はしき.
 sumantra (男.) 好き眞言. 效驗ある眞言.
 sumahat (形.) (85) 甚はだ大なる.
 sumahātejas (形.) 甚はだ大なる威徳を有せる, 大威力ある.
 sura (男.) 天, 神.

surata (中.) 愛慾, 同衾.
 surandra (形.) 甚はだ怖るべき, 甚はだ暴き.
 sulabha (形.) 得易き; 低價なる.
 suvarṇa (中.) 黄金.
 suvrata (形.) 柔順なる, 柔和なる (動物に就て言ふ).
 suśobhana (形.) 甚だ美はしき.
 suśobhanā (女.) (蛙の王 āyu の女の名).
 suhr̥d (男.) 朋友.
 sū 2. (爲自.) (139) 生む.
 pra + (過.) °sūta 生れたる, 造られたる, 分出せる.
 sūkṣma (形.) 微細なる, 薄き; 分り様の; 捕ふ可らざる.
 sūta (男.) 御者.
 sūd (役.) 殺す, 亡ぼす.
 sūmṛta (中.) 喜悅, 安穩.
 sṛ 1. (127) 走る.
 anu + 追ふ, 逐ふ.
 nis + (役.) 放逐す, 放つ.
 sṛkkin (中.) 口角.
 sṛj 6. 排出す; 造る. (過.) sṛṣta.
 ud + (他處に [依.]) 出て去らしむ, (他處に [依.]) 去らしむ; 去らしむ; 抛つ, 出す.
 vi + 送る, 抛つ, 射る.
 setu (男.) 堤, 橋.
 senā (女.) 軍.

sev 1. (爲自.) 養ふ, 事ふ, 侍る, 敬ふ, (少婦に) 事ふ = 通す.
 ni + 事ふ, (少婦に) 事ふ = 通す.
 sainika (男.) 兵士.
 sainya (中.) 軍.
 soma (男.) 蘇摩.
 somaśarman (男.) (一小兒の名).
 saukanya (中.) sukanyā の説話.
 saudāminī (女.) (sudāman [雲] より来るもの, 即ち) 電光.
 stambh (役.) 硬く爲す, 不動に爲す, 無能力に爲す.
 sam + (役.) 硬く爲す, 不動に爲す, 無能力に爲す.
 stri (女.) (71) 女.
 °stha (合成語の終に在ときの形容詞) 住まれる, 在る.
 sthala (中.) 乾ける土地, 陸.
 sthā 1. (129, 16) 住まる, 居る, 在る. (過.) sthita (219, I, 5) 住まる, 立つ, 居る, 在る. (役) sthāpaya— (205) 置く.
 adhi + (過.) °sthita 占られたる, 守られたる, 警護されたる.
 anu + 成就す. (過.) °sthita 成就されたる, 圓滿されたる.
 ava + 下方に行く, 降る.
 ud + (53, 備考 2) 起き上る, 上る.

samud + 起き上る; 現はる, 出で来る, 顯現す.
 upa + 往く; 到る; 近づく; 侍る. (過.) °sthita 來至したる, 達したる; (或ひとの [業.] 物となる; (或ひとに) 關したる.
 pra + 出づ, 起く. (過.) (... の爲に [爲.]) 出發したる.
 sthānu (男.) 串, 槓, 柱. °bhūta (形.) 槓の如く動かざる; 動かざる.
 sthāna (中.) 位置, 處; 住處; 地位, 階級.
 sthiti (女.) 止住; 法則, 規程; 習慣.
 snigdha (形.) 愛されたる.
 snelā (男.) 愛, 顧戀.
 spr̥s 6. 觸る.
 sam + 觸る.
 spluṭ 1. 6. 裂ける, 開く.
 sma (助辭. 數しば現在時の動詞に過去の意義を興ふ).
 smi 1. 笑ふ.
 smita (中.) 笑.
 smṛ 1. 憶念す. (過.) smṛta 憶念する, 念を係く.
 smṛti (女.) 憶念, 相傳, 傳説.
 sru 1. 流る.
 nis + (役.) 流れ去らしむ, 排出す.
 sva (形.) 自の, 彼の. (男.) 自に

屬する人, 從層者, 朋友.
 svaka (形.) 自の, 彼の.
 svakiya (形.) 自の, 彼の, (男.) 從
 屬者, 自に屬する人, 彼に屬す
 る人, 朋友.
 svajana (男.) 自に屬する人, 從
 屬者, 親類, 朋友. (總稱的に用
 ゐらるゝときは單數の形なる
 も多數を詮はす).
 svad 1. ā+ (役.) 美味を感ず,
 食ふ, 愛用す.
 svap 2.(135) 眠る; 眠るために臥
 す. (過.) (男.) supta (219, I, 1) 眠
 れる; 眠るために臥したる人.
 svapna (男.) 眠, 夢.
 svabhāva (男.) 自性, 質, 性.
 svabhāvakṛpaṇa (男.) (婆羅門の
 名).
 svayam (副.) 自ら, 己より, 自心
 より.
 svara (男.) 音, 聲.
 svarūpa (中.) 發生事, 顯現事, 發
 現する, (或は) 發現したる, 事
 件.
 svarga (男.) 天.
 svādhina (形.) 自在を得たる.
 svāmin (男.) 主, 支配者.
 svechā (男.) 自の欲, 自在の欲.
 svechayā (具.) 随意に, 意の
 所欲に隨ふて.

ha

ha (助辭) (僅に前句の語氣を強
 む).
 hata (han [219, I, 4] の過.)
 han 2. (91. 142. 180. 194. 198.
 200. 210. 214. 218) 打つ; 亡ぼ
 す, 殺す. (過.) hata 打れたる,
 亡ぼされたる, 毀たれたる, 殺
 されたる.
 (求欲法) (210) 殺さんと欲す,
 亡さんと欲す.
 ā+ (過.) °hata 撃れたる.
 ni+ 打ち倒す, 殺す. (過.)
 °hata.
 hanu (女.) 頬.
 hanumat (男.) (著名なる獼猴の
 名).
 hanta (感歎詞) いざ, さ一.
 hara (男.) 破壊者, (śiva の稱).
 hari (男.) 馬; (毗瑟紐[viṣṇu] の
 一名).
 harṣa (男.) 歡喜.
 harṣita (過.) 歡ばされたる.
 havis (中.) 供物(乳, 酪, 穀類等
 の火中に投せらるゝもの).
 has 1. 笑ふ.
 pra+ 哄笑す; (過.) °hasita 笑
 へる.

vi+ 哄笑す.
 hasta (252) (男.) 手.
 ha 3. 捨つ. (過.) hina (219, II, 1)
 捨られたる, 離れたる, 不足な
 る.
 vi+ 捨つ, 等閑にす.
 hāni (女.) 放捨; 損失, 損害.
 hi (副.) 是に由て, 勿論, 即ち;
 結極, 確に, 實に. (字を填るが
 ために用ゐらるること數しば
 あり [pleonastic]. na hi 是に
 由がゆへに爾らず, 定んで爾
 らず, 勿論爾らず.
 hiṃs 7. 害ふ, 苦痛を加ふ, 傷ふ.
 hiṃsra (男.) 他に苦痛を加ふる
 人; 惡漢; 肉食獸.
 himālaya (男.) Himālaya 山, 雪
 藏(山).

hiranya (中.) 黄金.
 hina (hā の過.)
 hu 3. 供養す.
 hr̥ 1. 取去る, 奪ふ.
 apa+ 導びき進む, 導びき去
 る, 已に伴なひ往く.
 vyava+ 出遊す, 遊歩す.
 ā+ 將ひ來る.
 pra+ 投ぐ, 放つ.
 vi+ 遊歩す, 楽しむ, 興する.
 hṛdaya (中.) 心.
 hṛdistha (形.) 心中に在る.
 hr̥ṣ 4. 歡こぶ. (過.) hr̥ṣta 歡こ
 ばされたる, 歡こべる.
 sam+ 歡こぶ, (過.) °hr̥ṣta 歡
 こばされたる.
 he (感嘆詞) さ一.
 hetu (男.) 因, 由.

造 頌 法

頌は句より成る。句を造るに種々の法あり。今本篇中に出たるものに就て其句法を明す。「—」は韻の長きを表し、「∪」は韻の短きを表す。韻の長短に就ては 127 條を看るべし。

1) sloka (輸盧迦)。輸盧迦は十六字二行より成る。各行每八字に句限(cesura)ありて四句二部に分る。最も普通なる様式は

∪∪∪∪ ∪— — ∪ | ∪∪∪∪ ∪— ∪∪
∪∪∪∪ ∪— — ∪ | ∪∪∪∪ ∪— ∪∪

2) 叙事詩の tristubh (怛利室都婆)。怛利室都婆は二行より成り各行各二部に分る。各部十一字或は往々にして十二字あり。各行の終は通常—∪—∪なるも十二字のときは∪—∪—なることあり。様式は

∪∪∪—∪∪∪—∪—∪

十二字の時 ∪—∪—∪∪∪∪∪∪∪∪

是類の頌は 101—103 頁に出たり。

3) āryā (阿梨耶)。字數に制限を設けず唯だ韻の量に由て造頌の法を定むるものあり此を阿梨耶と云ふ。阿梨耶は二行より成り、各行八句あり、每句四短音(mora)を有す。されど兩行ともに第八句は一字(catalectic)なり。第二行に於ては其第六句も亦單だ一短音「∪」を有す、

第一行にては其第六句は「∪∪∪∪」或は「∪—∪」なり。兩行ともに第二第四の兩句は亦∪—∪の形を用ゐることを得。第三句の次後に句限(cesura)あり。様式は

∪∪∪∪ ∪∪∪∪ ∪∪∪∪ | ∪∪∪∪ ∪∪∪∪ ∪∪∪∪ ∪∪∪∪ ∪
— ∪∪ — ∪∪ — ∪∪ — ∪∪ — ∪∪ — ∪—∪ — ∪∪
∪— ∪— ∪— ∪— ∪— ∪— ∪— ∪— ∪—
— — — — — — — — — — — —
∪—∪ ∪—∪

第二行も亦是に同じ、唯だ第六句の「∪」なるを異とす。是類の頌は 261 條の 12 に出づ。

發行所

東京市小石川區原町六番地

丙午出版社

印刷所

東京市牛込區櫻町七番地
日清印刷株式會社

印刷者

東京市牛込區櫻町七番地
太田雪松

發行者

東京市小石川區原町六番地
高島大圓

譯補者

荻原雲來



明治四十一年十月一日發行
明治四十一年九月廿八日印刷

(定價金壹圓)

